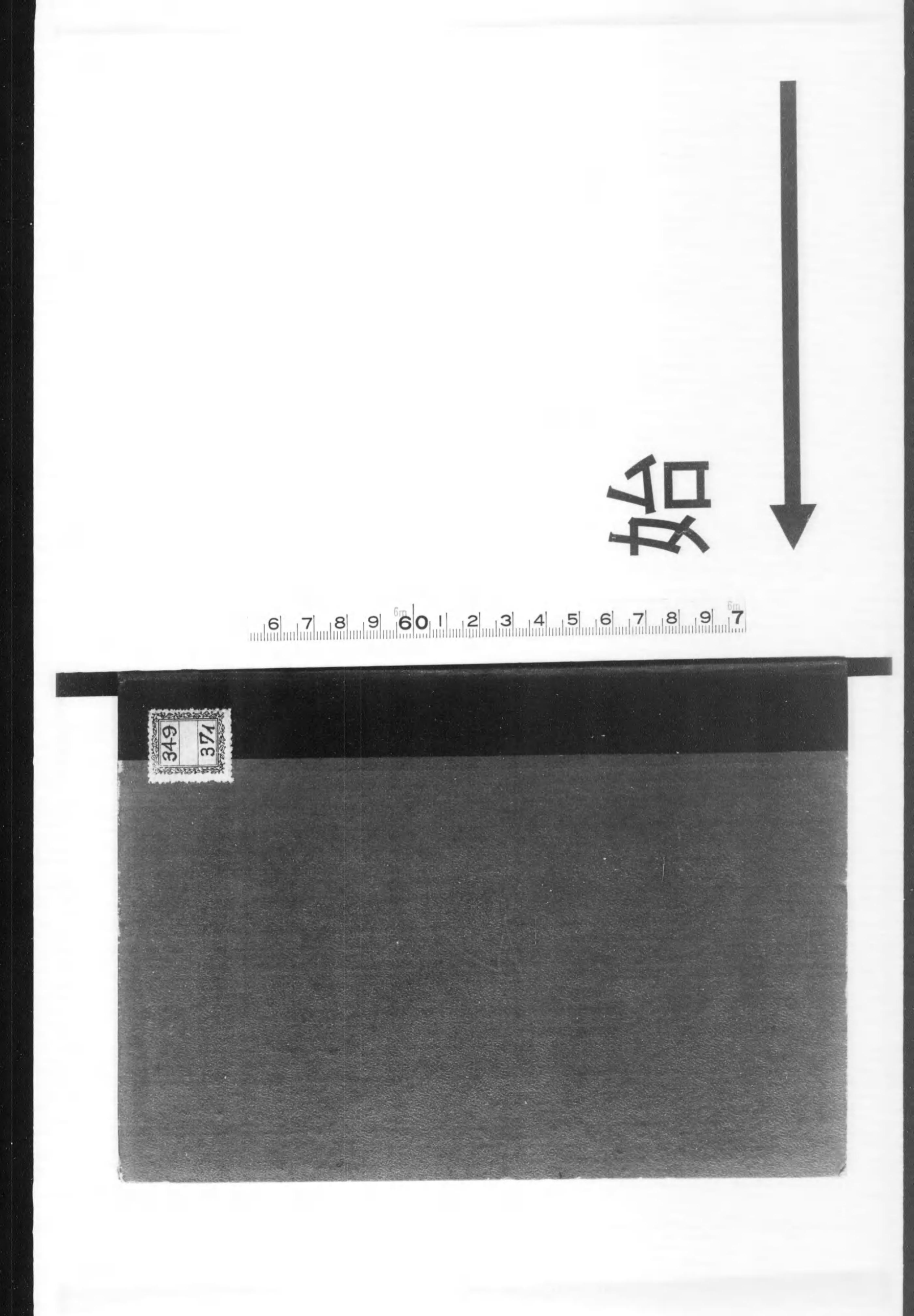

349
371

25 228

49

349-37

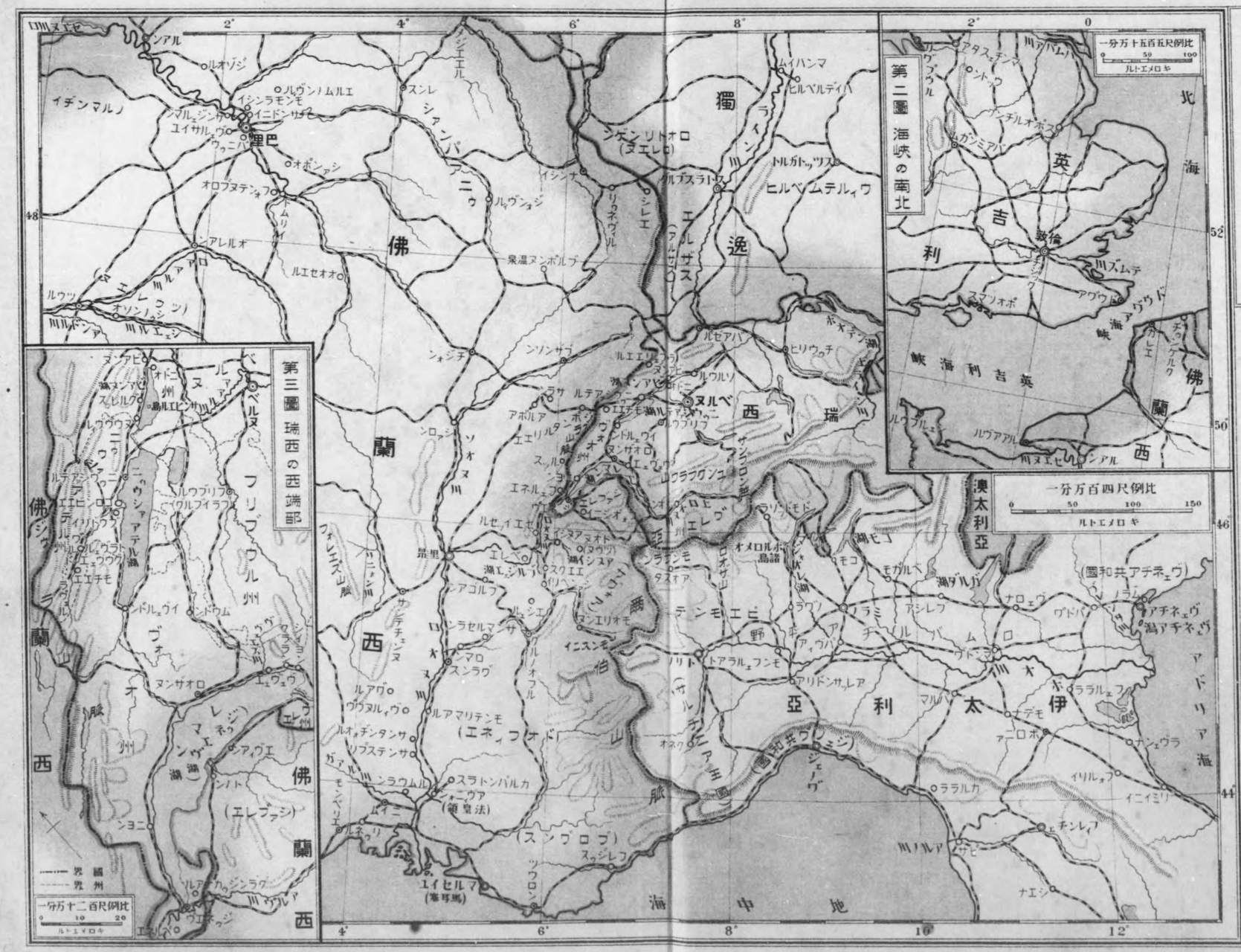
オソッル

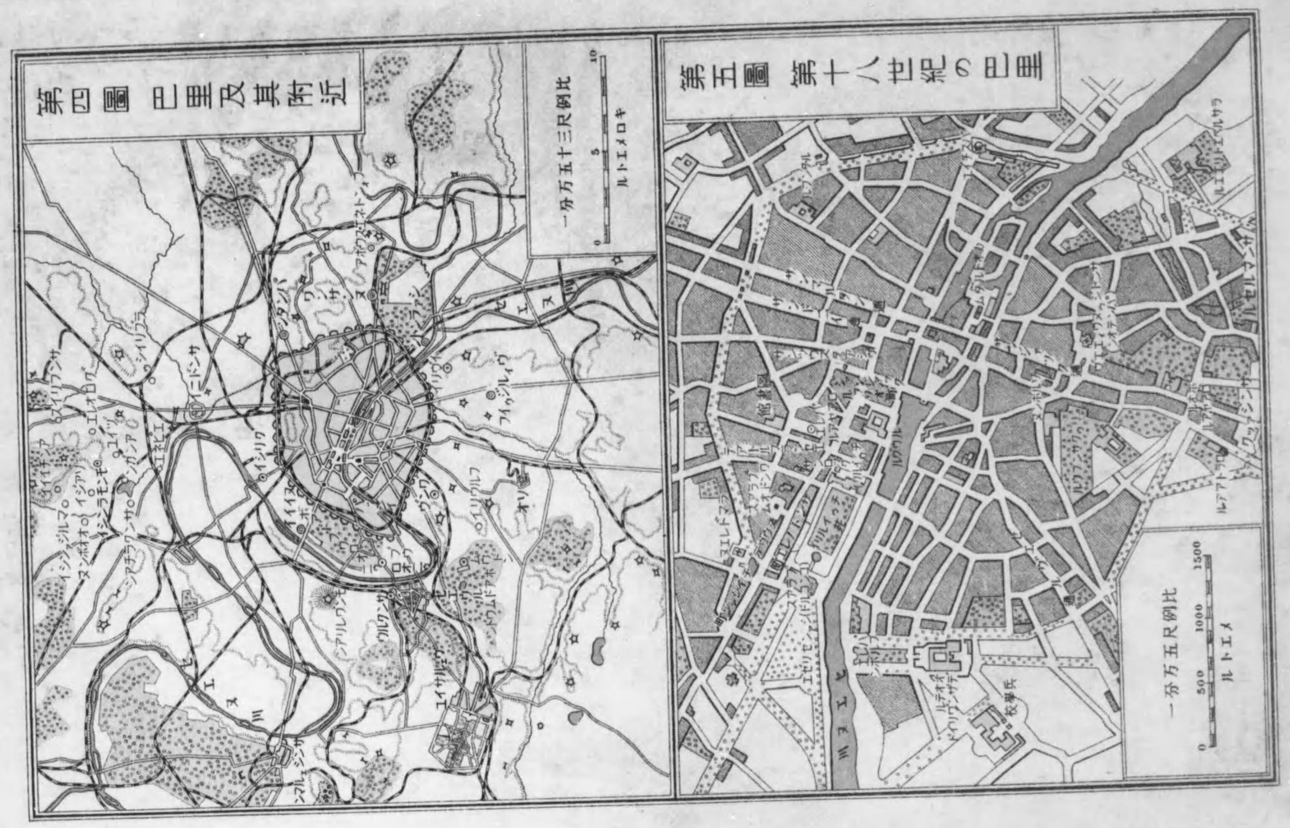
懺悔錄

石川戲庵譯

大正
2. 6. 27
内交

篇後


第二圖 海峽の南北
第三圖 瑞西の西端部
一分万十五百五尺例比
一分万百四尺例比
一分万十二百尺例比
ルトエメロキ
獨逸
佛蘭西
瑞西
英吉利
佛蘭西
伊太利亞
地中海
アドリア海
北海
英吉利海峡
敦倫
巴里
ベルヌ
ルツェルン
ジュネーヴ
ローザンヌ
ミラノ
ヴェニス
ローマ
ナポリ
ジェノヴァ
ヴェルヂュン
ストラスブール
ルアーブル
ボルドー
ルヴァアル
ルヴァン
ルヴァン
ルヴァン


第四圖 巴里及其附近
一分万五十三尺例比
0 5 10
ルトエメロキ
第五圖 第十八世紀の巴里
一分万五尺例比
0 500 1000 1500
ルトエメ

1740(38)

第八卷

一七四九。

前卷の終て一度筆を擱く必要があつた。この卷からは、前に播いた「不幸」の種子が、そろそろ頭を持ち上げて來る。

巴里に時めく邸の、しかも二軒まで私の足を停める場所となつてゐただけに、いかに交際下手な私でも、つひ種種な人と相識になれた。デゥバン夫人の邸では、ザク

センゴオタ Sachsen-Gotha の年若な世子と、その師傅のツウン Thun 男爵と。ラ・ボブリニエエル氏の邸では、ツウン男爵の友人スギイ Seguy 氏と相識になつた。スギイ氏はルッソオ(ジャン・バチスト・ルッソオ)の美本を出版して、文界にも名を知られてゐた。其のスギイと私は、男爵に招ばれて、フォントネエ・スウ・ボア Fontenay-sous-Bois の世子の別館へ、一日二日遊びに行つたことがあつた。途中ヴンサンヌを通つて行くと、例の牢獄が見えるので、心に激痛が起つた。顔にまて其の色が顯はれて、男爵に怪まれた。晩餐の時、世子はヂドロオ拘禁のことを話し出された。男爵は私に口を開かせようと思つて、ヂドロオの不謹愼を攻擊した。けれども、私の聲色を勵まして、ヂドロオの無罪を主張した不謹愼も、決して輕くはなかつた。友の不幸を見るに忍びぬ所から、思はず斯うした激語も發したので、誰も咎める者もなくて、話頭は外へ逸れて行つた。世子の傍に二人の獨逸人が隨いてゐた。一人はクルップェル Klupfell 氏と言つて、才智に長けた宮中牧師。後に男爵を遠ざけて世子師傅となつた。今一人の若い方はグリムと言つて、適當な位置の見つかるまて、講師として用ひられてゐた人てあつた。如何にも見窄しい風采は、速く相應な位置を求めたい意味

を語つてゐた。クルップェルとは當の晩から懇意になり、旋て親友の間柄となつた。グリムとの交際は、その樣に速くは成り立たなかつた。後日の得意時代に見た、かれの倨傲な風は、この頃は未だ見せなかつた。なるべく出しやばらない氣味にしてゐた。翌日の食卓の談話に、音樂のことが出た。グリムはなかなか通を言ふ。殊にクラヴサンが彈けるといふことは私を喜ばした。食後には早速音樂が始まつた。終日世子の樂器を借りて彈奏して遊んだ。グリムとの交情は、初めは斯のやうに睦しかつたが、終に行くと、どんなに可慘しいものになつたか、それは、だんだんに話をする。

巴里に歸つて來ると、嬉しい消息に接した。ヂドロオが監獄を出て、その監視中はヴンサンヌ城と、その公園を住居とし、友人に面會することも許されたといふことであつた。と聞いたその瞬間に、其處まて一足飛びに行かれぬのが、どんなに齒痒かつたてあらう！　二三日はヂュバン夫人の方に退引ならぬ用があつて、その爲に足を停められてゐるのが、三四世紀も經て行く心地てあつた。が、到頭思ひ切つて友の胸に飛び附くことが出來た。その瞬間の心持ちは。彼の傍にダランベエ

ルとサント・シャペル Sainte-Chapelle の會計係が一緒に居合はせた。けれども、私の眼に這入つたのは、ヂドロオだけであつた。私は唯一歩に進み寄つて、呀と言つたきりで、自分の顔を向うの顔にぴつたり膠着けたまゝ、一言も口を利かないで犇と抱き著いて、涙と嘆息に物を言はせるばかりであつた。愛情と悅喜で彼の呼吸を窒めて了つた。その私の腕を解いて、何を彼がするかと思ふと、僧侶の方を顧眄いて、恁ういふのであつた。

「見給へ。僕は這麼にまでして友人に愛されるのだ。」

この言葉は、確かに自分の利益になる積りで言つたに違ひない。が、その時は私の胸が一杯になつてゐたから、彼に那樣量見があらうとは想はれやうがなかつた。併し時が經つて段々考へて行く中に、若し自分がヂドロオの位置に在つたら、眞最初から這麼考が浮ぶてあらうとは奈何しても思へなかつた。

私は彼の容子から、最早幽囚の悲哀に堪へがたくなつてゐるやうに察せられた。牢獄裡の印象は、彼に取つて悚然たるものであつた。だから彼は既うヴンサンヌ城内に心置きなく起臥することが出來、鐵壁さへ取り繞らさぬ公園の中を、思ひの

儘に悠遊することが出來る身となつてゐながらも、鬱悒の生活に疲れ果てて、早く親友知己との社交を樂みたいと、其ばかり渴望してゐた。彼の苦痛を最も切に分ればならぬやうな氣がした。爲事が取り混んでゐて忙しいのも構はず、遲くも二たうとする者は私であるから、自分だけはどうしても顏を見せて慰めて遣らなけ日目毎には、自分一人で行くか、彼の妻を伴れて行くかして、それで半日を語り暮らすやうにしてゐた。

此の一七四九年の夏は、暑さが殊に劇しかつた。巴里からヴンサンヌは二リゥウ(計二里)の路程としてある。今の私の生活は、馬車にばかり乘ることを許さないから、午後の二時といふ頃に、自分一人の時は、いつも徒歩で、息急き歩いた。道傍に並木もあるけれど、それは皆その邊の習はしで、枝といふ枝を刈り込んで了つてゐるから、蔭がない。暑熱に責められる、息迫しくはなる、一歩も進むことが出來ないで、そのまゝ地面に倒れたことも一度二度てなかつた。て、幾らか歩調も緩くする氣て、道道何か讀みながら行くことにした。何日てあつたか、メルキゥル・ド・フランス Le Mercure de France を讀みながら歩いてゐる中に、偶と目に觸れたのは、ヂジョンのア

カデミイから出してゐる次年度の懸賞論題で「科學及び文藝の發達が道德上に及ぼす效果如何 Si le progrès des sciences et des arts a contribué à corrompre ou à épurer les mœurs」といふのであつた(譯者云。「メルキゥル・ド・フランス」は一六七二年に巴里の文士、ドンノオ・ド・ヴィゼ Donneau de Visé が創刊した文藝新聞で、今日在るものゝ前身)。

是を讀み下した瞬間に、新しい世界が眼前へ展けて來て、全く別な人間のやうになつて了つた。その折に得た印象は、未だ生生しい追懷となつて殘つてゐるけれど、マルゼルブ氏へ出した四通の手紙のうちで、既うその委曲の消息を洩らしてからは、細かいことは大方忘れて了つた。この事は自分の記憶力に關する一奇談だから、少し書いて置かうと思ふ。私が自分の記憶力を恃みにしてゐる間だけは、その記憶は役に立つが、記えてゐた事を一旦紙へ書き附けて了ふと、もうその記憶が消えて了つて、憶ひ出すさへむづかしくなる。音樂でも尙且其の通りである。樂譜を知らなかつた時分には、いろいろの歌曲を記えてゐたが、譜が讀めるやうになつてからは、先の歌曲は、どれもどれも忘れて了つた。だから今若し好きな曲を一つ唱つて見ろと言はれても、果して出來るか否か、甚だ怪しい。

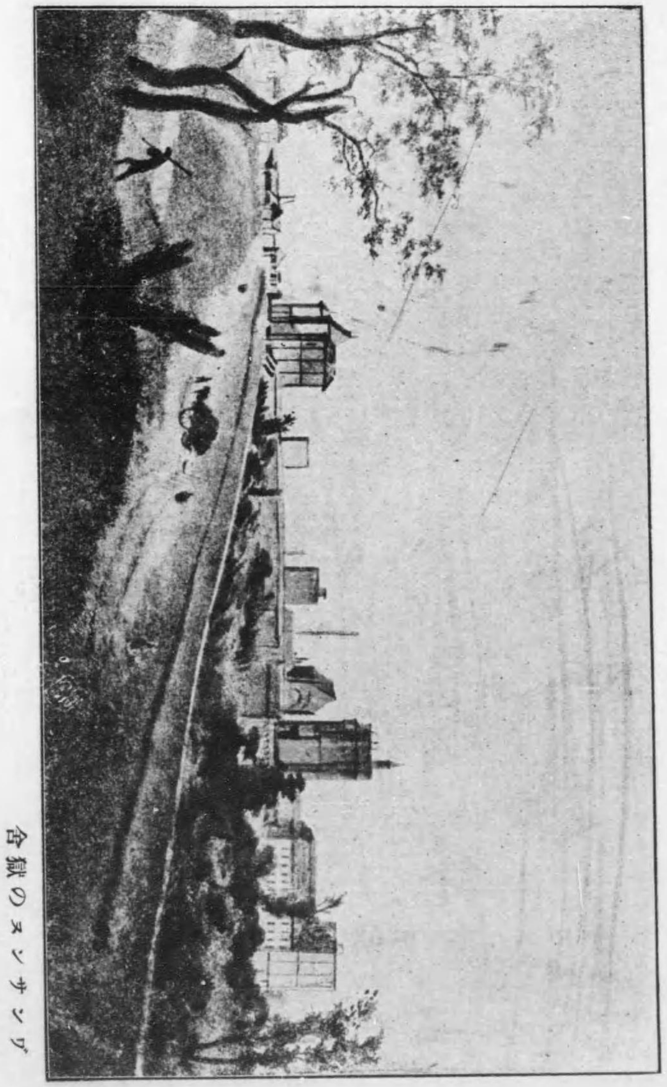
此の場合の事で、今もはつきり記憶に殘つてゐるのは、ヴンサンヌへ著いた時に、譫妄症に近いほどの苛苛した心の狀態に在つたことだけである。ヂドロオはそれを看拔いた。私は譯を話して、然うして槲の樹の下で即興的に鉛筆で書き附けた「ファブリウス寓言 Prosopopée de Fabrius」を讀み聽かせた(譯者云。これは感激の餘に成つたごく短い美文で、彼の「科學藝術論 Discours sur les sciences et les arts」の中に這入つてゐる)。この計畫を實行して重賞を目莵けて見ては奈何かと言つて、無暗と慫慂め立てた。私はその言葉に從つた。がそれと同時に私は取返しの附かぬ身となつた。私の後半生に於いて、荐りに不虞に襲はれるやうになつたのは、此の際の迷誤から生じた、避くべからざる結果であつた。

私の情熱は料り難いほどの速さで、丁度自分の考想と同じ高度まで昇り詰めた。眞實と、自由と、正義とに對する熱情は、他の有りとある小さい情緒を悉く壓迫して了つた。殊にこの感激が、この後四五年の間、他人の心の經驗には、ためしもあるまいと思はれる位の力で、私の心界に脈脈と動き續けたのは、全く自分にも驚かれる。

この論文を書くには、大きに他と異つた方法を採つた。それは他の著作の時て

も尙且同じ事だが、毎晩眠られぬ時間に限つて、それを書くことにしたのである。寢床に這入つて、眼を瞑つては靜と考へを凝らして、そして頭の中で幾回となく句節の推敲に血を搾るやうな思ひをした。まづ是で可しと思ふ處まで漕ぎ著けると、其を頭の中に蓄へて置いて、紙に蒞む時を待つ。けれども、朝床を離れて著物を衣替へるといふ時になると、前晩苦んだ結果は些とも殘つてゐない。いよいよ紙を展べて見ても、殆んど何物も浮んで來ぬ。テレエズの母親に筆記させようと思ひ立つて、娘や亭主と一緒に、彼女を自分の傍近く住居させることにした。傭人の代りに、母親は毎朝出掛けて來て、火を拵へたり、勝手の用を辨じてくれた。其女が來ると、寢床の中から、昨夜の勞作の結果を書き取らせた。長いこと然ういふ工合にやつて行つて、お蔭で大分物忘れが救かつた。

論文が書き上がつたのでヂドロオに見せた。彼は滿足の體で、唯二三の修正を試みただけであつた。この論文には、熱と力はありながら、論理が全く立たず、脈絡が通じてゐなかつた。凡そ私の書いた物の中で、この文章ぐらゐ推論の弱い、內容の貧しい、諧調の拙なものは無い。併し思つて見れば、天性甚麼才能のある人でも、



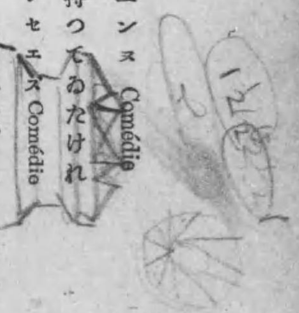
倉獄のヌンサンヴ

悪魔をも全能ある神に隨はしめる。
これ、人生の眞意義なり。
吾をして全能あるもの、僕たらしめよ。
行為の前に先ず天地に覓めざるべからず。
習慣と傳統の良心ではない。
実に天地生成の神である。
理想を「日常の生活」に吾の稽かを、なすべきではならない。
サテこの為には移動や移住も吾をしてはあらしめい。

文章を書くことばかりは、然う無造作に學び得られるものでない(譯者云。この論文には文學、藝術、科學等一切の文明の產物は、畢竟生活狀態を敗壞する原因で同時に證左であるといふことを、大膽に雄辯に說破してある。初めヴンサンヌでヂドロオに相談した時、ヂドロオが、他の應募者は必と文化に謳歌してその功德を頌へるに極まつてゐるから、君も御多分に洩れぬ流俗の雷同者となつて、肯定的に議論を出もて行つたのでは、成功は覺束なからう。一番此處は裏を行つて、文明否定論を書いて見ては奈何だと言ふので、ルッソオもつひその氣になつて、然ういふ論を立てるやうになつたといふ說がある)。

その他の人達には誰にも話さずに、原稿を送つた。併しグリムにだけは何うも私から話したやうに思ふ。彼がフリエズFriesse伯の邸內に住むやうになつてからは、私との間が極めて親密であつたから。彼の處にあつた一臺のクラヴサンが、私達の媒介となつた譯で、閑な時には何時でもその傍で遊び暮した。伊太利亞啄嘆調や、樂歌などを、朝から晩まで、間斷なく唱ひ續けた。若し私がヂュパン夫人の內に居ないことがあれば、其の時は必とグリムの處か、然もなければグリムと連れて

散歩か觀劇に出かけて行つてゐる時であつた。コメディ・イタリエンヌ Comédie italienne はグリムの嫌ひな座であつたから、私は其の座の特許票を持つてゐたけれど、其座へ行くのは廢して、金は拂つても、彼の好きなコメディ・フランセエズ Comédie françoise(即ちテアトル・フランセエ Théâtre français)の方へ一緒に行くことにした。と



に斯く此の青年には力强く牽きつけられて、離れ難いものになつて了つた。其が爲に哀むべき「小母さん」――私の生涯を通して、何時の時にも疎かに思つたことのない彼女すら、多少忘れられ氣味になるくらゐであつた。

自分とテレエズだけで、一つの家庭を作りたい。さういふ希望が以前から私にあつた上に、少ししかない餘暇を、自分の好む方へ充てることが難しくなつて來たので、彼の希望が前よりは一層熱度を增して來た。併し、テレエズには多勢の家族といふ煩累があり、殊に世帶道具を買ひ調へる第一金が缺乏してゐたために、今までは靜と堪へてゐたのであつた。今、その希望が達せられるやうな機會が來た。

フランキヴイユ氏とヂヴバン夫人が、折好くも斯う考へてくれた。一年に八百や九百フラン(約計三百乃至三百五十圓)の收入では、とても不足は知れてゐると言ふので、自分達の發意で、俸給を一年五十ルイ(約計五百圓)まで昇してくれた。尙だ其の上にヂヴバン夫人は、私が家具を調へたい希望を察して、それに就いても幾分の助力をしてくれた。是迄テレエズの方にあつた道具類も一緒に合併して、筋の分つた人達の住んでゐるグルネル・サン・トノレエ Grenelle-Saint-Honoré 町のラングドック Languedoc 館で小い一室を借り受け、此處で自分達の氣に入るやうな生活の準備をした。そして此處で七年間、物靜かにのんびりとした心持になつて暮して來たその七年目に、私は「仙居」の方へ引き移るやうになつた。

テレエズの老父は大分のお人よしで、ひどく自分の女房を畏れて、其女に警視總監といふ綽號を附けてゐたくらゐであつた。後にグリムがテレエズを冗談に警視總監と呼ぶやうになつたのも、是から始まつたのである。テレエズの母親は口の旨ひ女であつた。上流社會の風俗、交際振りなどをも氣取つてゐた。しかし彼女には妙に阿諛の癖があつて、自分の娘にも、私の前だけ取り繕ふやうにと、甚だ不

利益な誡めを與へたり、私の友達の一人一人に對して、私はじめ其處に居合はさぬ他の友達を貶すつもりで、盛んに佞辯をつかつた。それが私には堪らなく可厭に感じられた。然ういふ事さへなければ、特に不都合な母親といふ程のこともなく、また良い母親と言はれた方が自分の利益にもなる道理であつたのであるから、たとへ娘に過失はあつても、それは成るたけ隱すやうにしてゐた。この母親の事に就いては、私も一方ならず氣を配つて、何卒自分を大切にさせるやうにと、種々な附け屆も怠らずして來たけれど、どうも思ふ通りに行かないのが、此の私の小家庭での唯一つの懸念となつて殘つた。その外には別に是と言つて、この六七年間の家庭の和樂を傷けるやうなこともなく、弱い人間に相應はしい其の享樂を肆にしたといふことが言ひ得られる。

テレエズの心情は正に天使のそれであつた。住み馴れて來るまゝに、私との心の結びつきは彌増に強くなつて、二人は初めから斯うなるべき運命を持つて生れて來たのだといふ感じが、日毎に高まつて行つた。其の間の享樂と言つたやうなものを書き立てて見たところで、單純極まることばかりだから、唯笑ひ種になるば

かりだらうと思ふ。郊外の散歩なら、何處かの懸茶屋へ腰掛けて、大枚十スウばかりの散財でもするとか。小晩餐會といふ譯で、窓口一杯の大鞄の上へ、小い腰掛を二脚列べて、二人が差し向ひて樂むとか。この場合には窓が即ち食卓の代用になる。其處から新しい風を通し、眼の前の光景や、道行く人の羣を眺め入つてゐた。實はこの旅館の四階に住んでゐるのであつたが、それでも物を喰ひながら、町を瞰下すに差閊はなかつた。食卓に陳ぶ物は、四つ切の麪包が一片櫻實が少許、乾酪の小片、それに二人して飲んで、葡萄酒がたつた半スチエ Seiter 約一升二合。これだけの晩餐がどのくらゐ味の深いものであつたかといふことは、書くことも出來ず、想像することも難しい。隔てなく暴露して、打ち解け切つた心と心の柔かな結び付き！　斯うした藥味があるのだもの、甚麼晩餐だつて旨いのは當然である。斯うして私達は其處に靜と据わつたまゝで、内の家婦が知らしててもくれないと、時の經つことを些とも知らずに、夜を更かすことも度度であつた。もう這麼細かい話は罷めにしよう。面白くもなく、嗤はれるばかりだ。何時も私が言つた通り、享樂の眞の味は、到底書き現されるものでない。

丁度この時分の事であつた。野卑な快樂に復た手を出した。しかし是がもう心に咎められるやうな、この種の行爲の最後のものであつた。クルップエル牧師は好きな人であつたといふことは前にも出た。この人との交情も、グリムと同じやうに終にはやはり隔意なくなつて、二人でよく私の處へ飯を喰ひに來た。饗應は粗末であつたが、クルップエルは剽輕な面白い事を立て續けに喋るし、グリムは又、未だその時分は練語家でなかつたから、彼一流の可笑しな獨逸訛りを振り廻して、食事の外の愉快を附け加へた。この遊食會では、肉慾が幅を利かすやうなことはなかつた。その代りに清らかな歡娛が吾儕の間に交換されて、何時まで經つても、離れともない氣がした。クルップエルは一人の若い女を圍つて置いた。けれどもその女を、クルップエル一人では世話し兼ねてゐて、畢竟は誰の慰み物にでもなるといふ狀態であつた。偶とした夕方、私達が行きつけのカフェへ這入つて行かうとすると、入れ違ひにクルップエルが、女を連れて夕飯を喰ひに出て行かうとするのと鉢合せをした。私達は彼に調戯つてやつた。すると彼は、そんなら僕達と一緒に跟いて來給へといふやうなことになつて、同じ食卓へ私達をも引つ張つて行つて、そして正反に體

よく私達を愚弄り散らした。その哀れな女は、無邪氣で溫柔しさうで、決して那樣商賣なんぞ好んでする者とも思はれなかつたけれど抱への、惡婆の仕込みで、那樣者に爲上げて了つたのであつた。どうせお定りの話の上に、酒が手傳つて、つひ有頂天に前後を忘れて了つた。正直なクルップエルは、自分の饗りを半分で廢しては、客に濟まぬと思つて、皆替りばんこに次の部屋へ行つてくれと勸めた。グリムは、この娘には決して手出しをしなかつたといふことを、その後絶えず廣言してゐた。何故それでは那の部屋からもつと速く出て來なかつたのだと言ふと、あれはああして此方の部屋に居る連中に氣を揉ませて、蔭で舌を出してゐるためであつたのだと言ふのであつた。で、縱し其の時は彼自分の言ふとほり、潔白は潔白であつたにしても、それは彼の謹直からであつたとはどうしても思へない。何故と言つてフリエエズ伯の邸内に住み込むやうになるすぐ前までは、その同じサン・ロックSaint-Roch區内の白粉臭い家に宿を借りてゐたくらゐであつたものを。

此の娘の住んでゐるモアノオMoineaux町を出た時は、丁度サン・ブルウ(前篇二一二頁)が爛醉させられた家を出て來た時と同じ位、自分の羞恥心は傷められてゐた。

だから私がサン・ブルウの物語を書いた時には、自分の閲歴が、丁度眼の前へ浮び出るやうに想はれた。テレエズは私の素振から、殊に私が心に咎められてそはそはしてゐたのを見て、それと看破いた。私は早速心の重荷を卸すために、有つた儘を正直に彼女に自白した。この自白を早くして了つたのは寔とに都合よかつた。といふのは、其の次の朝、グリムがさも勝利を獲たといつた風に私の處へ乗り込んで來て、昨夜の私の所業に輪を懸けてテレエズに話をした。其から後といへども、彼は折に觸れてこの時の事を意地わるく話し出しては、忘れて了つてゐるテレエズに、由ない記憶を新たにさせる事があつた。グリムには何の隔意もなく、一切の秘密を打ち明けてゐたのだから、彼も當然の義務として、私の信頼に負かぬやうにすべき筈だ。それを反つて裏切したのであるから、今度のことては私よりも一層罪は重いとせねばならぬ。それに引き換へてテレエズの心の應揚さは、この時ぐらゐ際立つて私の心に映つたことはなかつた。私の不貞操を責めるよりもグリムの不信用を憎んで、私には唯しつとりと物優しい怨みの言葉を述べたばかり、少しも憤激したやうな容子は見せなかつた。

心情の應揚てあると同時に、彼女の知識の單純なことも太甚しい。と言つて了へばそれ迄てあるが、一つ話して見たい例話が茲にある。クルッブェルといふ人は宜敎師て、又、ザクセン・ゴオタの世子に仕へる宮中牧師てあるといふことを彼女に話した。牧師と聞いて彼女は特別な人と思つたらしく、まるて不釣合な想像を描いて、滑稽にもクルッブェルを羅馬法皇のことと信じて了つた。私が或るとき家へ這入つて來ると、彼女が私に、先刻法皇様が訪ねて見えましたと言ふから、氣てもを違つたのかと思つた。譯を聞いて初めて解つたから、すぐその足て引つ返して、グリムとクルッブェルにこの話をしに行つた。法皇といふ綽號は其の時からクルッブェルの有になつて了つた。それと一緒に私達は、モアノオ町の女にも法皇妃ジァンヌ Jeanne の名を奉つた。これが永久に笑ひの種になつて、みんなは轉げまはつた。私の名を籍りて僞手紙を拵へて、その中に、生涯の中て私の笑つたことは、二度しかないといふやうな事を書いた人達は、此の頃なり、私の若い時分のことをよく知らなかつたのてある。てなければ、那樣ことがどうしても頭に浮んて來るわけがない(譯者云。僞手紙の一件は、第十二卷の末、ルッソオ晩年の記事中に出る)。

一七五〇——一七五二。

翌くる一七五〇年になつて、今まで悉皆忘れてゐたヂジョンへ提出の論文が當選したといふことを聞き知つた。この報知は最初その論文を提出すべく唆かされたすべての考想を目醒した。その考想にいきいきとした生氣を與へた。そして終には亡き父や、わが祖國や、さてはプルウタルコスなどに養成された酵母——偉いなる者、力ある者といふ意味の酵母を、一時に私の心の中で醗酵させた。厚利の上に、又世論の上に超然と立つて、自由に、大膽に、自己の行く道に猛進する、然ういつた態度ぐらゐ、勇ましく美しいものは、又あるまいといふ氣になつた。でも初めの間は、女々しい怯懦と、非難の虞れとに礙げられて、すぐにその考想を實行し、當代人の主義に對して戰を挑むといふまでの決心はし兼ねたけれど、その折から屹と心の内に覺悟する所が出來た。その實行を遲れさしたのは、反對意見の盛んに起こつて來るのを待つて、自分の考想に一層の刺擊を受けさせ、それて立派に勝利者となり果せようといふ心があつたからだ。

人類の責務なぞといふ空疎な考想に恥つてゐる間に、まづ私自身の本務を考へ

させるやうな事件が起つて來た。テレエズが是て三度目の妊娠をしたのてある。餘りに自己に忠な、餘りに標置の高い私は、自分の行爲て自分の主義を破ることは出來ぬ。自然や、正義や、理性や、又はその創造者と倖しく純眞て、神聖て、永遠な宗教や、——然ういふものの法則に依つて、子供等の前途と、母と自分との關係を思ひまはした。宗教なぞといふものも、人間の手て發達させようとしては墮落させるばかり、煩瑣き信條や教理て絡み附けて、唯言葉の宗教に引き落して了つた。不可能の註文ばかり聒しいけれど、さてそれを實踐しようといふ考のない人に取つては、註文だけするのは何の骨折にも當らぬからてあらう。

縱し私の下した結論が誤つてゐたにしろ、私が從容としてその結論の命ずる所に從つたのは異とせねばならぬ。若し私が不幸にして、柔かな自然の聲の耳に通じない、そして惻隱の情の心に萌さないやうな人と生れ合はせたのならば、かくまての沒情漢となつたところて當然のことと謂はねばならぬ。それに實際は奈何か。燃えるやうな心情、きびきびした敏感、當對を求めて已まぬ力强い愛著心、その愛著を斷たねばならぬ時の言ひ知れぬ悲痛な感じ、目下のものに對する哀憐の情、

偉大や眞善美の熱愛、一切の惡に對する畏怖心、憎惡や殘害は勿論、他を殘害しようと思ふことすら出來ぬ性格、あらゆる道德的な、寛裕な、可憐なものを觀た時に熾んに起る可懷しい感激――然う言つたやうなものを兼具してゐる此の心の中へ、有らうことか、無上の懷しみある人間の義務を、何の容赦もなく蹂躙らせるやうな淺間しい量見が喰ひ入らうとは、思ひがけぬことではないか？　實に有り得べからざることと謂はねばならぬ。このジャン・ジャックは、生涯いづれの時といへども、決して無神經な人間非人情な父となるに忍びなかつた。どんなに間違つたところで、決して酷薄な人間になる氣づかひはなかつたのである。私が如彼いふ處置をしたについては、强ひて言へば相當な理由もないではない。然し然ういふ理由のために私が誤られたのであるから、その理由を明かに示すのは、とりも直さず他人をも誤らしめる所以であらう。年若なわが讀者たちをして、また更に私の轍を履んで、同じ過ちを繰り返させることは私の望まぬ所である。で、今は唯是だけの事を言ふに留めて置かう。テレエズと私との關係は、縱しその中に自由な、放逸な分子が混つてゐるにしても、とにかく清淨な、神聖なものだ。私が彼女を信ずることは、

それが續かむ限り、當然の義務といふものだ。唯一度彼女の不信を買ふやうなことをしたのすら、眞正の姦通罪でも犯したやうな氣がしてならなかつた。子供等のことに就いても、その養育費に手詰つたがために、育兒院へ投り込んで了つて、行末は冒險家だの、山師などになつてくれるよりも、職工か百姓でもよいから、然うした種類の人間に仕上げて貰はうと思つたのは、市民たり父たる自分の義務を果した譯であり、而も自分はこれてこそプラトオン Platon の共和國中の一員となり得る理窟だ。と恁ういふ風に考へたのが、そもそも過ちであつたのだ。それから後、一度ならず悔恨の情は、その考の間違つてゐたことを、しみじみ私に諭すのであつたが、理性は尙且それと反對で然うは言はなかつた。如彼いふ風に子供等の處置をつけたために、父と同じ運命に陷る虞もなくなり、一朝私が切迫詰まつて、彼等を路傍に遺棄るやうな、可怕しい目に遭はされる心配もなくなつたのだから、此の點から、時をり心の中で天に向つて感謝することを禁じなかつた。エピネエ夫人や、リックサンブウル夫人も、友情から、雅量から、乃至その他の動機から、然ういふ事をなさる程なら、私共の方でお子さん達のお世話ぐらゐ何時でも引き受けてして上げ

ますのに、と言つてはくれたけれど、然うして貰つた所で、それで子供等は果してより以上幸福な者になれたてあらうか？　少くとも、より以上律義な人間になれたてあらうか？　其はどうか知らぬけれど、若し彼女達の手に渡つた時には、必と双親を怨みのあまり、復讐てもするやうな者に育て上げられたことは眼に視えてゐた。それから見ると、全く雙親の顏を見ず知らずて終はつたのは、どの位優してあつたか知れぬ。

然ういふ譯て三番目の子供も、初めの二人のやうに育兒院に入れて了つた。その次に出來た二人の子供もやはり同じ樣な處置をした。私は皆て子供が五人あつた。自分てはこれを理にかなひ、法にもかなつた大出來な處置と思つてゐたがその子供等の母の思はくを兼ねて、餘り大きな聲て自慢をして廻らなかつた。けれども懇意な人達にだけは、その話をした。ヂドロオにグリム、少ししてからはエビネエ夫人、また少ししてからリ。クサンブウル夫人などに此の話をした。遇られて話した譯てなく、濟泊に自分から打ち明けたのてある。グアンといふ產婆は正直な謹み深い十分信用の出來る女てあつたから、此の女の口から世間へ噂を立て

られる心配はなかつた。唯打ち明けて話をするに少し心の置かれたのは、テレエズが一度難產て惱んだ時に手術をして貰つた、チエリイ Thierry といふ醫者だけてあつた。一言て言へば、私の行爲には些しも陰翳はなかつた。これは私が何事も友人には裏み隱さないためばかりてなく、眞實その事に何の害も認めなかつたからてもある。いろいろ思案を爲拔いた末、子供等に取つて最上の方法、——少くとも自分て最上と信じた道を擇んだわけてある。私も實はこの子供等と同じ風に養育してもらひたかつたと、そればかり殘念に思つてゐる。

斯うした內證話を他にしてゐると、一方てはテレエズの母親も、一向斟酌なしに內輪の事を話してまはつた。私が母親とテレエズを、ヂュバン夫人の處へ伴れて行つて紹介したときには、夫人は私との關係から、二女にも限りなく目をかけた。母親は娘の秘密をすつかり夫人に打ち明けて喋つた。それに母親は碌に收入もないこの私が、一生懸命になつて不自由をさせまいと、精精と仕送りをしてゐる義理も忘れて、夫人に私の心盡しを話さなかつたために、もとより優しく慈愛に富んだ夫人のことて、惜し氣もなくいろんな物を施して遣つた。それを母親がテレエズ

に口止めをして置いたものか、私が巴里に居る間は、テレエズから一言もその話は聽かなかつた。ところが、「仙居」の方へ引き移つてから、外の種種な打明け話をする序でに始めてそれを聞き知つた。ヂュバン夫人の何も知らぬらしい顏色から推察すると、果して私の身の上に起つた事を、母親から篤と聽かされたのかどうか疑はしくも思はれた。夫人の息子の細君、シュノンソオ Chenonceaux 夫人も、やはり同じ容子に見えた。唯フランキュイユ夫人だけは、確かに詳しい事を聽いてゐて、しかも默つてゐることが出來なかつた。翌年私が旣うその邸を出て了つた時に、その事を彼女から聽いた。そこで私はこの件に就いて彼女に手紙を書いて、言つて差閊のない限り、子供等の處置法に對する理由を擧げた。但しその理由の最も主要なものといへば、テレエズの母親とその家族に在るのだから、それを書き立てるのも殺生と思つてそれだけは廢して置いた(譯者云。「理由の最も主要なもの」は、ルッソオの「靜思錄 Rêveries du promeneur solitaire」に據ると、斯う書いてある。「自分をして茲に至らしめたのは、全く子供等の運命の如何に慘憺たるべきかに念到し、そして之を拯はうにも、他に求むべき途に盡き果てたからである。……わが手鹽に掛けて育て

ることのならぬ身分の悲しさは、誰かに賴んで養育させるより爲方もあるまいが、彼等の母の手に懸ければ落ちぶれの憂き目を見るばかり、母の外家に預ければ碌てなしに仕あげられることは極まつてゐる。然う思ふと今でも身の毛が竦立つやうである」)。

ヂュバン夫人は用心深い人、シュノンソオ夫人は友誼に篤い人で、私は安心してゐられた。フランキュイユ夫人も同じ樣に信じてゐたが此の人は私の祕密が世間に知れる餘程前に世を去つた。その祕密の暴露も、直接に私から話した人達の口から起つたことで、しかもそれは、私とその人達との間に不和が生じて後の事であつた。此の單なる出來事で彼等は私を斯う判斷した。自分で招いた不名譽を辯解しないで、彼等の惡意から生み出した不名譽を被せられることを恥としてゐると。私の過失は小さくないが、要するに一個の過失に過ぎぬ。私は義務を懈つたが、決して惡意があつてしたことでない。未だ見ぬ子供等に對する愛情は、世間一般の父よりもずつと深かつた。然し、友誼に背き、神聖な契約を蹂仆し、打ち明けた祕密を洩らし、欺かれた友——彼等の仲間を脫け出てからも、尙且私は敬意を失はなかつ

た――其の友を面白さうに侮辱することは、これは過失とは言へまい。品性の卑しい大不德漢のすることでないか。

私は自己を懺悔するとは約束したが、決して自己をジャスチファイしようとは思はなかつた。だから、この話はもうこれだけで廢す。私は眞を僞りさへしなければそれでよい。公平な判斷は讀者の方の義務である。其以上を讀者に望まうと思つてゐない。

シャノンソオ氏が結婚してからは、其の母の邸も年若な可愛らしい花嫁の藝能と恰悧とで一層愉快になつて來た。デュバン氏の書記の中で、特に私に眼をかけてくれたのは、この新夫人であつた。新夫人はロオシュアアル Rochechouart 子爵夫人の一人娘で、子爵夫人がフリエエズ伯と懇意であつたところから、グリムも亦懇意になり、尋常ならず彼女に傾倒してゐた。しかしグリムを新夫人の處へ案内したのは私であつた。ところが、グリムと新夫人とは氣質が合はなくて、間もなく交際は破れて了つた。その頃から自分を引き立ててくれるやうな人ばかり探してゐたグリムは、娘よりも母の方へ靡いて行つた。娘夫人の求める友人は、何等の野心も

ない、富豪から利益を吸收するなどの魂膽も持たない、手堅い一方の人間をといふ註文であつたが、母夫人はそれと異つて交際界の立者になつてゐたからであつた。新夫人は姑が豫期したと同じやうな心の傾向を持つてゐなかつた。然うした姑のゐる邸が彼女には面白くなくなつて了つた。併し彼女には優れた才能があるので上に、外家の良い所から幾らか氣位も高くなり、自分の柄にもないお勤めをするよりはと思つて、樂しい社交仲間を避けて、唯獨り一室の中に引き籠るやうになつた。不幸な人に同情を禁ぜぬのは私の天性で、新夫人が流竄のやうな境遇に居るのを見ては、可怜さが嵩じずにゐなかつた。彼女の心意は哲學的、若しくは思索的ともいふべき、そして時には詭辯的な分子を交へたものであつた。對話の練れてゐることはなかなか修道院をぽつと出たばかりの、生若い女達の眞似も出來ないくらゐであつた。それでゐて齡は未だ二十歳に屆かなかつた。私が牽きつけられたのも無理でないと思ふ。色は人の眼を眩ずほどに透きとほつて、少し自分で氣をつけて取り繕へば、あの佳い恰好に娉婷とした立姿といふものは又とあるものでない。心もち灰がかつたブロンドの髪の光澤の善さに、思はず我が哀むべき母の

妙齡のそれを胸に描いて、時ならぬ鼓動を急くした。併し、私は丁度この頃自分で嚴格な主義を立てて、如何なる場合でもそれに戻るやうな所業はすまいと決心してゐたので、彼女と其の魅力とは、私に何の危險をも及ぼさなかつた。ずつと一夏を通して日に三四時間づつも差し向ひて、算術を敎へると言つて巨多彼女を困らせたこともあつたが、其の時なぞも嚴格一點張りて、一語でも生やさしいやうなことは言はず、秋波を送るやうなことも決してしなかつた。これが五六年も後であつたら、這麼莫迦莫迦しい分別をする迄もなかつたてあらうが、何しろ生涯に唯一度より戀をしてはならぬ、その外の女は、その場限りて見放して了はねばならぬ、といふことが、其の時の主義となつてゐたのてあつた。

デゥバン夫人の邸内に住み込むやうになつてからは、常も自分の位置に安んじて、決して其以上良い身分になることを望まなかつた。夫人がフランキゥイユ氏と相談して、私の俸給を昇げてくれたのも、單にその人達自身の腹から出たことてあつた。フランキゥイユ氏が日增しに私を信用するやうになつた折から、丁度今年になつて、現在よりももつと餘裕のあり、もつと安心な位置に引き立てることを考へて

くれた。彼は大藏省の理財局長てあつた。その下に使はれてゐた出納吏のヂゥドアイヱDudoyer氏が、齡も取り金も溜つて、もう退職したいと言つてゐる時てあつた。フランキゥイユ氏はこの位置を私に與へようと言ふのてあつた。て、其の方の勤務に必要な資格を作るために、數週間老人の家へ心得方を敎はりに通つた。其はよかつたけれど、もともと柄にない職務てあつたか、或はヂゥドアイヱ氏には、別に心當りの候補者が出來てゐた樣子て、其ゆゑ餘り深切に敎へてくれなかつたからか、どちらにしても捗捗しく、完全に敎はることが出來なかつた。會計法の事なども、態と金んて難解しく說いたものと見えて、どうしても私の頭へ這入らなかつた。那樣事て全斑の知識を習得することは出來なかつたけれども、日日の執務に差閊を感ぜぬ程度て、一通りの事は學び得た。それだけて私は新しい爲事を始めた。現金出納簿や、金庫を保管し、現金と領收證を受け渡しすることになつた。斯ういふ方には技倆もなければ、趣味もない私てあつたが、年の功て段段眞面目になつて來たとて、氣儘を言はずに一生懸命職務に盡す覺悟になつた。少し爲事に慣れて來たと思つた時、生憎フランキゥイユ氏が旅行に出たので、不在中は私一人て金庫を監督せ

ねばならぬことになつた。金庫の金は僅か二萬五千か三萬フラン(約計一萬乃至一萬二千圓)しかなかつたが、それが私には堪へられぬほどの重荷になつた。とても出納吏などの勤まる柄でないといふことが、熟熟感じられた。彼が歸つて來ると、すぐ病床の人になつたのも、全く不在中に氣を遣ひ過ぎたからであつたに違ひない。

この本の始めの方に、自分が生れた時は半死人のやうであつたといふことを言つた。膀胱に異狀があつて、少年の頃は絶えず尿閉に惱まされ、養育に劬勞した小母のシヴォンが、その爲にどの位心配をしたか知れなかつた。しかし小母の心盡しも無效にはならないで、强壯な體格は、到頭凱歌を揚げた。前に話した樣に一時神經衰弱に罹つたのと、少しても熱が出ると併發する持病の膀胱加答兒がある外は、青年期を通して健康を害したことはまづなかつた。三十臺になるまでも、性來の虛弱はすつかり忘れて了つてゐた。それが久しぶりで再發したのは、ヴェネチアへ著いた時であつた。旅行の疲れと嚴しい暑さに中てられたのとで、又膀胱に熱が差し、腰部が痛み出して、冬の初まで癒らなかつた。かのバドヴ女郎に引つ繫つて

からは、生命は無いものと思つてゐたところ、不思議に何の病氣も喚び出さなかつた。又ヴリエッタについて、肉體よりも一倍精神を惱ました後は、前よりもずつと氣分がよくなつた。その內ヂドロオが拘禁されるといふ騷ぎになつて、その夏の炎暑をも厭はず、ヴンサンヌ下りへ幾度となく往復したために、その途中で追ひ込んだ熱が、到頭劇しい腎炎を誘ひ出して、それからはもう舊の通りの健康體に回復する折がなかつた。

今度は、多分その呪ふべき金庫の番人といふ、氣の滅入るやうな爲事が障つた。是迄よりも一層重い容體に陷つて、五六週間は想像に堪へた沈衰の狀態でゐた。ヂッバン夫人から國手モラン Moraud 氏を寄越してくれたが、老練にも似合はず、譬へやうもない疼痛を感じさせられるばかりで、消息子で檢査することも出來なかつた。彼の勸告で、グラン Daran にも診察してもらつた。今度は軟かな探石消息子がやつと這入つた。しかしモランは私の容體を診て、到底半年以上持つ見込がないといふことを、ヂッバン夫人の耳に入れた。

其の警告は亦私の耳へも這入つた。其處から私は自分の境涯に就いて眞面目

に考へて見た。あの嫌ひて嫌ひてしやうのない爲事のために、幾許もない餘生の安息と慰藉とを犧牲にして了ふぐらゐ愚なことはない。加旃自分の決めた嚴格な主義を、何の關係もないやうな位置に適應させるといふことが、奈何して出來ようか？　理財局の金庫番人が、無慾と貧乏の宣傳者となつて、職務を辱かしめるやうなことはなからうか？　斯ういふ考が、非常な熱と力て頭の中に沸騰し始めて、その後は何物もこれを鎮靜させることが出來なかつた。それほど牢く根を卸した。病氣が幾らか快くなつてからも、當時決心した事は十分冷靜に考へてみて、尙且そのまま固く守つた。私は末遠く幸運や發展の計畫をうち棄てて了つた。しばらくの餘命を、獨立と、貧困の間て過ごさうと決心した。凡俗の間に行はれる輿論の鐵鎖を切斷し、わが目の正善と認むる道に猛進して、他人の事に累はされまいために、心の力の限りを喚び起した。無數の障礙と鬪ひ、無限の努力を費して、勝利者とならねばならなかつた。自分でも意外と思ふ程の成功が得られた。これて若し俗論の鐵鎖を斷切るとともに、交友の羈絆をも脫れることが出來たならば、もうそれて自分の目的は遂げられたわけになるのてあつた。その通りになれば、そ

れこそ人類あつて以來、眞道德に對する最大の貢獻をした者と謂ふべきてあつたかも知れぬ。それだのに私は、一方て自稱大家、自稱名士どもの牧羣から出て來る、不透明な愚論を土足にかけて蹂躪きながら、他の一方ては意氣地なくも自稱親友達の言ふがままに、爲るがままに屈從してゐた。私が唯獨りて新しい道を行くのが、何ぞや幸運を掴む算段てもしてゐると想つたものか、所謂親友達は妬みの餘り、寄つて聚つて私を嗤ひ者にし、しまひには名譽まて剝ぎ取る魂膽から、そろそろ輕蔑するやうな手段を採り始めた。彼等の嫉視の的になつた物は、私の文藝上の才名よりも、寧ろ茲に言ふところの自己革命の方てあつた。何爲なれば、私が文章の方て、才名を馳せたところて、それは彼等とても默つて見てゐられぬこともないが、行爲の上て、彼等にも影響を與へるほどの異常な實例を見せつけられては、決して堪つたものてなかつたからてある。友情を生命として生れた私の、人懷かしい優しい氣質は、容易にその情を培養することが出來た。未だ廣く世間に名を知られなかつた時分、私は、周圍の人達の誰からも愛されて、一人の敵人をも持たなかつた。それが幾らか名が賣れ出すと同時に、もう一人も親友といふものの無い身になつ

た。太甚しい損害と謂はねばならぬ。が、それにも勝る大損害は、親友といふ假名の下に多勢て私の周圍に集まつて來て、親友といふ名に附帶した特權を濫用して、只管私の困るやうな位置に牽きずり込まうとする、然ういふ人間が澤山つき纏つてゐたことてある。此の懺悔錄の後の方へ行くと、然うした臭氣に堪へない隱謀が明かに解つて來よう。此處てはその起因だけを話して置くが、その手始めの奸計は聽てお目に懸ける。

獨立てやつて行くにしても、口を糊らさぬ譯にはゆかぬ。そこて私の考へ附いた生活法は、例の樂譜を寫して、一枚ても餘計爲上げようといふ、ごく簡單なものてあつた。外に確かな爲事さへあれば、無論それにしたのだが、此の方が自分の好きな道てもあり、手足を縛られずに毎日の麪包も獲られると思つて然う極めて了つた。未來に對する疑懼もなく、現金出納吏の虛榮心をも拋棄つて、いよいよ眞物の樂譜かきになつた。斯う極めてから勘からぬ利益が得られた位それば かりてなく、事情已むを得ぬ時てなければ、この爲事を廢したことはなかつた。それ程に滿足してゐた。縱し一時中止することはあつても、ぢきまた舊へ復るやうになつた。

第一回の論文の成功は、この決心の實行を一層容易ならしめた。賞與が出ると同時に、ヂドロオはそれを印刷することに盡力した。私が病床に臥てゐる時、書物の出版と其の評判に就いて言つて寄越した中に、「實に天翔る勢とも申さむか、まづは空前の成功と存じ申し候」と言つたやうな文句が書いてあつた。一般の好評、それも決して此方から買收してさせたといふ譯てもないのに、無名の一評論家に對して、これ程の推稱を吝まぬ所から見ると、實際自分には其に値するだけの伎倆があつたのかと、今迄は半信半疑てゐた自己の眞價といふことに、初めて想ひ到つた。斯うなつて來ると、是から始めようとする爲事の上にも、意外な便宜を得るに違ひない。文壇知名の人が樂譜を寫してゐるといへば、必と大流行に流行ることは極まつてゐる。斯う私は思つた。

愈〻決心が動かぬと極まるや否や、まづフランキッイエ氏に手紙を出して、決心の次第を通知し、ヂッバン夫人と二人て、是迄に一方ならぬ世話をしてくれた禮を言つて、今度始める爲事の方てお役を勤めませうといふことを書き添へた。フランキッイエ氏はこの通知書を讀んだが、要領を得ない。相かはらず熱に浮かされてゐると

ても思つたと見えて、早速樣子を見に來た。其處て始めて私の決心の鬱しがたい事を知つて、奈何することも出來なかつた。彼はすぐ、ヂッバン夫人や、其の外の人達の處へ行つて、私が一種の狂者になつたといふことを吹聽した。何と言はれても私は無貪著で唯自分の行くべき道を歩いた。自己革命の(第一著手は、邊幅に向つて行つた。金びかの服裝、白の長靴下、帶劍、然ういふ物は一切棄てた。鬘も圓形の帽を冠ることにして、懷中時計まで賣り飛ばして了つた。私は壓へ難い歡びの聲を揚げて「もう俺には時間なぞ見る必要がなくなつたのだ。這麼有りがたい事はありやあしない」と言つた。出納吏の方の後任は、長いことフランキャイユ氏の好意で空けて置いてくれたけれど、到頭私に復職の意志がないことを見濟まして、その位置をアリバアル Alibard 氏に讓つて了つた。これは以前年若なシャノンソオの家庭教師となつたこともあり、「巴里植物 Flora Parisiensis」といふ著書で、植物家としても知られた人であつた(原註。此處に言つたことは、今頃では大方フランキャイユなり、又その一味の人達の口から全て異なつた風に傳へられてゐるに相違ないと思ふ。けれども私はその當時からかけて、彼の隱謀が計畫されるまでの長い間、彼がいろ

いろの人達に話したその事實に基いて言ふのであるから、常識に缺けてゐるか、惡意のある人でない限りは、克くその事は承知してゐる筈である)。

奢侈を禁ずる目的で、隨分手嚴しい改革を自分でやり出しはしたものの、初めは自分で著てゐる襯衣にまでも、それを持つて行かうとはしなかつた。この襯衣はヴェネチア時代の記念物で、品質もよく、皆自分の氣に入つたのばかりであつた。數も多かつた。元來が淸潔を目的として使ひ始めたのが、何時となく贅澤に流れるやうになつて、夥しく金が費つた。ところが偶然或る男のお蔭で、この道樂が止んで了つた話がある。聖誕祭の前後、家の「お傅さんたち(後文で解る)」は皆晩拜式に出て了ひ、私はまた聖歌練習會へ行つた留守の間に、誰か知らぬが屋根部屋の扉を掘じ開けて中へ忍び入つた者があつた。その部屋には丁度洗濯したばかりの襯衣が干してあつたので、それを悉皆盜まれた。その中に極上等の麻の襯衣が四十と二枚あつたのも殘らず盜られて了つた。これで私の箪笥の底を拂いた譯になつた。近所の人の話で、一人の男が何か幾包も引つ背負つて出て行くのを見たといふことを聽いて、テレエズも私も、すぐとそれはテレエズの兄弟に當るあの碌でな

しの所業に達ひあるまいと察した。母親だけは決して那樣事はないと打ち消してゐたけれど、いろいろ動かぬ證據があつたから、母親が甚麼に申し開きをしたところで、到底この嫌疑は霽らすことが出來なかつた。しかしそれを調べ出すと、今度の事よりも、それ以外の罪まで發覺しさうな憂もあつたので、餘り聒しく言ひ立てずに濟ました。此の兄弟はそれぎり家へは顔を出さず、到頭行き方が知れずにしまつた。テレエズと言ひ、私と言ひ、恁う縺れ合つた家族に累はされるのは、何たる不運だと怨めしくなつた。這麼危險な係累は早く縁を切つて了はなければならぬといふことを、一層強く彼女に言つて聽かした。この盜難以來、襯衣道樂はふつつり止まつて、それからは極粗末な、外の衣物と釣り合ふやうなのでなければ著ないことにした。

斯うして自己の改造は一通り仕上がつたから、此の上は唯これを鞏固にし、永續させるばかりであつた。それには第一有らゆる習慣や定說といふやうなものから自己を解放し、世の後言を顧みないで、物それ自體の本具する、至善と純理とを掴むやうにせねばならぬ。著書が好評であつたところから、今度の決心までが世間

に響いて、爲事の申込がどつさり來たので、思ひの外有望な職業と想はれた。けれども其處には又いろいろの理由があつて、當りまへ程も成功は得られなかつた。第一には健康が十分でなかつた。丁度この時にまた病氣が劇しく發つて、それからは以前の樣に回復する機會がなかつたので、或は自分のかかつた醫者たちが、この病氣の上塗をしたのであるまいかとさへ思へた。診療を乞うた醫者は、モランに、ダランに、エルヴェシュス Helvétius に、マルウアン Malouin に、チエリイなどといふいづれも私の友人なり名醫で、各〻獨得の療法を施したけれど、輕快どころでなくて、反つて甚だしい衰弱を起さした。醫者達の言ふとほりにすればする程、益〻皮膚に黃色を呈して、痩せもし弱りもして來た。藥の效驗から段段自分の容體を推測して見て、自分が息を引き取る迄は、尿閉や、砂や、結石のために、絶え間なき苦痛に責められる外はないのであらうと、搔き亂された妄想が斯う思ふのであつた。煎劑とか、溫浴とか、刺胳とか、外の人に試みれば、病氣を緩める效力のあるものも、私には唯病勢を增させるばかりであつた。其の中にもダランの消息子だけは、幾分か效驗があつたと見えて、せめて一時なりとも安靜で居ることが出來た嬉しさに、これが無

くては些との間も生きてゐられぬやうな氣がした。折から丁度ダランの死に際てあつたのもかまはず、一生使用するだけの分を寄越して置いてくれと賴んで、消息子ばかりうんと貯へ込んだ。八年乃至十年間は缺かさずにこの消息子を使つたから、後に殘つたのも合して悉皆て何でも五十ルイ(約計五百圓)は費つたらうと思ふ。斯う金が費つて、而も情ない、不自由千萬な治療法を試みてゐるのだから、爲事の方は休まぬ譯には行かなかつた。それに今にも締切れようかと言つてゐる重患者が、その日その日の麪包を儲けるために、一生懸命になつて稼いでゐる氣にもなれなかつた。

一方で文藝上の爲事がまた毎日の爲事の上に尠からず妨げをした。論文が世に出るとすぐ、文藝上の辯護人たちが、申し合せたやうに私に突つ蒐つて來た。碌に題意も咀嚼けないで、高飛車に斷案を下すやうな小慧しいジョッス Josse 君たちが、彼處にも此處にもと言つた風に、頭を擡げるのが癪てたまらなかつたから、早速筆を把つて、其の餘黨までも慶にするほどの勢で凹ませて了つた(譯者云。ジョッス君はモリエエルの「戀の醫者 L'Amour médecin」に出る貴金屬商人の名。戀の病は奈何

すれば癒るかと訊かれると、それは寶石を宛行ふに限ると勸める。その實自分の利益を考へてゐることになる)。私の筆鋒にかかつて眞先に僵れたのは、ナンシイ Nanci のゴオチエ Gautier といふ人て、これはグリム氏に與ふる書といふ中て散々な目に遭はせてやつた。其の次に引つ繫つたのは、誰あらうスタニスラフ王御自身て、快く私と論壇上に相見えるといふ思召してあつた譯者云。波蘭土王スタニスラフ・レスチゥンスキイ Stanislaw Leszczynski) 一七六六年歿。元は同國の貴族の出てあつたのを、瑞典王カルル Karl 十二世が波蘭土國會をして選立させたのてある。其の後一度位を奪はれて諸方に漂浪したが、その女マリア Maria を當代の佛蘭西王路易十五世に納れて后としたので、その後援で再び立つことを得たところ、波蘭土王位繼承の役後維因の和約で讓位を餘儀なくせられて同時にロオトリンゲン公となり、且終生波蘭土國王の稱號と待遇を受けることになつた。リゥネヴィル Lunéville やナンシイに隱栖して學藝を奬勵し、自らも哲學政治上の述作に耽つた。(Œuvres du philosoyhe bienfaisant がこの王の全集てある。Le bienfaisant は文藝の擁護者といふ所から獲た綽號てあつた)。その志に感じて、彼に對する答辯の調子も十分莊重に

と注意したが、論鋒はやはり鋭くて、其の說を根柢から破つて了つた。神父ムスウ Menou といふエスイタ僧が、王の論文に手を貸した形蹟があるのを知つて、何處までが王の直筆で、何處までが僧の加筆であるかを看破つた。そしてエスイタ僧の言ひさうな、陰險な文句を遠慮會釋なく片端から攻擊して、ところどころ、僧の意見だらうと思はれる時代錯誤を指摘した。この論文は、とにかく今日まで唯一の解嘲文となつて殘つた。しかし何ういふものか、他の作物ほどに一般の注意を惹かずに了つた。眞理のためとなれば、一賤民といへども如何に王者と筆戰を交へることが出來るものであるかといふことを俗衆に示すには、寔に好い機會を自分は捉へたと思つた。私が王に答へたやうに、些しも自尊を傷けないで、それで一面對手に對する敬意をも全うするといふことは、決して容易に出來るものではない。幸ひにも論敵になつた王は、私が滿腔の尊敬を感じてゐた人で、諂諛に墮ちぬ程度で、十分にそれを發表することが出來た。それがために品位を下げずに成功した。友人達は私の身の上を氣遣つて、差し詰めバスチィユ Bastille ものであらうぐらゐに思つてゐた。けれども私自身は一向平氣だ。那樣疑懼を懷いたことは少しも

なかつた。それが當然であつた。私の駁論を讀んで、王が何と言はれたかといへば、

「もうこれで十分だ。この上爭ふことはない。」

實に大腹な王樣ではないか。それが緣となつて、この後王から尊重と眷顧を受けたことは數度あつた。この事はいづれ後に行けば話す折があらう。そして私の論說は、佛蘭西から歐羅巴各國をかけて、いと靜かに弘まつて行つた。これには誰も非難を試みる者がなかつた。

少し經つと又一人の敵が、意ひもかけぬ方面から現れて來た。それは今から十年も前に、厚い志を注いで私を世話したことのある、里昂のボルド氏其の人であつた。忘れるともなくつひ手紙を出す機會がなかつたので、その儘になつてゐたのである。其處に私の方に一つの弱味があるところへ、彼の方から挑戰的に出かけて來た。けれども其の態度が鄭重であつたから、私も同じ樣に答へた。それに對して彼は一層突つ込んだ反駁を試みた。更に私の方から最後の答辯が行つた。それきり向うは口を噤んで了つた。けれども後には、一番猛烈な敵になつて、私の

悲境を目蒐けて盛んに惡罵を浴せかけ、わざ〳〵中傷の目的て倫敦まて押し出すほどになつた。

いろいろ斯ういふ論戰ばかりにかまけて了つたが、それて眞理が發見されたのてもなければ、自分の財布が煖まつたといふ譯てもなく、畢竟樂譜を書く時間をそれだけ奪られただけてあつた。當時私の著作物を引き受けてやつて居たのはピッソオPissotといふ書店てあつたが、是も碌に原稿料を寄越さぬのみか、時には全て何も與れないことさへある。懸賞論文を出版した時でも、私は一リアルの金すら貰はなかつた。これはヂドロオが無償て本屋の手へ遣つて了つたのだ。だから長いこと待ちに待つて、幾許金つつちびり〳〵引き出すより爲方がなかつた。樂譜の方と言つてもなかなか思ふやうには行かない。つまり二つの爲事を同時にしてゐるのが、虻蜂取らずに了る原因となつた。

其の二つの爲事は反對の方向を取り、反對の結果を持ち來した。初めて書いた物が當つて、私の名が賣れ出して來た。又自分て極めた生活法は、世間の好奇心を搖かすやうになつた。——成るたけ他人に知られることを避けて、自分て制限した

境涯て、自由な、安穩な生活をする外に、何の希望も持たぬといふその異り者に會つて見たい、といふことになつて來た。それが私の希望を實現させないことになつた。いろんな事に假託けて、いろんな人間が私の室へ押し寄せて來ては、能てもない事に時間を浚つて行つて了つた。女連はまた樣樣な手管をめぐらして、私を自分達の食卓へ引つ張り出さうとして承知せぬ。對手にせねばせぬて、段段執拗く附けあがつて來る。然う誰も彼も刎ねつけることもならぬ、謝絕を言ふについては皆感情を害して行く、それを又あとから跟けて行つて申し譯をする。そんな事にかかつて了つて、一日の中に、一時間ても本當に自分の身體になるといふ折がなかつた。

そこて私は考へた。貧寒と獨行、それは、ちよつと想像したほど容易に兩立出來るものてない。自分の手仕事て生計を立つて行かうとしても、傍が然うはさせないてはないか。時間を潰させて濟まぬと言つては、種種な贈り物を返禮に持ち附けて來る。この儘て行くと終には人形芝居の道化のやうに、出來るだけ多くの役に早替りしなければならぬやうになるかも知れぬ。これほど見縊られた、齒癢い

束縛といふのがあるものでない。此のわづらひを避けようと思へば、誰から寄越しても一切贈り物を謝絶するより外によい分別がない。すると又意固地に遣ひ物を屆けて來て、物堅い私を無理に自分達の意に從はせたといふ事を、一廉の名譽と心得るやうな手合がますます殖えて來た。此方が欲しくて頼むときには、一ェキャウも與れる氣の無ささうな人たちが、引つ切なしに煩く種々なものを押し附けに來た。斷られたと言つては尊大な見得坊だなぞと、可い加減な事を言つてゐた。

今度の私の決心、今から私が歩かうとする生活の途は、テレエズの母親に取つて面白くないものであつたことは、言ふまでもない。テレエズは無慾一方の人間でも、母樣の指圖することには否を言ふことが出來ぬ。それにお傅さんたち――これはゴオフクウルの命名で――は孰れも例の贈り物を斷るのに、私ほど手嚴しくなかつた。種種な物を默つて納つてゐるやうな人達であつた。それでも隨分私に見つかつたところから想像すると、餘程來たにちがひない。こんな有樣では、默過してさせてゐるもののやうに、世間の攻擊が眼に見えて、心苦しさといふものはない。未だそれよりも一家の主人として主人がひもなく、我が身に對しても自主

を失つてゐる。然う考へて見た時の心の痛みは、幾倍劇しかつたか知れぬ。顧懸けをしてみても、惡魔祓をしてみても、懊れてみても何の效もなかつた。永久の不平家、氣むづかしや、そんな者に私が見られて了つたのは、皆母親の所業であつた。のみならず、私の友人達を捉へて、何時に限らず密密話しの絶え間がなかつた。一家の事はすべて私には祕密の團塊であつた。私も甚麽事が始まつてゐようと一切知らぬ貌で、出來るだけ騷擾の仲間入りをせぬやうにしてゐた。家内の悶着に關係せぬためには、腰が固くなくては出來ないのに、私には然うは出來なかつた。愁き訴へる術は知つてゐても、斷行の智と勇氣がなかつた。言ふことは何でも私に言はせて置くが、爲る事は皆彼等の思ふとほりにしてゐた。

無間斷の紲れあひやら、毎日の取り込みで、萎頓して了つた私は、到頭今の巴里の住居が不愉快で堪らなくなつて來た。靜として暮してゐる空はしなかつた。餘り鬱悶して散歩でもして見ようと思ふやうな時、知友の誰彼に彼方此方と引つ張り廻されない時、然ういふ時には、唯一人でぶらぶら出掛けることがあつた。衣兜にはいつも手帳と鉛筆を入れて置いて、思想の系統を纏める積りにした。考に浮

んだことはそれに書きつけることにした。ゆくりなく引き寄せた新しい境界の不快を紛らせる方便に、文藝といふものが全く私を吸ひ込んで了つた。私の初期の作物には、どれを見ても憂憤と不平の色を帶びてゐないことはない。其の原因は其處に在つた。

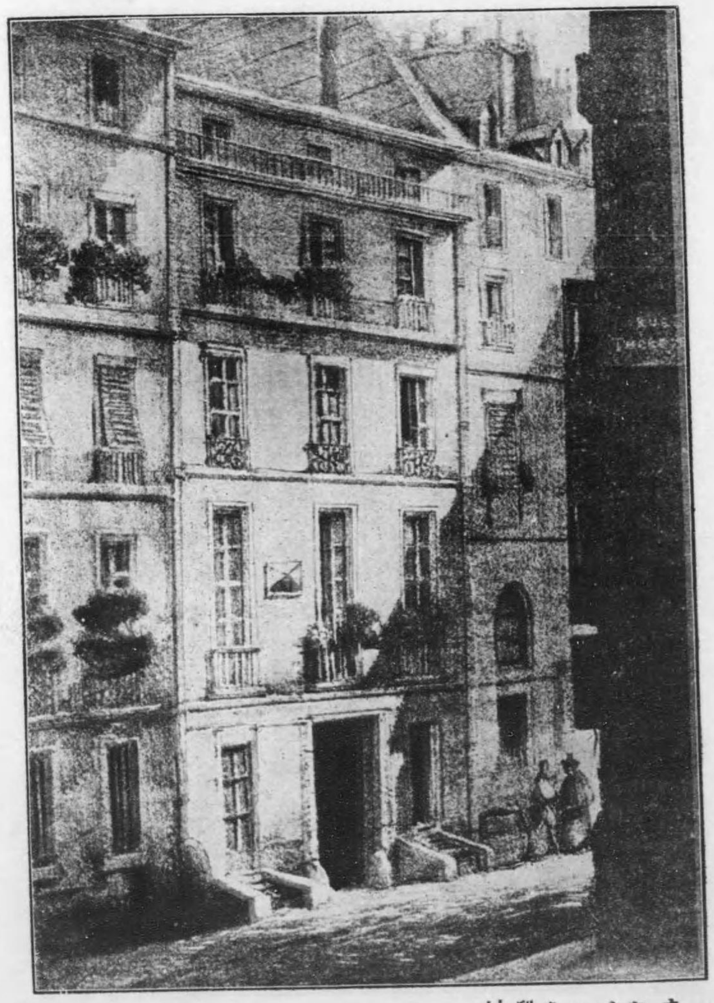
尙一つその原因になつたことがある。今私は社會の表面の人になつて了つたが、それは固より自分の本意でないから、社會の習慣といふものが解らない。またそれを自分の身に引き附けることのならぬ境界にゐたから、自分は自分流儀で押し通して、一般世間の慣例は構はないでゐよう、と然う腹を決めた。何時まで經つても痊らないのは、愚にもつかぬ臆病心であつた。自分は人並の交際法も知らないといふ心配が、病み著きになつて拔けない。そこで空威張りに威張つて、寧そ那樣面倒なものは踐み碎いて了つてやる氣になつた。羞恥しさが因て、犬儒的な、破壞的な人間に私はなつた。自分に禮節が守れないといふ心の痩せ我慢からそれを輕しめた。この態度は、今の自分の新主義とも一致するものだつたから、如何にも立派な事をした、壯烈な道德を完うした。然う言つた感じが實際にした。私は

斷言したい。斯ういふ根本觀念があつたからこそ、私の道德感情は、ともかくも見るに足るべき狀態で續くことが出來たのだ。若し自分の天稟に背くやうなことをして努力したのでは、決して然うは行かなかつたのである。何處から見ても人好きのする風でもなし、言葉つきでも大抵わかる通り、誰言ふとなく私を非社交家と呼ぶやうになつた。それでも內輪では動もすると、その本領に背くやうなこともないではなかつた。友達や知人たちにかかつては、この手に終へぬ荒熊も、まるで羔の如くに持ちなぶられてゐた。皮肉を言ふといつても、多くは一般の事實に關して際鋭いことを吐くだけで、誰に對しても失敬な言葉などを使ふことは出來なかつたのである。

「村の卜者 Devin du village」が出ると、私の名が一時に賣れ出して、廣い巴里中に私ほど持て囃された者はないくらゐであつた。此の曲は私の生涯に一つの時期を畫するものだ。この話をすると、勢ひ當時關係した人達のことも言はねばならぬ。以

後のことを明瞭にするために、少し詳しく說いて行かう。

知人は隨分澤山あつたけれど、眞箇の親友と言つては、ヂドロオとグリムの二人しかない。自分と親しい人達は、互ひに一緒にしてやりたいといふ希望があつたから、彼等二人を親しくさせずに置くといふことは、私が間に立つてゐる以上は效がなかつた。て、この二人を結び附けた。二人は意氣が合つて、反つて私との間よりも一層親密になつた。ヂドロオには無數の知己があつたけれど、グリムは外國人と言ひ、殊に新參で、これから知己を搜し出さなければならぬ。私はグリムを取り立ててやる事ばかり考へてゐた。ヂドロオを與つてから、又ゴオフクウルも與つた。シヴノンソオ夫人や、エピネエ夫人や、オルバック男爵の邸へも紹介した。この男爵と交ることは私に取つては本意でなかつた(譯者云。Paul-Henri, baron d'Holbach. 一七二三——八九。獨逸バアデン Baden のハイデルシヤイム Heidelsheim に生れ、巴里で歿した。獨逸音はホルバハであるが、巴里ではオルバックて通つた。佛蘭西當時の懷疑哲學者の一人。その著書に「自然法 Le système de la nature」がある。「百科辭典」中に寄稿したものも多くある。第十八世紀の交際社會は客室生活とクラブ生活



オルバック邸址

とて日を送つた。殊にこの頃はサロンの全盛期で、これには饗宴と女が必ず伴つて、歡娛を盡し極めた。本書の中には到る處にこのサロン生活の片影が窺はれる。今迄にもそれがたびたび出た。そして此のロアヤアル・サン・ロック Royal-Saint-Roch 町に在つたオルバックの邸宅は、殊に有名なものの一つで、此處をば當時の自由思索家等が、好個のソシニテとして犇々と詰め掛けた。Le Salon d'Holbach——この一語には、當時の立物を以て自任したあまたの才人達に、樂しい血潮を波打たせる程の好い響が籠つてゐた。デドロオ、ダランベエル以下の Encyclopédistes が始終入り浸りで、木曜日毎には辭典編纂上の協議會を開く。連中ではこれを le jour de synagogue と呼びかはした。日曜日には屹度盛んな宴會が張られる。或る者がオルバックを Le premier maître d'hôtel de la philosophie と綽號したのは、然ういふところからであつた。ルッソオがこの連中と隙を生じてからは、Côterie holbachique 或は holbachieus と連りに呼び棄てにしたことは本文で分る。此處の會の時には、談笑放言の間に、主人夫妻も交つて盛んに花を咲かせる習はしであつた。當代の懷疑家、無神論者、實證學者、革新文藝家——すべてに舊い型を飜さうと敦圉いてゐる連中のみの集團であるか

ら勢餘の燻んであつた事は想像に餘る。その中で唯一人よく言へば異色だが、皆からは執拗陰險と見られてゐたのが、ルッソオであつた。口かずも利かず、偶に言葉が脣に上ると、すぐ衝突の種になる。Diderot et le curé de Montchauvet といふ書物に斯ういふ話が出てゐる。ノルマンディのモンショオヴェエといふ田舍に自惚の強い僧があつて、稺氣に滿ちた自作の劇を、ヂドロオに賴み縋つて、其の紹介でオルバックのサロンに持ち出して朗讀することになつた。室は調度裝飾に眼を眩す程の主人の書齋、會員はルッソオ、ヂドロオ、ダランベエル、デックロオ Duclos マルモンテル Marmontel エルヴェシュス Helvétius ド・ジョオクウル De Jaucourt レヤナル Raynal ド・ラ・コンダミイヌ La Condamine モレレヤ Morellet ド・マルジャンシイ De Margency その外錚々たる顏觸れ。其處へ心は高鳴りしつゝも、外形の甚だ振はぬ一寒僧が、おづおづ這入つて來たので、傍の者等は蔭でくすくす笑つてゐる。獨りルッソオは他を見て嗤ふなぞといふがあるものかと言つて、苦り切つた眞顏でゐる。彼の僧の詩才、文才を試みるやうな、滑稽な問答が一順濟んで、彌よ劇が朗讀される。實際話しにもならぬ程の愚作なので、冷評が雨のやうに下る。終には莫迦にして了つて、大した手腕だ

辭典編纂者

中央上はダランベエル下はヂドロオ左側第一はヴォルテエル
第二はルッソオ

……ラシイヌより優れてゐる……コルネイエより大膽だ……ヴォルテエル以上の天才だ……全巴里市をして此の神祕劇の前に叩頭せしめんけれやならん……」などと言ひ囃す。ルッソオは初から默つてゐたが、この時衝と僧の前へ出て來て、「君の悲劇は滅茶苦茶だ。ああして皆が讃めるのは、君を莫迦にしてゐるのだと知らないのか？　さつさと村の寺へ歸つて行き給へ。」僧は眞赤になつて突如ルッソオに武者ぶり附く。どたんばたんと取つ組み合が始まる。多勢してやつとの事で二人を引き分けた。

私の友人といふ友人は皆グリムの友人になつた。それは覩易い道理であるが、彼の友人は一人として私の友人になつた者がなかつたのは、反對の現象ではないか。彼がフリエエズ伯邸にゐた時分は、よくその邸の會食に招かれて行つた。フリエエズ伯は固より、特にグリムと親懇であつた伯爵の一族ションベエル Schomberg 伯や、その外グリムと關係のある男女誰からも、私は恩惠を受けたやうなことは曾てなかつた。唯一人、グリムの友人てレエナル師といふのが、進んで私の友人だと名乘つて出て、時には世に稀な特志から、莫大な金を惠んでくれたことはある。し

かし私がレエナル師を知つたのは、グリムが未だ交際を始めない前からの事で、或る事件があつて以來始終私はこの人に傾倒してゐたのである。それは些とした機に起つたことだつたが、その細心なこと、雅量に富んでゐたこと、それを私は決して忘れることが出來ぬ。

レエナル師は確かに溫かな友人であつた。その證據は、今話をしかけてゐる頃に、彼の親しくしてゐるグリムへ世話の爲振りて解つてゐた。グリムにはフェル Fel といふ親しい女の友があつた。しばらくは二人の間に何の事もなかつたが、無てグリムは烈しい戀に襲はれて、カユザック Cahusac の後釜にこの女を据ゑようとした。美貌の友は貞潔を誇りとして、この新たな崇拜者を無下に斥けた。グリムは悲劇的な境涯に陷つて、死なぬばかりの心地になつた。それが間もなく、われわれの聞いたこともない奇態な病に變じた。晝も夜もうつらうつらと昏睡の狀態で、眼はぱつちりと睜つて、脈搏にも異狀がないのに、口も利かず、物も食はず、身動きもせぬ。他が何か言へば、聽き耳を立ててゐるやうでもあるが、口ではもとより身ぶりでさへ返辭をしようともしない。氣が立つてゐるでもなく、悲哀に包まれてゐるでも

なく、熱があるでもなしに、唯斯う靜と死人のやうに、其處へ横になつた儘でゐた。

レエナル師と私が、二人で看護の勞を分つた。師の方が私よりも身體が丈夫であつたから、夜の番に膺り、私は晝間附き切りで、二人が同時に不在にすることはなかつた。フリエエズ伯は愕いてセナク Sénac を伴れて來た。この醫者は、篤とグリムの容態を診たが、別に何でもないやうに言つて、處方も與れなかつた。友の身に關する私の憂慮は、醫者の顏色に深い注意を向けさした。思ひがけずも醫者は滿面に笑ひを漲らして出て行つた。けれども病人は幾日も尙且寢込んだまま、羹汁も何も口にしようとはせず、唯私が掛かつて櫻實を口の中に入れてやるのを、旨さうにして喰つてゐた。ところが彼は、或る朝偶と病褥を離れて衣物を著替へ、不斷のとほりに何喰はぬ貌をしてゐた。レエナル師や、外の人達に向つても同じことだつたらうと思ふが、私なぞにはあの奇態な昏睡病のこと、また病中に二人が盡した看護のことに就いて、彼は一語も言ひ出さなかつた。

この騷ぎは世間の取沙汰を惹き起さずに濟まなかつた。オペラ座の歌女が强面くしたばかりに、男一匹、絕望の極死なうとまでした、と言へば、これほどの珍談は

なかつたのである。此の意氣な情のために、グリムは世間の呼び物になつた。グリムと言へば、戀愛、友情、その外廣い意味の愛情といふものの權化と見られた。この世評の結果として、彼は上流の交際社會での流行兒となり、その持てかたはすばらしいものであつた。それが因で私との間は遠くなつて行つた。彼に取つては、私といふものは最初から厄介物であつた。私とは全然別れて了はうとしてゐるやうに見えた。彼自分では暖い情を持つてゐるらしく見せてゐたけれど、それは唯表面だけであつた。私のやうに、口へは出さずに心で深く思つてゐるのと、質が違つた。彼が社會で成功することは、私の望む所だ。けれども、彼自己の親友のことまで忘れて然うなることは私として好まぬ。或る時私は斯う言つたことがある。

「君は僕を疎外するね。それもまあ可しとするさ。だが今君が然うやつて大評判に醉はされてるのが、一朝醒めたとして見給へ、それや君その後は寂しい感じがするものだよ。その時にはどうかまた僕に復つてくれたまへ。僕は何時だつて同じなんだから。今はまあ束縛なしに何處へでも自由に行つた方がよからう。僕は君を待つてるぜ。」

この言葉に彼は頷いた。私の言つたとほりに準備して、自分の思ふやうに活動を始めた。て私達に共通の友人の仲間でもなければ、もう彼と出會すことはなかつた。

後には彼もエビネエ夫人と親しくなつたが、その前は大抵オルバック男爵の邸を吾儕の會合場所にしてゐた。この男爵といふ人は、或る成りあがりの者の息子で、なかなかの金滿家であつた。が、その金は多く善い方の事に使つて、邸へは文學者や材藝ある人たちを請待した。自分も才學のある人で、然ういふ人達の間に立ち交つても、遜色はなかつた。以前からヂドロオとは關係があつたので、未だ私の名が世間へ出ない頃の事ではあつたが、彼を介して私に交際を求めて來た。私の性來の、人を毛嫌ひするところから、此の好意に酬いることを久しく棄てて置いた。何故交際してくれないかといふ訊ねが、彼から來た。私は「大へんな富豪でゐらつしやるから」といふ答をした。それでも强ひてといふので、到頭此方が根負けをした。私の最大の不幸は、常も他の媚を斥けることの出來ないところから始まつた。私はそれに降伏して了つたことを、何時とて口惜しく思はぬことはなかつた。

もう一人デゥクロオ氏をも知つてゐた。私の方に、相當な資格が出來るとすぐ友人といふことになつた。數年前ラ・シゥヴレットのエピネエ夫人の邸で初めて會つたことがある。彼と夫人は親密であつた。その時は唯一緒に食卓に著いただけで、すぐ彼は其の日の中に歸つて行つた。その間にちよつと話をした時に、夫人は私の身分や「粹詩神」のオペラのことなどを彼に話した。彼くらゐ立派な蘊蓄があれば、彼に愛されるのも當然だが、それが私のやうなものをも見棄てないで、家へ話しに來るやうにと言つて、招んでくれた。知己が欲しいと思ふ舊の私の傾向に加へて、既に相識の間となつたのだから、行けば譯もなく行けたのであつた。が、其處に臆病と、疎懶とが附き纏つてゐて、彼は好意があるといふ外に、是ぞといふ橋渡しをする者がないといふので、その儘引つ込んでゐた。ところが今度自分の作が大當りで、それをデゥクロオ氏が感賞したといふ噂を何處からとなく聽き込んだので、いそいそ遇ひに行つた。向うからも出掛けて來た。斯うして私達の間に始めて將來頼もしさうな結合が成り立つた。嚴正、誠實——然ういふものは、決して文藝と兩立の出來ないものでない、といふことは、私の心がそれを實證するばかりでなく、

この人との結合に依つて一層明かに學び得た(譯者云。Charles Pinot Duclos は文士、歴史家、道德學者。初期の作は多く物語類であつた。その中「……伯の懺悔錄(一七四二)」といふのが名高い。前第一七四二年の條に此名が出た。その他の著書には、「當世紀風俗の研究 Considérations sur les mœurs de ce siècle」「路易第十四、五世朝の祕密文書 Mémoires secrets des règnes de Louis XIV. et de Louis XV.」などがある。一七〇四—一七七二)。

この外にも「餘り親しくない交友を擧げれば隨分澤山ある。が、一一言ふにも足らぬ。それらは私の名が賣れ出した結果で出來た。彼等の好奇心が滿足させられる間だけは續いた。私といふものは、一度遇つて見れば、底の底まで知れて了ふやうな人であつた。翌日見ると、もう何も新奇な物を見出すことの出來ないやうな人であつた。けれども當時私を慕つた多勢の中で、婦人が一人だけ私を離れなかつた。それはクレキイ Créqui 侯爵夫人といつて、マルタ Malta の大使、大法官フルウレエ Froulay 氏の姪であつた。フルウレエ氏の弟はかのヴェネチア大使モンテエグ氏の前任者であつて、私がヴェネチア共和國から歸つて來るときにも遇ひに行つ

たことがある。クレキイ夫人から案内狀があつて、その邸へ行つた。夫人は私を親友と見做して、食卓を共にしたこともある。その時會つた文學者連中ては、スパルタクス Spartacus」や「バルネフェルト Barneveldt」などの作者として知られたソオランソオランの父が曾て卑劣な手段で或る人を惱ましたことがある、其の或る人と私とが同名であつたといふところからかも知れぬ(譯者云。Joseph Saurin は巴里の悲劇詩人。一七〇六—一七八一。父は Elie Saurin と言つて新教の神學者であつた。一六三九—一七〇三。ルッソオと同名の人といふは、ジァン・バチスト・ルッソオのこと。此の條の注は後の三八一頁を看よ)。

本職の方から言へば、朝から晩まで稼ぎ通しにせねばならぬ樂譜書きの私が、いろいろの事に妨げられて、毎日の儲けにも影響した。そればかりてはない、十分立派に仕上げようと思つて書いてゐるのが、根つから注意が集まらぬやうなことになつて來た。那樣事て、折角自分の物と思つた時間の過半は、書き損ひを消したり削つたり、新規に書き直しをしたりすることて費えて了つた。斯うした煩累は一

日一日巴里の住居を堪へられなく思はせた。そして心から田舍に移つて見たいと思はせた。私はマルクッシイ Marcoussis で幾日かを過ごすために何度も出かけた。其處の助祭をテレエズの母親が知つてゐたので、あまり厄介を懸けぬやうにしてその家て滯在した。グリムも一度私と其處へ行つた(原注。此處て或る瑣細なしかし忘れられぬ事件が彼との間に起つた。それはサン・ヴンドリィュ Saint-Vandrille の噴水館へ食事をしに行く時てあつた。つひ忘れて話さなかつたから、もうそれは言はぬことにするが、しかし、後になつてよく考へて見ると、グリムの心の奥底には、其の時分から隱謀を蓄へてゐて、遂にあれだけのことになつたのだと思つた。助祭は美い喉を持つてゐて唄が巧かつた。深くも樂理は知らなかつたけれど、自分の役は早呑み込みに、しかも間違なく記えて了つた。私がシノンソオて作つた三部合唱曲を唱つて樂んだこともあつた。グリムと助祭が、良いなり惡いなり歌詞を作つて、それに私が曲を附けて、それてまた二三曲は殖えた。是等の合唱曲は、いづれも斯うした清らかな遊樂の折ごとに作つて唱つたものてあつたのに、外の譜本と一緒に、殘らずウットンへ拋棄つて來たのが殘念てならぬ。おほかたその紙

はダヴェンポオト嬢が、頭髪でも捲くのに使つて了つたてあらう(譯者云。英吉利ウトンでルッソオが世話になつた人の娘)。大切に保存して置きたかつた。その中には非常にすぐれた對譜法から出來てゐるのさへあつた。斯ういつた遊山の時には、「小母さん」も上機嫌でにこにしてゐるので、それが私には何より嬉しく、自分も調子づいて何がなし面白くてたまらなかつた。その中の或る機會に、大急ぎで不出來ながら、助祭に與ふる書といふのを韻語で書いてみたことがあつた。それは草稿の中に在る筈だ。

もつと巴里に近い處で、もう一つ酷く氣に入つた集會所があつた。私と同鄕人で、親戚なり、友人のミッサアルが、バッシイに瀟洒な隱宅を構へてゐたのがそれであつた。此處でも緩乎と遊び暮したことがある。ミッサアルは寶玉商であつた。分別に長けた人で、商賣の方では呟と金儲が出來たし、一人娘は仲買人の息子で、大膳職のヴルマレット氏へ嫁入らせて了つたし、もう好い時分と看て取つて、齡の寄り際に、煩い商賣上の懸引を廢して、奮鬪期と臨終との中間に、安息、享樂の一時期を作らうといふ、うまい考を立てた。純朴なミッサアルこそ、眞に實際的の哲學者と謂ふべき

であつた。自分の拵へた住み心地のよい家の內に、我が手で造つた趣の深い庭の內に、長閑な殘年の生を樂んでゐた。庭の臺地を深く堀り下げると、非常に澤山な貝殼が出て來た。それから彼の空想が爛れ出して、此の自然の中に、貝殼の外は何物も考に這入らなくなつた。終には、宇宙は貝殼のみから成り立つて、地殼も唯其の沙礫の堆積に過ぎぬ物だなぞと眞面目に信じて了つた。此の問題、この新奇な發見で、心は全く占領されて了つた。今にも彼の頭の中に新說、寧ろ妄論が組み立てられさうな風に見えた。ところが、彼の推論に取つては幸福であつたかも知れぬが、彼と親密な、そして彼の隱宅を無上の樂地として慕ひ寄つた友に取つては甚だ不幸な「死」が、奇態な、殘忍な病氣の力で彼を奪ひ去つた。腹部に腫瘍が出來て食物は通らず、だんだん重くなる一方であつた。長い間原因も知れずに、幾年か苦み拔いて、到頭飢渴のために死亡して了つた。私はこの哀むべき、而も尊むべき人の最期を思つて、心の痛みを感じずに居られぬ。臨終の苦痛を見るに忍びないと言つて誰も彼も逃げ出したその後に殘つて、傍を去らずに看護をしてゐたのは、ルニヤ Lenieps と私と二人切であつた。それをさも嬉しさうな容子を見せて饗應しな

がら、自分はごく薄めた茶を一雫も咽へ通すことのならぬ――呑み下すが最後、忽ち咽せ返さねばならぬほどの身で、前に並んだ下物をば、いかにも好もしさうに眺りと眺めてゐた。その心持を思ひやると慘らしくてならぬ。然し、この悲哀の日に到著する迄には擇り拔きの氣に入つた友達ばかりと、どのくらゐ樂しい日を送らして貰つたか知れぬ。私はその友達の筆頭に、ブレヴォオ師を掲げたい。可憐な、素朴なこの人の感情は、彼の不朽な作品を飾るに足るものであつた。彼の作は孰れを見ても陰鬱な色彩が漂つてゐるにもかかはらず、其の自身の氣質、社交上の調子に毫しもさういふ形跡の見えなかつたのも意外であつた(譯者云。L'Abbé Prévost d'Exiles は當代の佛蘭西小說家。宗教、社會、軍隊、漂浪、樣樣の生活を經て來た人で、作は甚だ多い。その中、Histoire du chevalier Des Grieux et de Manon Lescaut (一七三二)。又ドライデン Dryden ヒウウム Hume リチアアドソン Richardson キケロ Cicero 等を佛譯した。一六九七―一七六三)。次に醫者のプロコオプ Procope これは小伊蘇保ともいふべき、婦人連の御味方黨。ブウランヴィエは名高い「東洋專制政治 Despotisme oriental」を死後に出した人で、ミッサアルの新哲學を、この人は宇宙の生命といふことにまで擴充したやうに思はれる(譯者云。Nicolas-Antoine Boulanger は巴里の文學者、兼哲學者。一七二二―一七五九)。婦人ではヴォルテエルの姪のドニイ Denis 夫人、未だその頃は只の女子で、才を衒ふところまで行かなかつた。ヴンロオ Vanloo 夫人は美人とはいはれなかつたが、愛嬌があつて、歌を唱ふ聲音は天使のやうであつた(譯者云。夫人の夫は Carle Vanloo で、その兄と共に有名な畫家であつた)。ヴルマレット夫人ももとより唄は巧かつた。身體は痩せてゐたけれど、あれて餘り氣取り過ぎなかつたら、もつと愛嬌のある質であつたかも知れぬ。ミッサアル氏を中心とする社交界は、雜と這麼有樣であつた。貝殼の研究で夢中になつてゐたことは、私を喜ばせなかつたにしても、あの友達だけで、十分己を慰めることは出來た。そして六箇月の餘、私も彼と共にその書齋に入つて、同じ程度の興味で、その研究を續けてゐたのであつた。

彼は始終斯ういふことを言つて私に勸めてゐた。それは、このバッジイの水は、君なぞの身體には大へん藥になるから、何時でも來て飲んでゐるのが可からうといい

ふことであつた。都會の雜沓は豫ねて避けたいと考へてゐた折柄で、聽てその言葉に從つて一週間か十日其處へ行つて見た。思ひがけぬ利益が其處で得られた。單だ水を飲みに行つたといふことのためよりも、田舍へ移つたといふことがそれであつた。ミゥサアルはセロが彈けて、伊太利亞音樂といへば譯もなく嬉しがつてゐた。或る晩私達は寢床に就く前に、連りとこの話に身が入つた。中にも滑稽歌劇のことが出て來た。それは二人が前に見物して、非常に面白く思つたものであつた。その晩は遂眠ることが出來なくて、奈何すれば佛蘭西へも、この種の劇の味を吹き込むことが出來るであらうかといふことを考へ通した。「アムウル・ド・ラゴンド Les Amours de Ragonde のやうな歌劇もないことはないが、それとても、今いふのとは似もつかぬものである」譯者云。この歌劇はデッウシゥ Destouches の作歌、ムウレエ Mouret の作曲に係る。デッウシゥは當世紀佛蘭西に於ける嬉劇作家として最も有名な一人。その作十七篇に上つて、傑作には Le Glorieux がある。一六八〇―一七五四)。朝になつて散歩をしたり、水を飲んでゐる間に、偶と私は唄の文句を口誦んで、丁度その時浮んだ曲節をそれに合はして見た。庭の片隅に離れて建つた

圓天井の乾淨房めいた處で、なぐり書きにそれを書き下した。茶の時にミゥサアルや、家へ手傳に來てゐるヂゥヴェルノア Duvernois 孃に見せた。彼女は可愛い、氣質のよい女であつた。私の走りがきしたといふその歌詞を抜き出してみれば、第一獨白が、

J'ai perdu mon serviteur;
わが忠僕は失せにき。
L'amour croît s'il s'inquiète,
悶ふるにこそ戀は增され。

ト者の咏嘆調が、

それから最終の二部曲が、

A jamais, Colin, je t'engage.
永遠に離れじ、わがコラン。

などといふのであつた。若しこの二人が褒め立てなかつたら、自分では書き續けるだけの値打もないと思つてゐた。今までにもあつたとほり、書きかけの紙屑を

火の中に燻べて了つて、殘念にも思はなかつたかも知れぬ。が、彼等の煽り方はあまり强かつた。若干の詩句を除いて、六日目にはもう一通り此の劇作を完成して了つたほどであつた。曲譜の方も大かた出來上つて、巴里に歸つてからは、唯宣敍調の一部を作曲して、全體の修正をすればよい所までになつた。それは非常な速力で、三週間の中に、淸書を濟まして、何時でも、舞臺に掛けられるやうになつた。中て不足なところは、間曲だけで、こればかりは迴と後になるまで手を著けなかつた。

一七五二。

この作曲で私は急に熬立つて來て、一度實演がしてみたいといふ希望が壓へられなくなつた。これが若し自分の思慮どほりに、——丁度ルルリイが、自分の作つた「アルミイド Armide」の曲を、自分一人だけが見物となつて演らせたやうに——誰にも見せないで試演が出來る事なら、私は甚麼ことをしても惜しくないと思つた

(譯者云。Giovanni Battista Lulli《Jean-Baptiste Lulli》はフィレンツェに生れ、巴里に來て路易

十四世朝に歌劇作者として盛名を博した人。巴里のオペラ座は即ちこの人の創設に係る。名作には「アルミイド」の外に Psyché, Proserpine 等がある。一六三三—一六八七)。が私の場合では、多勢の看客と一緒でなくては、自分も看ることは出來ない。奈何してもオペラ座で此の曲を採用して貰つて、其處で演奏させるより外に途がない。生憎この曲は新奇に過ぎて、一般の耳は未だ斯ういふものに慣らされてゐない。それに此の前「粹詩神」に失敗した後で、今度若し同じ私の名前で出したところで、人氣の立たぬことは眼に見えてゐる。この憂ひを救つてくれたのはヂョクロオでであつた。彼は作者名を現さずに舞臺に掛けることを引き受けた。作者が私といふことを見露されないため、練習場へ私が出なかつたので、二人の「ヴィオロン彈手」(原注。ルベルと、フランクウルの二人は、若い時分にヴィオロンを提げて、家家を流して歩いたから、Les petits violons といふ綽號を取つた)も、自分たちがその曲の指揮者になつてゐながら、——一般の感賞が、竟にこの作の眞相を證據立てるまでは——作者が誰であるかを知らなかつた。聽衆は孰れも醉つたやうになつて歸つて行つた。その翌日からは、何處の社交團體でも、談はすべてこの曲のことで持

ちきりの有様であつた。稽古の時に來て手傳つてくれた宮内官のキュリイ Cury 氏は、宮中で演奏させて見ようと言ひ出した。私の意中を知つてゐるヂュクロオは、宮廷ではどうしても束縛を受けるから、とても市中で興行するやうな譯には行くまいといふので、キュリイ氏に斷つた。キュリイ氏の方からは折り返して、權威を笠に被てまた申込んで來た。ヂュクロオはやはり動く氣色がない。二人の間に喧譁が始まつた。或る時オペラ座で、兩方とも烈しくこの事を言ひ爭つた末、席を離れて表へ出ようとしたのを、纔と他に止められて濟んだことさへあつた。其のうち私の方へ直接に勸めに來た。私はヂュクロオに委してあるから、と言つて取り合はなかつた。またヂュクロオの方へ取つて還さなければならぬことになつた。其處へ丁度オオモン Aumont 公爵が這入つて口を利くやうになつた。到頭ヂュクロオも權威には歐はぬことを曉つて、私の劇をフォンテヌブロオ Fontainebleau で開演することを承知した。

この劇曲全篇の中で、一番力の這入つたそして舊い型から拔けて出ようとしたのは宣敍調であつた。强聲の工合なぞは、全て新しいもので、臺詞の朗詠に伴つて

進動するのであつた。これほど思ひ切つた新物は、とても無事に通してくれぬ。第一、因襲に囚はれてゐる多くの耳が承知する氣づかひはない。フランキュイユとジェリヨットが、別に一種の宣敍調を作つては奈何かと言ふので、私も同意したが、私自身にその中へ喙を容れることは避けた。

一切の準備が出來て、開演の日も極まつた。せめて本稽古だけでも看に、フォンテヌブロオへ出掛けないかと勸められた。私はフェル孃にグリム、それからたしかレエナル師と一緒に、王家の馬車に乘つて其處へ行つて見た。本稽古は先上出來の方で、豫想外の滿足を感じた。管絃樂部は、オペラ座附のものと、宮内省の音樂隊とで組織した大團體であつた。ジェリヨットがコランの役、フェル孃がコレット Colette の役、キュヴィエエ Cuvilier が卜者の役と極つて、合唱班はこれもオペラ座一まきの連中を招んで來た。私は些とも口を出さなかつた。舞臺の監督はすべてジェリヨットに一任して置いたから、それに對してとやかく干涉することは好まなかつた。私は宛て羅馬人然と鷹揚に構へ込んでゐたけれど、多勢の看客が立て込んだ中では、何となく氣恥かしくて、心の中を言へば學校の兒童のやうであつた。

翌くる開演當日の朝、私はグラン・コンモン Grand Commun のカフェへ朝飯を喰ひに行つた。多勢の人が來合はしてゐた。人人の話は、昨夜の本稽古のことゝ、入場が容易に出來なかつたといふやうなことで持ち切つた。其の中に陸軍士官が一人居て、入場は那樣に困難でもなかつたといふ事から說き出して、その當夜のいろいろな物語を始めた。作者は斯う〳〵いふ人で、甚麼事をした、這麼事を言つた、などと話した。その長い話をことごとく眞面目に、如何にも眞らしくしたのはよかつたが、話の中に唯の一言も眞實なところはなかつた。現に彼が穴のあくほど見て來たといつてゐる、その眞の作者が今眼の前に居るのに、一向知らぬらしいところから考へてみても、知つた風に話した彼は、實は入場したのではなかつたのだ。此の話は不思議な影響を私に及ぼした。その士官は相當年輩の人で、厭味な氣取つたやうな風は少しも見えなかつた。容貌を見ても、啻ならぬ勳功のある人といふことは爭はれなかつた。聖路易十字章を佩びてゐるところから見ても、一個の元老將校たることは知れた。厚顏な話をした、私の氣質とは相容れぬ筈の此の士官が、妙に私の注意を惹いたのである。彼が連りと嘘を吐いてゐるその間に、私の

顏はぽつと上氣して、眼はおのづと俛き氣味になり、身は針の上に居るやうな心持がし出した。彼の嘘を無邪氣な過ちと見做すには、奈何すればよからう。然う考へて、少時は心の中で、思ひ惱んでゐた。斯うしてゐる中にも、誰かが私を見つけて、その士官に面皮を失はせるやうなことになりはせぬかと、急に心配で堪らなくなつた。物も言はずにシャコラアをぐい呑みにしてしまつて、その人の前を顏を背向けてすつと通り拔けた。大急ぎで表へ飛び出すと、後には彼の話に又花が咲いて、賑かに談り合ふ氣勢であつた。町の眞中まで來て、自分はと見るとぐつしより汗塗れになつてゐる。若し私がそのカフェを出ない前に誰かに見附かつて、名を呼び掛けられてもしたら、私は必と罪人のやうな羞恥さと窮困とを露したにちがひない。何爲なれば、士官の出鱈目がそのために化けの皮を引きめくられて、嘸かし苦しい思ひをしなければなるまいと思ふ同情が、其處へ湧き出るからである。

さて是からが生涯で、大事な潮界へ向つて行くのである。これに就いては唯ありのままを話すより外に爲方はない。その記實といふことさへ、どかく毀譽いづれかの色彩を帶びたがるのは免れられないことであるからだ。とにかく私は奈

何いふ風に、また奈何いふ動機で行動したかといふことを、讃めも誹りもしないで、眞直に報告するとしよう。

其の當日の私の服裝と言へば、尙且不斷の著のみ著の儘で、鬚は蓬蓬と延び切つたところへ、櫛目も入れない鬘を冠けてゐた。この方が磊落でよいなぞと自分の不作法に言草を附けて、其の儘國王、王后、王族やその外宮廷を擧げて、程なく臨場せられるといふ劇場の中へ、のつそりと這入つて行つた。キゥリイ氏は自分の觀棚へ私を案内して席を取つてくれた。舞臺の上に當る場席で、餘程廣闊した。向ひ合つて少し狹いが、ずつと高くなつた一區劃の觀棚には、國王が例のボンバヅウル夫人と列んで座を占めてゐた。私の居る周圍は皆婦人連ばかり、男といふのは私だけで、而もその席の極端に据ゑられてゐたのであるから、多勢の前へ廣告に出して置くのだらうといふ風に信じられた。燈火が這入ると、自分一人如何にも見窄しい扮裝をして、いづれも綺羅覿裝した士女の中に挾まつて居るといふことが、今更のやうに際立つて見られたので、心の中に不安の浪が立ち騷いで、是は自分の坐るべき場所か、またそれに相應した扮裝だらうか奈何かといふことを思つてみた。

しばらく取つ追ひつ迷つた末に、なに、これで可いんだ」と自ら答へた。これは全く最初に如彼言つた廣言に對して行き懸り上、捨撥氣味で言つたので、決して理性の語ではなかつた。斯う私は言つた。

「俺はこれで正當な場所に陣取つてるんだ。今觀ようとしてるのは自作の戲曲ぢやないか。それを看せようと言つて招待する人があつたから此處へ來てるんだ。自分の努力と技能の果實を、俺が自分で翫賞しようといふ、是以上の特權を持つてる者が外に誰がある？　衣物だつて是が俺の通常著てゐる衣物だ。特別に艶飾しもしないし、故と穢くして來た譯でもない。ちよつとでも凡俗どもの考を酌み始めると、もう何事もみんなその言ふなりにしなければならないことになる。何時までも自主の心を失ふまいと思へば、甚麽場所へ出ようとも、自分が可いと思つた扮裝をしてゐる以上は、決して赤面などするには當らないことだ。容貌だつて然うだ。隨分平凡な上に、根つから構はない方だけれど、垢も著いてなければ、不潔くて堪らないといふのでもない。鬚なぞも、これで天から授かつただけに、決して元から見苦しいのではない。時と品によつては、一廉の裝飾にもならうといふ

のだ。俺の姿を見て、滑稽だとか、無禮だとか言ふ奴があるかも知れないが、有つたつて何だ！　此方が然うてなければいい譯ぢやないか。」

を据ゑてさへすればいい譯ぢやないか。」

斯う獨りて氣燄を吐いて、若し然ういふ風に我慢を張り通す必要があつたら、十分張り通せるまでの覺悟をした。然し現在國王陛下が臨場されてゐると思つた故か、感情の自然の傾向に由つてか、今私といふものが、入場客の好奇心の當對となつてゐることを思つて見ると、そこに深切、好意などといふものの含まれてゐることを奈何しても見逃がすことは出來なかつた。然う考へ出すと、折角喝采を吝まぬらしい一般聽衆の好意を斥けるやうな感じがした。自身から延いては作品まで累を及ぼすやうなことになりはせぬかと、復も不安の情が萌すほどに心を撲たれた。私は嘲笑に對する警戒を怠らなかつた。案外にも人人の態度は深切であつた。私はたゞ縮み上つて、幕が開いた時にはまるで子供を見るやうにうち顫へた。

すぐと元氣を取り直すだけの種を見つけた。優技の方は話にならぬほど拙か

面會舞の「者」の村

つたけれど、音樂の方は、唱歌も奏法も孰方も旨かつた。ナイイヴな、そして人を慫るやうな第一幕の初頃から、觀棚毎に驚嘆の囁きが、蒸し昇るやうに聞え出して來た。この種の曲に對しては、曾てなかつたことである。その沸騰は遂て小屋中に聞こえ渡るほどになつて來た。モンテスキゥウの筆法で言ふと、影響が影響を生み出す(augmenter son effet par son effet même)といふ狀態であつた。二人の仇氣ない男女の出場になると、もうその影響は絶頂に達した。國王が居るから手は拍けない。それが爲に、聽衆の話し聲は殘らず手に取るやうに聞えて、それが反つて其の曲のため、即ち私の利益になつた。私の周圍には天使とも疑はれるやうな美しい女が多勢見物してゐて、口口に何をか囁き合つてゐた。低聲で話し合ふのを聽いてゐると、「美い音ですことね、恍惚するやうだわ。しみじみと胸の處で囁くやうぢやありませんか」なぞと言つてゐる。斯う澤山な可愛い女客達に、これ程の情緒を噓き込むことが出來たかと思ふと、歡びが涙に變る程に感動させられた。其の時眼に涙を有つてゐる者は、自分ばかりでもないと氣が注くと同時に、第一二部曲の始まるまで、どうしても抑へ切れなかつた。と、偶と昔トレエトラン氏の家で、演奏會を

開いた時の事を憶ひ出して、少時自分を回顧して見た(前篇三一〇頁)。この回顧には、勝利者の頭上に桂冠を捧げた奴隷ぐらゐの效力があつた。しかしそれはほんの瞬間の事で、すぐ又、何の懸念もなく、十二分に、自分の榮譽を樂み樂み味ふことに取り掛かつた。が、私は斷つて置く。その時の享樂の中には、作者としての名聞心よりも、異性から受ける實感の方が、より強く活いた。であるから、若し聽衆が男ばかりであつたら、搾り出す甘い涙の露を、一生懸命唇で受け込むやうなことはしなかつたに相違ない。今度のよりも、もつと烈しい嘆美を博した種種の曲を自分は觀て知つてゐる。然し、生き生きした刺擊から來る酣醉が、演技の闌ねるまで、而も王家の面前で、初日早早遍く漂ひ滿ちたといふことは未だ知らぬ。當時、この芝居へ這入つた人たちは、然う言はれれば皆憶ひ出すことがあらう。その成績は全くめづらしいぐらゐのものであつた。

其の夜オオモン公爵から使が來て、明日十一時に宮中へ伺候しろ、その時陛下に拜謁させるからと、言ふことであつた。この傳言を齎らしたキヴリイ氏は、更に斯う附け加へた。多分それは年金を給與される話に違ひあるまい。而もその辭令を、

陛下が御手づから下賜遊ばさうといふのであらうと。

榮光の降り濺ぐにも似たこの日の夜、それが私に取つては苦痛と懊惱の一夜であつた。と言つても誰が眞箇にしよう? 拜謁といふことから引き續いて浮んだのは、私の退隱が妨げられるといふ考てあつた。この考のためには、演技の最中てすら、甚麼に惱まされたか知れなかつた。況して明日また畫廊や、至尊の御座所で、數ある縉紳と竝び立つて、陛下の出御を奉迎するとなつたら、其の時の苦痛は想像にも餘る。上流の社交界に飛び込みもせず、貴婦人達の包圍を脱れたのも、全く斯ういふ病氣が私にあつたからである。そんな要求に曳かれて行つたとして、その境を考へて見ただけて、もう病氣になりさうになる。然もなければ死に勝る程の惡評を被らなければならぬことと思はれる。この境界を知つてゐる人てなくては、此の冒險の可怕しさを判ずることは出來ぬ。

つづいて拜謁に出掛けた時の事を假想して見た。陛下は私の前に足を駐められて、何かお言葉が出る。この場合には、言語を謹んて、十分氣を張つてお答しなければならぬ。私の因業な臆病心は、少しても見慣れぬ人の前へ出るとすぐに騷ぎ

出すのだから、果して佛蘭西王の御前で平然としてゐられるであらうか。雲時の間でも適當な用語を選擇する餘裕があるであらうか。自分の嚴肅なる主義を放擲てずに、かかる大君主の優渥なお思召に感激してゐるといふ心持を表し得るであらうか。慰勞の賞詞の中には、必と大層な有りがたい意味が含まれてゐるに極まつてゐる。豫め旨い答辭を用意して行かうと思へば、陛下の賜はるお言葉が前以つて確かに知れてゐないと都合がわるい。縱し折角考へて置いた所で、彌よ御前へ出たとなると、其の言葉が、一つも憶ひ出せないことは知れてゐる。その場合、滿廷の朝臣達の眼の前で、苦しまぎれに若しいつもの粗雜な言葉を口走つたとしたら、甚麼事になるであらう？　その危さに駭き、怖れ顫いた。もう甚麼ことがあらうと、然ういふ場所へは決して出まい。この覺悟をしつかり極めた。

疑ひもなく受けられた年金を私は失つた。が、それと共に、身の上に墜ち來る筈の軛をも脱れることが出來た。眞理、自由、勇敢、永遠にそれらと訣別を告げたなら、何の顏提げてこの後不偏無私の宣傳者になることが出來ようぞ。若しその年金を受ける身分になれば、唯胡麻を摺つてゐるか、然もなければ口を噤んで居るより

爲方がなかつたのである。それで尙だ其の年金の支給に就いては、保障をしてくれる人があるとも無いとも解らぬ。見苦しい摹似をしなくてはならず、種種の人に頭も下げて行かずばなるまい。一圖にその恩典を取り逃がすまいために、寧ろそれに關係せぬよりも、どの位無駄な心づかひをしてどの位餘計な、可厭な思ひをしなくてはならなかつたか知れぬ。であるから、この恩典を斥けるのは、つまり自分の主義と一致する行爲で、眞理のために形式を犧牲にするのであると信じた。この話をグリムにしたが、別に反對するらしくもなかつた。外の人達には病氣と言ひ觸らして、其の翌朝すぐと此處を去つた。

私が拔け出したと聞いて、それ是噂が出た。一般からは惡し樣に罵られた。私の心持は到底外の人達に解される道理がない。莫迦な恩知らずもあつたものだ。然ういふ後言を利く者があつたのも無理はない。俺なら然うはすまい、なぞと考へてゐたやうな人達には、是がために別に嫉妬を燃させることがなくて濟んだ。

翌日ジェリヨットから報知が來た。私の作品の成功に就いて細細と書いたうへに、陛下御自身が盛んにそれに熱狂せてゐられるといふことを附け加へてあつた。

その一節に、「陛下には終日吟聲を絶ちたまはず、しかも廣き國中に、二人とはあるまじき濁みたる御聲高らかに、J'ai perdu mon serviteur; j'ai perdu tout mon bonheur. などと物せさせ給ひ候」。そして最後に二週ぐらゐ經てば「卜者」の曲をもう一度興行する。今度は第一回目の十分な成功を、一般公衆の眼に愬へるつもりだと書き添へてあつた。

それから二日經つて、午後の九時頃、いつもの樣に夕飯を喰ひにエビネエ夫人のところへ行かうとすると、丁度その戸口で一臺の貸馬車と摺れ違つた。馬車の主が手招ぎして私を呼ぶやうであるから、傍へ寄つて行つて見ると、ヂドロオであつた。例の年金の事を、哲學者にしては不似合なほどの熱心を見せて、話し出した。王の拜謁を辭退したことに就いては、彼も强ひて責める氣はなかつた。しかし、年金まで棄てて顧みないのは、冷澹も太甚しいではないかと言つて、おそろしく詰責した。そして言ふには、幾ら君自身が無私無慾を招牌にしてゐるからと言つても、テレエズ母子の者の身になつて見たら、君だと言つてそれでは濟むまい。二人の者に麪包を供給するためには、差閊のない限り、所有機會を捉へるのが君の義務だ。

而も、今なら未だ斷乎年金を拒絶して了つたと言ふところまで行つてゐないのであり、向うの方は今でも其の氣がないでもない容子だから、何とか方法を考へて、とにかく此方から願ひ出て、金が下賜されるやうに一つ乘り出して見ては奈何だ。と、餘り熱心に勸めるので、私も心は動いたが、とても此の教訓には屈することが出來なかつた。て、この問題から、到頭私達の間に一場の爭論が始まつた。是がそもそもヂドロオとの喧譁の最初であつた。私達の喧譁は、何時でも斯うした種類の事に極まつてゐた。斯う斯うするのが、君の義務ではないかと向うが猛り出すと、私は、那樣事が何て義務な事があるものか、と言つて反對をするといふ風であつた。

物別れになつた時分は大分遲かつた。私の方では一緒にエビネエ夫人の食卓へ伴れ込まうとしたのであつたが、彼は可厭がつた。自分と懇意な人達は、また互ひに懇意にさせたいといふ私の希望から、ヂドロオを夫人に遇はせようとして毎度どのくらゐ骨を折つたか知れぬ。或る時なぞは、夫人を伴れてヂドロオの處まで行つたことさへあるのに、彼は扉を閉め切つて、私達に門前拂を喰はすやうなことをした。彼はどうしても夫人に遇ふと言はない。而已ならず、口を極めて夫人

の事を罵つてゐた。でも私が夫人との間に、またヂドロオとの間に、不和を生じてからは、その二人は自然と親密になつて行つて、夫人のことを噂するにも、彼は實に讃めちぎつた物言ひをした。

その時からヂドロオとグリムが「お傅さん達」を私から引き離さうと圖つてゐた。彼女達が樂な身になれないのは私の無責任からで、何時までも一緒にゐては末の見込みの立つ氣づかひはあるまいと諷したらしい。私と別になるなら、鹽の小賣、店でも煙草店でも出させてやると言つて、頻りに奔走してゐた。その資金は皆ェビネエ夫人の手から出させようとするのであつたが、私は未だにその人達の考が解らぬ。未だその上に二人は、ヂ゛クロオとオルバックをも味方に引き込まうとした。が、ヂ゛クロオだけは奈何しても肯かなかつた。その時でも、私は然ういふ同盟の出來かかつてゐるといふことは微と耳にした。けれども、明かにそれを知つたのは、大分經つて後のことであつた。友人達が、盲目にも無考にも、身體の健れない私を、ば、無理に寄る邊ない孤獨境に押し遣つて、可傷しい狀態に沈ませるやうな手段を、反つて私に幸福を與へるものとでも想つて、精々と働いてゐるのが、實に悲しかつ

た。

一七五三。

次の謝肉祭に「卜者」は巴里で興行された。それまでの間に、序樂も間曲も十分に爲上げることが出來た。版になつて出たあの間曲は、もとは初から終まで、所作のある續き物で、自分だけはごく面白い畫樣になると信じてゐたものであつた。ところが、その考をオペラ座へ持ち出してみると、誰もなる程と言ふ者がない。爲方がないから、樂譜も舞踏も、通り一遍の物に壞して了つた。著想は面白いが、然ういふ譯で舞臺の美を損せぬ範圍で、つひ一通りの出來に止つた。ジェリヨットの宣敍調を削つて、そのかはりに最初自分で作つたのを嵌め込んだ。版になつたのは、即ちそれである。この宣敍調は實のところ多少佛國風があつて、俳優の口から澁りしぶり出て來るのだが、別に聽衆に不快を覺えさせるほどでもなく、咏嘆調と同じく無事に行つて、一般人の耳には、相當によく聽かれたやうであつた。この曲を愛護

してくれたヂュクロオにこれを獻呈して、同時に是が自分の唯一の獻呈であるといふことを發表した。けれども、彼の同意を得て、第二回の獻呈をした。しかし、誰にも獻呈しなかつたより、然うした例外のために一層私から尊重されたやうに彼は思つたらう。

この作曲に就いては、いろいろの逸話がある。が、それよりもつと重大な事件が控へてゐるから、緩りと細かしいことを話す暇がない。それは又何時か補遺の中で言ふとしよう。唯次の事だけは、後の事件との關係が少くないから、言はぬ譯に行かぬ。私は或る日オルバック男爵の室で、樂譜を檢べてゐた。いろいろな曲を見て了つた時、男爵は一冊のクラヴサン曲集を出して來て、

「これは皆我が輩が作曲させたものばかりで、樂趣のすぐれた、しかも唱つて面白いのが大へんにある。我が輩の外には誰もこれを知つてる者がないし、見せようともしないんだ。君は孰れても佳ささうなのを拔いて行つて、間曲の中へ嵌め込んではどうだね。」

と言つた。私の頭の中には、咏嘆調や交響體の主題が、捌し切れぬほど澤山溜つて

ゐたから、其の本の中から何か貰ひ受けたいなどとは、些とも考へなかつた。けれど、強ひてと言はれて見ると、爲方なし御機嫌取りに牧歌を一曲擇り出して、それを節畧したのを三部曲に改して、コレットの夥伴の登場に使ふことにした。幾月か經つて、「ト者」がまだ演いてゐる頃に、グリムのところへ這入つて行くと、多勢がクラヴサンの周圍に集まつてゐた。その中からグリムが起つて迎へに出た。何心なく譜面臺の上を見ると、オルバック男爵が所持の、あの同じ曲譜集が其處に載つてゐて、而も開けたところには、丁度この間男爵が、この本は決して我が輩の手から外へは出さぬと誓つて、無理に私に拔き取らしたその同じ牧歌が出てゐるのだつた。それから又後に、エピネエ氏の宅で音樂會のあつた時も、夫人のクラヴサンの上に、やはり其の本が開いて載せてあつた。グリムも其の外の人も、この唄の事は何とも私に言はなかつた。今私が自分の口から、こと更に茲で斯ういふことを言ふのも、實は迴と後になつてから「村の卜者」は私の作てないといふやうな風評が、一時世間に傳はつて來たからである。私は世に在る如き惡達者の作曲家とは異ふから、若し私に「音樂辭典 Dictionnaire de musique」の著作がなかつたら、他は必と私を作曲など

の出來る人間でないと思つたに相違ない。

「卜者」が興行される少し前の事であつた。折ふし伊太利亞滑稽歌劇の一連が、巴里へ乘り込んで來た。早速オペラ座を貸すことになつたが、その結果に就いては、誰も豫想するものがなかつた。それらの曲は多く野卑で、殊にまだ鍛錬の足りない管絃樂部は、恣まに演奏の曲を壞して行くのであつたけれども、それが到頭佛蘭西のオペラに向つて、永久に償へない打擊を加へるやうなことになつて了つた。兩國の異なつた曲趣を、斯うして同じ日に、同じ劇場で聽いて比較するといふことが、佛蘭西人の耳を開けた。生き生きした印象の鋭い、この伊太利亞の曲を聽いたあとでは、誰も佛蘭西曲の倦怠い、疲れたやうな旋律に耳を貸すことが出來なくなつた。伊太利亞のが濟むと、もう我一と看客は歸つて了つた。それゆゑ座の方では、餘義なく番組を變へて、伊太利亞のを切へ廻すことにした。「エグレ Egle」「ピグマリオン Pygmalion」「ル・シルフ Le Sylphe」と、取り替へ引きかへ突著けて見たけれども、なかなか敵手にもなりかねた。唯一つ「村の卜者」だけが、ともかく踏み堪へることが出來た。而も、奥樣下女 La Serva Padrona」の演ぜられた後でさへ好評を得た(譯者云。

此の曲は伊太利亞の名匠ジョヴンニ・バッチスタ・ペルゴレエジイ Giovanni Battista Pergolesi の傑作曲。伊太利亞歌劇史の上では、エポック・メイキングのものと稱せられる)。私が自分の間奏を作曲してゐた時には、實際如彼いふ曲の印象が頭に一ぱい有つて、言はば其處から暗示を得たのであつた。そして私のと一緒に、然うした伊太利亞曲を竝べて演ずることにならうとは、實に意外であつた。若し私が剽竊したのだつたら、その時直に襤褸を出して、どんなに赤恥を掻かされたか知れぬところであつた。ところが那樣虞れは些ともなかつた。私の曲の中には、是ばかりも摸倣の痕跡が見つからなかつたから、人人の失點搜しも徒勞になつた。而已ならず、渾べて私の歌曲は、其の原據と想像された曲と比べて見ても、全然新しい、——例の私の發明した音符と同樣、前例のないものであるといふことが判つた。若しモンドンヴィルなり、ラモオが、私が受けたやうな試錬に過はされたならば、二人ながら散散な痛傷を負うて遁げ出したところだ。

滑稽歌劇の優人連は、伊太利亞音樂のために、熱心な歸依者を得るやうになつた。巴里全市は眞二つに分離して、何か國政か宗教上の大問題にても出逢つたといふ

風に、激烈な競爭を見せた。片方は貴族や富豪や婦人達が組織して、頭數も多く、殊に優勢な位置に立つて、佛國固有の音樂を擔いでゐた。片方は活氣に滿ちて鼻息の荒い熱心な組で、これは眞の鑑賞家黑人筋といふやうな側であつた。この小人數の一隊は、オペラ座で王后の御座の丁度眞下に陣取つた。もう一つの大きな部隊の方は、土間から棧敷にかけて布置されて、本部は王の玉座の眞下にあつた。此の二派に名をつけて、一つを王黨、一つを王妃黨と言つて當時聒しかつたのは、斯ういふ事から始まつたのだ。兩黨の軋轢が烈しくなつた時には、いろいろの冊子が配られた。王黨の方から揶揄ひに來ると、「小預言者Le petit Prophète de Boemischbroda」を出して、それを捻ぢ伏せて了つた。また小理窟を列べ立てて來ると、今度は「佛蘭西音樂に就いてLettre sur la musique française」でそれを粉微塵に打碎いて了つた。この二小篇、一つはグリムの手に成り、あとの方は私の書いたもので、それだけが當時の激戰の記念として殘つた。その外の成行は全くわからぬ(譯者云。論戰が久しく結んで解けなかつた間に、斯ういふ類の小冊子が六十部以上も世に出た)。

「小預言者」も、長いこと私の書いた物だと言つて、何と言つても世間ではそれに極

めて了つてゐた。けれども、彼等はその說を冗談に看て了つたから、書物の筆者には何の禍も落ちなかつた。ところが「佛蘭西音樂に就いて」の方は大分聒しくなつて、正しく自國の音樂を侮辱するものだと言ふので、全國民が蜂起した。この一小篇が喚び起した不測の影響は、タキツス Tacitus を煩して書いてもらふほどの價値があつた。折から議會と僧侶の間に爭鬨の開けた時であつた。議會は丁度解散になつて、騷擾さは沸騰點に達した。何事も來るべき暴動を語らぬものはなかつた。其處へ私の小冊子が出た。と、外の一切の紛爭はぱつたり熄んで了つて、人人は唯佛蘭西の音樂が、存亡の秋に蒞んだといふことばかりを思つた。であるから、國民が暴動を起せば、それは私に對してである。その怨みの餘波が、今でも尙消え殘つてゐるくらゐ、私は皆から目敵にされたのである。バスチィユへ投り込まうか、流刑にしようかと、その審議で政府は取り込んでゐた。此處で若しもヴォアイェエ氏(譯者云。Marc-Pierre de Voyer, comte d'Argenson. 一六九六——一七六四。當時の首相アルジァンソン侯の兄弟で政客。藝術のアマッウルとしては常に衆に先んじた)が、那樣大人氣ないことがあるかと言つて押し遏めなかつたら、逮捕狀が私の頭上に

落ちて來たかも知れなかつた。起るべき國内の暴動も起らずに濟んだのは、確かに私の小冊子の所爲であつた。と聞いても、人々は皆私が夢でも見てゐるやうに思ふだらう。けれども、事實は事實だ。この事があつてから今日まで、未だ十五年と經つてゐないのだから、今でも巴里中の人たちは、皆證人になることが出來る。

自由は束縛されなかつたけれど、容赦なく恥辱を被せられた。生命さへ危かつた。オペラ座の管絃樂部の連中は、芝居の歸途に私を暗殺しようといふ、可憐しい企を起した。その事が私に聞えた。しかし、それがために、私は反つて前よりも繁く其の座へ顔を出すやうにした。私に好意を寄せてゐる彼の銃兵の士官アンスレエ氏が、彼等の隱謀の裏を掻いて、私には知らせずに、護衛の士卒を見えがくれに跟けておいたといふことを、餘程經つて聽き知つた。丁度オペラ座が市有になつた時であつた。巴里市長が手はじめの功績に、無法な爲方で無料入場の私の特權を褫ぎ取らうとした。それは奈何したかと言ふに、私が芝居へ出掛けて行く處を待ち受けて、人の多勢集つた中で、無料の入場は許されない、と言つて逐ひ返さうとするのであつた。悄悄引き返すのは、侮辱を全うさせるわけと思つて、面白くはな

かつたが、わざわざ切符を一枚買つて這入つた。最初私が自分の作を此の芝居の管理者に讓つた時の契約では、外に報酬としては何も要らぬ、唯永代無料入場が出來ればよいと言ふのであつたから、斯ういふ仕打は、實に默止すべからざる非曲と謂はねばならぬ。何故といへば、無料入場は一般作者の特權であり、且私は然ういふわけで、二重の資格でそれを持つてゐた上に、尙特にヂゥクロオに立會をさせて迄て約定を取りかはしてゐたのだもの。座の方からは報酬として、請求もしない五十ルイ(約計五百圓)といふ金を送つて來たのは事實である。が、それとても、規定の報酬額から見れば、言ふにも足らぬほどのものであることは固より、正式に約定書を取り替はして得た、それとは全く無關係な入場權とは、何等の類似點もないものであつた。この仕打の底には、偏頗と殘暴とが雜居してゐることは明かであつた。世間ではをりふし私に對する惡感情が極度に達してゐたにも拘らず、皆それを餘りな爲方だと言つて、申し合せたやうに憤慨した。前の晩にはさんざん私に侮辱を與へた人達も、今日は芝居の中で大聲出して、この作者には十分の資格があり、しかも二人分をも要求し得べき權利があるのに、それを奪り上げるとは汚辱だ、と言

つて呶鳴り立てた。Ognun'ama la giustizia in casa d'altrui（他人の事となると、人は正義を重んずるものである）といふ伊太利亞の諺があるが、なる程と思つた。

契約を履行しないといふのなら、私の採るべき手段は、自分の著作物を取り戻すより外になかつた。その件に就いて、オペラ座の當事者たるアルジァンソン Argenson氏へ手紙を書いて、喝の音も出せぬ程の辯難をも添へて送つたところが、兩方ともその儘返事も效果もなしに終つた。この不正漢の無言で居る小面憎さが、くつと癪に觸つて、今まではアルジァンソンと言へば、人物も増しな、一とほりは腕も利く人間と思つてゐたのが、もう何てもないものになつて了つた。斯ういふわけで、オペラ座は、私へ當然の報酬を横奪つて置きながら、私の作をぢつと握り込んで放さなかつたのである。弱者が强者に向つて斯ういふことをすれば、直ちに竊盜罪を構成するのだが、强者が弱者に向つてする時には、唯、他人の所有物を私用したといふぐらゐのことで濟むものと見える。

此の作物が生み出した金錢上の收得は、他の作者の手に這入る物から較べて見ると、その四分の一にも當らぬほどのものであつた。それでも私に取つては數年

間の生活を支へて、不景氣つづきの樂譜謄寫の埋合せをするには十分であつた。王からは百ルイ（約計一千圓）の下賜金があつた。ベル・ヴュウ Belle-Vue での開演は、ポンパヅウル夫人自身が、コランの役に扮した時で、其の折同夫人から五十ルイ下がつた（譯者云。ベル・ヴュウは美觀の義。巴里の南西セエヴル Sèvres に近く、ポンパヅウル夫人の造營に係る美しい城の名。その城は革命の禍難に泯びた）。オペラ座から來た五十ルイ、それに刻版料としてビヅソオから受け取つた五百フラン（約計二百圓）もある。勞作の時間から言へば、纔と五六週間に過ぎなかつたのであるが、種種な災難に出遭つたり、自分の愚鈍に邪魔されたこともあつたのに、斯うして貰ひ集めた金額は、この後私が沈思の二十年間、勞作の三年間を犧牲にして作りあげた「エミイル」から得たものと大した差はなかつた（譯者云。「エミイル」の原稿料のことは後の第十一卷、一七六一年の條に出る）。それはともかく、この曲から得た金錢上の慰安も、一方では竭きぬ苦惱が私を捉へるやうになつたため、結局餘ほど高價いものについた。これがために陰密な嫉妬心が私の上に懸かつて來て、遙か後までも消えなかつた。

オルバック夫人

此の作が成功した後は、グリムにも、デドロオにも、その外相識の文藝家の何人にも、今まで自分の期待してゐた懇親と、快活と、會合の情味とを再び見出すことが出來なくなつた。オルバック男爵の邸へ這入つて行くと、すぐ會話が壞れて了つて、彼處此處へ小い組が分れわかれに割據の狀態、互ひに竊竊と私語き合ふばかりで、私一人は話相手もなく、手持無沙汰に兀然としてゐた。私は長いこと此の可憤しい除外を堪へ忍んだ。それに男爵夫人が、いつにかはらず優しく可愛く私を待遇すのにつひ牽かされて、堪へ得られるかぎりその良人の不作法を我慢した。が、或る日彼は何の理由も口實もなしに突如私に衝つ蒐つて來て、狂妄の餘り私を叩き出すやうにした。私も二度と此の邸に足を入れない決心で出て行つた。其の場にはデドロオも居合したけれど、一言も口を利かなかつた。もう一人居たのがマルジャンシィ Margency、この人はそれから後、しばしば此の時の私の出かたが穩かで優しくて、敬服したといふことを話してゐた。然ういふ目に遭はされは遭はされたが、それがために、男爵や、男爵家のことを話すのに、決して尊重した態度を忘れることはなかつた。でも男爵の方は、何時でも私を辱しめるやうな、蔑むやうな調子で、

名を呼ぶのでも唯、ce petit cuistre（學僕）とより言つたことはなかつた。併し私が、男爵や、男爵と關係の深い人々に向つて、聊かでも失敬な事をしかけたと言つて誣ひる事ばかりは出來なかつたらしい。此處て初めて私の預言が適中して、杞憂が杞憂てなかつたことを確めた。考へて見ると、私が本を書く、――立派なよい本を書くといふやうなことは謂はゆる私の友人たちに取つて見ても、彼等も始終やつてゐる事てあるから、私を咎める材料にはならぬ。だから私がさういふことさへしてゐれば、文句はなかつたのかも知れぬ。がしかし、私がオペラの作をした、しかもそのオペラが、華々しい成功を收めたと聽いては、到底靜としてゐられなかつた。それも其の筈て、彼等の中には誰とて那樣隱し藝の出來さうな人物もなし、又那樣名譽を掴まうとするほどの技倆のある者もなかつたからてある。斯うして友人達が熾んに嫉妬の焔を揚げてゐる最中に、唯ひとり超然と取り濟ましてゐたのはディグロオて、しかもますます私の方へ心を傾けて來るやうに見えた。彼は私をキノオ Quinault 嬢のところへ案内した。其處てはオルバック家に無かつた尊敬、鄭重、親愛などといふものをしたたか見出して、前の口なほしをした。

「村のト者」がオペラ座で興行されてゐる間に、コメディ・フランセエズの方にも作者に取つて有望な問題が起つた。七八年もかかつて私の「ナルシッス」の曲が、まだ伊太利亞座で實演の運びにならなかつたので、その座の俳優の拙い佛蘭西語で演られるのも業腹だし、寧そ佛蘭西座で引き受けてくれれば、と思つて、その事を新しい知己の、ラ・ヌウ La Noue といふ嬉劇俳優に話した。ラ・ヌウは誰も知る、俳優としても、作者としても立派な人であつた。彼は「ナルシッス」を讀んで見て、是ならよいといふので、早速作者名を匿したまゝ舞臺に掛けようとした。その間に此の座へ無料入場の特許權を取つてくれた。他の二座にも増してテアアトル・フランセエは私の格別所好な劇場で、甚麼にか嬉しく思つたらう。「ナルシッス」の人氣は良かつた。作者は無名氏にして置いたけれど、俳優やその外の人達にも、隨分私といふことを知り拔いてゐる人は少くなかつたやうである。ゴオサン Gaussin 孃とグランヴァル Grandval 孃とが若女形を勤めた。私自身は何處となくこの曲の演法に喰ひ足

らぬところがあるやうに感じたけれど、まるで物にならぬといふほどのこともなかつた。それにしても驚くほどの看客の義俠には、私も大きに撲たれた。何にしろ初から終まで、耳を澄まして靜肅に聽いてゐたは愚か、二回も繰り返して演ずるのを、些とも怠屈らしい容子を見せずに我慢してゐた。肝腎の私は、初の一回で閉口して了つて、終まで辛抱が出來なくなつたから、小屋を出てカフェエ・ド・プロコオブ Procope へ飛び込んでみると、やはり怠屈凌ぎに、ボアシイ Boissi はじめ、いろいろの人達が來合してゐた。その店で私はペッカウィイ peccavi（我過矣）を叫んで、作者の無名氏は自分であつたことを、恐縮した體で、むしろ得意の體で自白した。これは誰にでもある例だといふやうなことを附け足した。失敗に終つた駄作の作者が、自分から名を名乘つたといふことは、人人を感嘆させた。私もそれ程苦痛を感じなかつた。しかもそれを自白するに至つた勇氣を思ふと、幾らか自愛心に傷のついたのも痒る心地がした。そして此の場合、若し私が沈默てゐれば、くだらなく羞恥んでゐなければならなかつたのを、匿さずに言つて了つたので、却つて自我が一層擴大されたやうな氣がする。けれども、舞臺に載せるとあまりぞつとしない作であ

つたが、讀んで見ればさほどでもないと信じたから、それを印刷させることにした。その序文は、自分でもよく出來たと思ふほどのものであつた。その中で、是までよりもう少し深く、自分の持論を述べて置いた。

その持論を隈なく吐露するために、最も大切な論文を書く機會が來た。それはこの一七五三年といふ年に、デジョンのアカデミイが「人類間の不均等の原因 L'Origine de l'inégalité parmi les hommes」といふ題を出して、又論文を募集したからである。立派な問題と思ふにつけても、克くアカデミイがこれまでに思ひ切つたものが出せたと内内驚かされた。しかし、アカデミイに此の問題を出すだけの勇氣がある以上は、私にもこれを論ずる勇氣がないといふ道理はない。復た應募と決心した。

綴りこの大問題を研究するために、一週間ばかりサン・ジェルマンへ遊びに出掛けた。同行はテレエズと、宿の主婦と、もう一人友達の女と、斯う三人であつた。主婦は氣爽者であつた。今度の遠足も、私の生涯中の最も愉快なものの一つに數へら

れる。毎日晴天續きであつた。三人の氣爽な女達は、一切の面倒から入費まで忠實に取り賄つてくれた。テレエズは二人の女友と樂し氣に暮してゐる。私も心に縈る憂のないままに、食事の度ごとに羽目をはづして笑ひざざめいてゐた。その餘の時間には森の中に彷徨ひ入つて其處で人類原始の狀態といふものは、彼か是かと探りつ求めつしてゐる間に、心は縱まに歷史の流れを漂うてゐた。人間が作り設けた儚い虛僞の皮を引き剝いてみた。彼等の本然性を赤裸に曝け出して見た。「時」と「物」が進むに從つて、その本然性の頽れ出す有樣を思つた見た。人間の禍の眞の源は、彼等の謂ふ「進歩」といふものの中に潛み隱れてゐるのであることを敎へてやりたくなつた。自然人 l'homme naturel と人間人(矯飾を加へた人間の意) l'homme de l'homme とを對照して考へても見た。斯うして考に耽つてゐる中に、私の靈は何時しか高調して、終には神明の座に迫り行くやうに覺えた。そしてその位置から遙かに下界を瞰わたすと、自分の同輩は誰も誰も、偏執か、過誤か、不幸か、罪惡か、いづれかの邪徑の土を迂路つついてゐる樣子がまざまざと眼に映るので、聲を揚げて斯う叫んだ。しかしそれは幽微な聲であつたから、彼等の耳には達かなかつ

たてあらう。

「Insensés, qui vous plaignez sans cesse de la nature, apprenez que tous vos maux vous viennent de vous!(心の麻痺したる者よ、罪を自然に嫁することを罷めて、一切の惡は皆汝等の自ら招き寄せたるものなることを思へ！)」

斯ういふ感想が集まつて、遂に「不均等論 Discours sur l'inégalité」となつた。この論文は他の孰の作よりも一ばんヂドロオに好かれたもので、またこの作に對する彼の助言は、一ばん私に取つて有用なもの、のてあつた(原注。私がこの論文を書いてゐた時分には、ヂドロオとグリムの大隱謀を未だ毫しも疑ぐるやうなことはなかつた。さもなかつたら、いかにヂドロオが、私の書く物にあれ程酷辣な調子、あれほど陰險な氣分を吹き込んで、私の信頼に背いたかを見破ることは造作もなかつたのである。現に彼の指導を離れてからは、然ういふ調子や氣分は、もう跡方もなくなつたのでも解る。ヂドロオといふ哲學者は、逆境に居る者の愁訴に對して耳を掩ふほど酷薄な人間であるから、然ういふ人の勝手な議論には、彼一流の偏癖がある。未だその外にも、もつと調子はづれの酷い奴を寄越したけれど、それを私は採用する

る氣になれなかつた。しかも然ういふ陰險な氣質は、全くヴンサンヌの牢獄の裡から得來つたのであらう。彼の「クレエルヴァル Clairval」にもその痕跡は少からず見えてゐる。斯う私はよい意味に解釋して、彼の氣質に惡意が含まれてゐるなどとは、間違ひにも思つたことはなかつた)。しかしこの論文を讀んで、正當に理解し得る者は、廣い歐羅巴に一人もなかつた。萬一理解し得る者はあつても、それを口にすることは誰も憚つたらしい。これを書いたのは、懸賞募集に當選の榮を望んでてあつたから、送ることは送つたけれど、固より萬一を僥倖するに過ぎぬ事てはあり、且アカデミイの懸賞論文といふからは、こんな風の書き方をして無事に通過することは、まづ見込のない方てあつた。

今度の轉地と爲事とは、氣分を安め、健康を進める上に莫大の效果があつた。幾年前尿閉をわづらつて、醫者の手に我が身を捨て果てて了つたときは、病氣が快くなりどころてなくて、體力體質ともにめちやめちやに破壞された。サン・ジェルマンから歸つて來た時にはその體力が大ぶ恢復して、氣分がぐつと良くなつたやうに感じた。この暗示に力を獲て、このまま全快すれば可し、縱し死んても醫藥は決し

て用ひまいとの覺悟から、醫者や藥に永久の訣別を告げて、氣分のすぐれぬ時は靜と家に籠城と構へ、元氣のよい時はすぐと外へ飛び出すやうにして、その日その日を過してゐた。巴里人と一緒になつて、詐術の多い空氣を呼吸することは、私の屑しとせぬところであつた。文藝家連の陰險手段、大人氣ない啀み合作品に誠實の氣の闕如してゐること、氣位の惡く高いこと、――いづれも胸を惡くさせ、反情を喚び起すものばかりであつた。友人間の交際でさへ、柔和しみといふものもなく、腹の底をうち割つて見せるといふこともなく、唯齷齪と亂雜な生活を追うて行くことは私には堪らなく不快で、それがために田園の生活がして見たいと、そればかりを焦れ慕ふやうになつて了つた。けれども職業の關係から、然う出來ぬと諦めはあきらめても、せめて爲事の餘暇だけなりとも、その眞似をする量見で、幾月かの間晝飯が濟むと唯一人ブウロオニゥBonlogneの森の中へと迷ひ入つて、いろいろ書いて見たいと思つてゐる本の筋などを考へながら、夜に入る頃まで家へ歸らなかつた。

一七五四―一七五六。

當時雷ならぬ關係のあつたゴオフクウルが、爲事の都合で餘儀なくジゥネエヴへ旅行をせねばならぬことになつて、私にも誘つてくれたので、それに同意した。未だ身體の工合が眞箇でなかつたから、世話する女が一人是非必要であつた。て、クレエズが私と一緒に出て、母親だけ留守番をすることに極めすべて支度が出來て三人で出發したのは一七五四年の六月であつた。

今度の旅行には特に注意せねばならぬ譯がある。私の持前とて、四十二歳の今日まで少しも隔てなく、また何等の障害もなしに縋つて來た信賴の上に、始めて打擊を受けるやうな場合に出會したからである。私達は一臺の安馬車を瘦馬に牽かせて、そろそろと旅行を始めた。私だけは折とすると、馬車を降りて、一人徒歩で歩いて行くことがあつた。その中、半分ほどの處まで來たかと思つた時、テレエズが急に、ゴオフクウルと二人きり馬車の中に殘されるのは、可厭だと言ひ出した。然う言つても私は平氣で、相禮らず自分だけ徒歩を續けて行くと、彼女もつひには

降りて來て、私と連れて歩き始めた。そんな氣儘があるものかと叱りつづけて、容易に私は承知しなかつたが、到頭彼女は言ひにくさうにして、氣儘の理由をうち明した。それを聽いた私は夢の中にゐる心地がした。もう早六十といふ歳を越して、足腰も立ちかねるほど、歡樂の贄となり放れた親友のゴオフクウルが、出發の初から私の所有の女、それも美しい、若若しいのでもあることか、少少嚴の入りかかつてゐる女を、一生懸命墮落させようと企んでゐたと聽いては、呀と言ふ外はなかつた。或は自分の持つてゐる財布を出して、テレエズの鼻の尖て誇示すとか、猥褻な本を讀んで聽かせたり、その中の畫を見せつけたりとか、いろいろ然ういふ風の、下等な恥づべき所作をして、どうにかして彼女の心を動搖させようとしたものである。その内に一度なぞは、テレエズが口惜し紛れにその本を馬車の戸口から取つて投つたことさへあつた。それに出發の最初の日に私が劇しい頭痛がして、夕食もせずに寢床に這入つた間に、彼は精一杯猥らな惑はしをテレエズに見せた。妻をも自分をも安心して任せて置いたその人らしい容子は些しもなくて、宛ら人面獸身の動物としか思はれぬやうな擧動を見せたといふことまで知れた。驚かざ

るを得ぬてはないか！　私に取つて全然新しい苦惱でなからうか！　今まで私は友情といへば、必と可愼しい、尊い感情が隨伴となつて、その魅力を造り上げてゐるのだとばかり思つてゐた。その私が、斯ういふ經驗をおぼえて、餘儀なく友情と腮惡とを結びつけた。愛し愛されたその人から、自分の尊信を引き剝さなければならぬことを、生れてはじめて知つた。因業な老人は、私には何喰はぬ貌をしてゐる。テレエズを庇ふためには、苦い貌を老人にして見せるわけにも行かず、ただ自分の心の奥に、是迄おぼえの無い、面白からぬ感情を藏して置くより爲方がなかつた。友情のイリヴジオンは、優しい、聖いものであつた！　そのまぼろしの面帕を、私の兩眼から始めて剝して取つた者はゴオフクウルであつた。それから以後再びその面帕を懸けようとしても、多くの殘忍な手は、決して然うはさせなかつた！

里歸りてゴオフクウルと別れた。母の住居のぢき傍を通るのに、顏も見ずには奈何しても行きかねたから、サヴォアの方へ這入つて見ようとしたからで。さて彼女に遇ふことは遇つたけれども……噫！　何たるその境涯ぞ。何たる淪落ぞ！

むかしの彼女の美點が、どのくらゐ殘つてゐたらう？　ボンヴェル師に紹介しても

らつた時分、あれほど花やいてゐたワレンス夫人と、この女とは、そもそも同一人なのか？　私の胸はどのやうに痛手を負はされたらう？　彼女の執るべき唯一の手段は此の土地を去るより外に爲方がなかつた。今までにも幾度となく、私から手紙が行くたび毎に、私もテレエズも、お母さんの利益になることならば、生涯を犧牲にしても厭はぬ心であるから、どうか私の方へ一緒になりに來て欲しいといふことを言はぬ時はなかつた。それを今又言葉を強くして、繰り返し繰りかへし勸めたけれど、何の效もなかつた。例の年金は儿帳面に支給されてゐたけれど、久しい間そればかりに依頼して、何等の利益をも收め得なかつた彼女は、私の勸めをも肯かなかつた。私は自分の財布から、僅かの金を出して渡した。其の金は一スウでも彼女の所有になるのでないといふことを知り拔いてゐたから、應分の義務と思ふ額よりもずつと少くなつて了つたのである。私がジュネヴで滯在中に、彼女はシャブレエ Chablais へ旅行をして、私に遇ひにグランジュ・カナアル Grange-Canal まで來た。彼女はその旅行を續けるだけの費用に窮した。私の衣兜に這入つてゐる金だけでは、其の目的に不足であつたけれど、ともかくテレエズに持たせて遣つ

た。みじめな母だ！　それでも彼女の心に斯ういふ有りがたい處があつたことを言はねばならぬ。彼女の最後の寶物として、指環が一つ殘つてゐた。それを自分の指から拔き取つて、テレエズの指に嵌めてくれようとするのを、テレエズは押し戻して、また舊のとほり彼女の指に差した。そして、その尊むべき手に直と吻を接けて、溢れ落ちる涙を其の上に灌ぎかけた。ああ！　私の負債を彼女に償還するには、この場合を外にして何時また出會す時があらう！　渾べてを拋つて彼女に隨ひ、最終の日まで彼女を擁護し、如何なる運命をも彼女と共にすることは、私の義務であつた。が、その孰れをも私は盡さなかつた。私には他に一つの結びつきがあつて、その方への注意が彼女に對する執著の念を甚だ薄くしたかの感じがした。況して然うしたところで、それが彼女の利益になるともならぬとも知れなかつたのであるから。彼女の身の上については、私は只管悲んだ。がしかし、彼女に隨はなかつた。私の一生の間に殘して來た悔恨は數多あるが、是こそ殊に痛痛しく、永久に消ゆまじいものであらうと思ふ。その時を始として、その可怕しい無間斷の呵責に身を苦められたことは、私に取つては至當な罰であると觀念した。そ

れてこそ、寛恩の罪が贖はれるのであらう。これで見ると、如何にも私は思知らずであつたやうに思はれるけれど、眞實さういふ人間であつたら、斯うまで心の惱亂する筈もなささうなものだ。

巴里を發つ前に、「不均等論」の獻呈文を大略書きかけて置いた。それをシャンベリイで書き上げて、日附も其處からのにした。これはいろ〳〵の攻擊を避けるためには、佛蘭西や、ジゥネエヴからの日附にせぬ方がよからうと思つたからである。

ジゥネエヴに著いてからは、共和的の熱誠な精神の中へ、夢中になつて沒り込んだ。實は私が此處へ來たのもそれがためであつた。この熱情は、この土地で受けた待遇の結果として一段高まつた。到る處で大もてにちやほやされたので、全く國粹感情のために、心魂を奪はれて了つた。そして、私が我が祖先のと異つた宗教を奉じてゐるばかりに、此の土地の公民となることの出來ぬのが可恥しくなつて、急に復た舊のとほりに改宗しようと決心した。私は斯う考へた。福音書はあらゆる

基督教徒に共通なものであり、教理の根柢といふものも、末派の徒輩が自分に解りもせぬことを彼是と穿鑿し始めなかつたら、何も多岐多端となる筈の物ではなかつたのである。であるから、何れの國家に於いても、一定の教派を立て、この不可解なる教理を定めることは、一に其の主權者の意思に任せて置いてよいのである。從つてその教理を默認し、法律の定めた教條を信奉することは、國民たるものの義務でなければならぬと、然う考へた。辭典學者連との往來が繁くなつてからも、信念は容易に動かされず、論議や黨爭の如きも、もとより自分の忌み嫌ふ所であるから、反つて一層その念を堅くした。人間の研究、乃至宇宙の研究は、其等を支配する竊竟因若しくは大精神を、始終我が眼の前に展げて見せた。聖經、殊に福音書を、四五年前から熱心に讀んでゐたところ、本當に其の眞髓を理會し得べき柄でないやうな連中が、耶蘇基督に遇つてでも來たやうに、下らない煩瑣極まる解釋を下してあるのが唾棄してやりたくなつて來た。一言で言へば、宗教の眞の光を蔽はむがために、人間がいろいろと作り設けた、あらゆる煩瑣な注疏や敷衍から脫けて出て、唯其の精髓を掴まうとするやうになつたのは、眞理の洞察に潛心した結果であつ

た。理性の鋭い人間が基督信者となるに二途ある道理はあるまいと氣が注くと同時に、すべての儀典、教義に關することは、其の國國の法律の權能に屬せしむべきであるといふことをも曉つた。この聰明な、社交的な、平和な意見、そして彼の殘忍な迫害を私に蒙らせたこの意見の結論は、斯ういふことに歸著した。――即ち此のジッネエヴの市民になりたければ新教へ改宗して、祖國が定めた教派に復歸せねばならぬといふことであつた。私はいよいよ然う決心して、進んで自分の居た市外の法區の牧師について說教を聽いた。唯長老會へ出る事だけは望まなかつた。但し、此のことは、教規として、なかなかやかましかつたのを、特に私のために其の規程を抂げて、その代り五六名の委員會を召集して、私の改宗の誓願を聽くことにした。生憎宣教師のペルドリオオ Perdriau は私の相識の、溫柔しい人で、其の人が偶と思ひ立つて、今度の小集會で私が演說するのを、皆待ち兼ねてゐると、然う言つた。然う期待されて、ひどく胸騷ぎがして、豫ねて準備して置いた短い演說を、夜晝なしに三週間も稽古して出たのに、いざとなるとまるで目眩つて、一言も口が利かれず、終まで最劣等の學校兒童といふ見得で通した。委員たちが何かと話し掛けて來

ても、唯、はい、はいと口の中で返辭するばかりであつた。まづ那樣ことで聖餐式も許され、續いて市民權を回復することも出來た。私は公民や市民だけで組織する守備兵の中に加へられ、又臨時市會へ出て市吏員のミッサアル Mussard から誓詞を受けた。市會、長老會の此の際に私へ與へられた深切、政府、市民の懇篤な、行き屆いた扱ひ振りに、感謝の言葉も出なかつた。其處へドリック Deluc といふ深切者が、口も息めずに私を引きとめようとしたり、自身の偏向までが手傳つたりして、巴里へはもう歸りたくなくなつた。若し、爲方なしに歸るとすれば、家庭の解散を斷行するか、些細な出入の整理を附けるか、テレエズの兩親に糊口の途を立ててやる位の事をしに行くだけで、それが落著次第、すぐとジッネエヴへ引き返して來て、テレエズと二人、此處で樂樂と餘生を過したいといふ希望ばかりに捉はれてゐた。

斯う決斷をして、さてそれから愈出發をするまでの間は、大切な用も拋棄つて置いて、唯友人達とぶら〳〵遊んでばかりゐた。いろいろな面白可笑しい事があつた。中にも、これは格別と思つたのは、ドリックの父親の方と、その嫁と、二人の息子と、それにテレエズと、斯ういふ連中で端艇を艤裝てて、湖水めぐりをして遊んだこ

とてあつた。晴れた明い空の下で、滿一週間といふものは、この舟遊びで暮して了つた。湖水の向う岸の撲たれるやうな眺め、その鮮彩な印象がかつきりと胸に刻まれてゐて、何年かの後に「ヌウヴェル・エロイズ」を書いた時、この印象記を使つたことがある。

ドリウック一家の人達との外に、ジゥネエヴで近しくたのは、ヴェルヌ Vernes といふ年若な宣教師であつた。曾て巴里で戀意にしたことがあり、後日はとにかく、此の時は私の方から好意を以つて迎へた。當時は、田舍の牧師、今日では文學教授をしてゐるベルドリオオ氏、此の人は其の後私との交際を避ける風に見えたけれど、私に取つてはあの可懷しい溫かな會合の折折を憶ひ出すことが甚麼に心を慰される原因になつたであらう。ジアラベエル Jalabert 氏は初め物理學の教授であつて、後には市の評議員や、官吏にもなつた人である。この人に私は「不均等論」を、獻呈文だけ拔きにして讀んで聽かしたら、さもさも氣に入つた風を見せた。リゥラン Lullin 教授とは其の人の死る迄手紙の往復を續けた。この人は又圖書館へ藏める書籍を、私に取り寄せさせたこともある。ヴェルネエ Vernet 教授には、私の方か

ら十分の景慕と信賴とを捧げたのに、尙且世間並に、私に裏切をするやうになつた。如何に神學者であるからと言つても、人間としての神經が分布してゐるならば、あれ迄にした私の心が解らぬといふ法はない筈だ。シャッピュイ Chappuis といふのはゴオフクウルの番頭なり、相續人てもあつたが、ゴオフクウルを排擠することを謀つて、忽ち自分が叩き出されて了つた。マルセエ・ド・メジエエル Marcet de Mézières は私の父の舊友で、私にも親しくしたが、祖國のために盡した後、戲曲家になつたり、又二百議員の候補者になつたりなぞして主義を一變した爲に、他から笑はれながら、死んで行つた。斯ういろいろあつた中で、特に私の多く期待したのは、年若で希望に充ちて、燃ゆるごとき情熱を蓄へた、ムウルッウ Moulton であつた。私への仕打には、時とすると、いぶかしい事もあつたけれど、私の友情には毫しも渝りがなかつたばかりでなく、暴戾な私の敵人と彼との間に結びつきがあるのも厭はずに、何時か私の記憶の辯護人、親友の復讐者となるべき人と思はずにゐられなかつた。

這麼たのしみがあつた一方でも、單獨の散歩の興味と習慣は、依然失はなかつた。湖水の岸に沿うて、遠く遠く獨りで彷徨ひ歩いたこともあつた。然ういふ時にも、

活動好きの私の頭腦は、決して無事ではゐなかつた。腹案中の「制度論 Institutions politiques」も研究した。それは追つて話をする。ヴレ・エ州の歴史も考へて見た。ルクレチアを主人公にした散文劇の脚色も練つた。佛蘭西の孰の劇場でも採用されなかつた時に、あくまでもこの不幸な女主人公を上場させる爲に、どのくらゐ骨を折つても、きつと成功させて見せようといふ考を持たせた。同じ頃、タキッスを研究し出して、其の歴史の第一卷を飜譯した。草稿の中にそれは這入つてゐる。

ジゥネエヴでの滯在は凡そ四箇月位にもなつたらうか。十月といふ月に這入つてから巴里へ歸つて來た。ゴオフクウルと連れて歩くのがいまいましいから、里帰へは寄らずに了つた。ジゥネエヴへ還るのは、來春になつてからでよいことになつたから、此の冬中は靜として爲事をすることにした。爲事といつても例の「不均等論」の校正をすることがおもなものであつた。是は今度ジゥネエヴで相識になつたライ Rey といふ書店の手で、和蘭で出版させることになつたからである。この

書物は瑞西共和國に獻呈したが、其の政府には喜ばれる筈がないと思つたから、まづジゥネエヴで甚麼反響が起るか、それを待つて其の市へ還りたいと思つた。ところが結果は面白くなかつた。純粹な愛國の情から出たその獻呈も、唯政府の中に敵を造り、市民の中に嫉視者を喚び起したに過ぎなかつた。其の時の首座吏員であつたシゥウエエ Chouet 氏から、鄭重ではあるが冷い書狀が來た。それは草稿の中の、書翰束レの第三號に入れてある。ドリゥックやジァラベエルなどからの私信には、嬉しい挨拶の言葉も出てゐたけれど、唯それだけの事であつた。ジゥネエヴ人は誰一人として、此の著作に依つて感じられる熱烈な情を抱む者はなかつた。其の冷冷たる有樣を見て愕かぬ者はなかつた。斯ういふことがある。或る時クリシイ Clichy のヂゥバン夫人の處で、共和國の辨理公使クロンムラン Crommelin、それからメエラン氏等と會食してゐると、メエラン氏は四下かまはず、共和國政府は宜しく著者に對して報酬と名譽とを支拂ふべきで、若しそれを忘るなら、政府自らの醜態を暴露するに外ならぬと、斯う出た。クロンムラン公使は腹の底の知れぬ、品性の下劣な小人であつた。けれども私を前に置いてであるから、何とも返辭はしない

て、唯一種險惡な澁面をつくつてゐた。その恰好を、ヂュバン夫人が見て、くすくす笑つた。この著作から得た私の利益といへば、心の滿足といふことを除いては、唯公民の名を取つただけであつた。この名前は、最初友人達から附けられて、それがまた公然の名前となつたのであるが、その後私が公民たる資格を辱めたといふので、到頭また其の名さへ失つて了つた。

此の事で失敗を招つたからと言つて、ジュネエヴへ隱遁するのを廢しにする氣もなかつた。ところが、或る力强い誘ひのために、その方は中止になつた。エピネエ夫人がシュヴレットの別莊に翼が無いのを殘念がつて、今度澤山な金をかけて建增しをした。或る日夫人に連れられて建物を見に行つた。其の序に、散歩がてら其處から四半リュウも先の方へ行くと、公園の貯水池のある處へ出た。此處はモンモランシイの森つづきで、見事な蔬菜園が劃られてある。そして其の傍に、仙居と名のついた荒廢した一軒の四阿樣の建物が立つてゐた。ジュネエヴへ旅行前、始めて此の住居の狀態を見た私は、その物靜かな、いかにも心行くと言つた樣子に呀と撲たれた。私は恍然となつて、

「奥さん！　何て好い住居でせう。私には誂向きの隱遁所だ。」

斯ういふ言葉が我知られず脣を洩れて出た。その時は夫人も別段この言葉を捉まへて何とも言はなかつた。今度二度目に此處へ來て見て驚いたのは、先の舊びた破家が、何時の間にか悉皆見違へるほど新しい、手入れの行き屆いた家に變つて了つてゐたことだ。一家三人ぐらゐで暮しをするには、此の上もないやうな處に見えた。これこそエピネエ夫人が私へは無言で、自分の別莊の方へ使ふ用材と、職工を幾らかつつ此方へ引いて、金は餘計出さずに斯ういふことにしたのであつた。驚いた私の顏を夫人は嫣と見て、

「さあ、貴下の隱遁所ですよ。此處が好いといふお見立てでしたから、ほんの微衷で、これを貴下に差し上げたいと存じますの。どうか私を見棄てようなんて罪な考は起さないで下さいましな。」

この時ぐらゐ、烈しい刺戟を受けて醉ひ癡れたやうになつたことはおぼえがない。私はわが女友の情に溢れる手を涙で濡した。そして縱し此の時すぐにうち負かされて了はなかつたにしても、私の足元は餘程怪しくなつて來た。夫人は固

より何てもかでも意に從はせなければ承知の出來ぬ質で、一刻も速く急き立つて、樣樣と手段をめぐらし、いろいろの人を使つて私を屈服させた上に、テレエズ母子まで此處へ運び込ませるやうなことにして了つた。是で私の決心も甘甘と破られた譯になつた。祖國に滯留することは全く思ひ切つて、此の仙居の方へ腰を据ゑることを誓つた。夫人は又新家の造作が乾上がる間に、家具建具類をあれ是と氣を配つて取りそろへて、來春私の移轉すのを待ち構へてゐた。

もう一つ、此の覺悟を助けたおもな原因は、ヴォルテエルがジゥネエヴの近くに住居を構へたことであつた。私は斯う考へた。此奴屹度此處で謀反を起すにちがひない。私が其處へ顏を出すのは、前に巴里から逐ひ立てられたと同じ樣な氣風や習俗に、自分の生國ながら、撞著りに行くやうなものだ。絶えず苦しい戰鬪を續けなくてはなるまい。して、自分の立場として何が出來るかと言へば、多寡が小頑い衒學家か、羞恥家か、又は不埒な市民か、それより外に、何の知慧もない。斯う考へた。今度の自分の著作物に對してヴォルテエルから寄越した手紙は、端なくも自分の憂慮を返事の中へそれとなく書き込ませるやうな機會を作つた。そして其の結果

は果して憂慮した如くであつた。其から後は、最早ジゥネエヴを失はれたる市府として見てゐた。そして私は自ら知るの明あるものと氣づいた。若し自惚れて、のこのこ其市へ出掛けて行つたところで、屹度颶風に吹き捲られたことは知れてゐる。其の時に此の小膽者が、唯手一つで何が出來よう？　然も敵手は惡く言ふと傲慢な、金滿家の、——確乎した黑衣が附いてゐたからではあるが——辯舌にかけても立派な、そして既う女連や青年から偶像の如くに奉られてゐる、然ういふ人間だ。そんな危險な境へ盲目に突進してみたところで、何の功德になるものかと思つて、漫ろに怖毛を振つた。唯性來の平穩無事に、安易を欲して已まぬ心だけを大事と守つた。若し是が其の時は私の勘ちがひであつたにしても、今でも尙だ同じ事で私は瞞されてゐる譯だ。ジゥネエヴへ隱遁してゐたら、或は大した禍は招かないで了つたかも知れぬ。が熱烈な愛鄕心を傾けつくしたところで、それが果して國家のために著大な貢獻になり得たか奈何かは疑問である。

それと同じ時分に、トロンシァンもジゥネエヴで住居をしてゐたが、少し後に出稼ぎに巴里へ來て、尠からぬ金を掠め奪つた。彼はジョオクウル Jurcourt 士爵と連れて早

速過ひに來た。エピネエ夫人は窃と彼に相談したい事があつたが、多忙てその機會が得られなかつた。夫人は私にその事を申し込んだ。私はトロンシァンに勸めて、夫人の邸へ連れて行つた。斯うして私の力で二人は互ひに結びつくやうになつた。それから後は私を犠牲にして、互ひに親密の度を増して行つた。何時でも斯ういふ工合になるのは私の運命なのであらう。自分の友人二人を兩方から結び合せて遣つたと思ふと、もう其の二人は必と申し合してぢき私に背を向けるやうになる事に極つてゐた。その頃からトロンシァン家の人達が、祖國のためといつて隱謀を企んでゐたから、皆一様にしつかり私を憎むべきてあつたらうのに、此の醫者だけは獨り別になつて、長いこと私に好意を寄せてゐた。ジゥネエヴへ歸つてからなぞも、わざわざ手紙て、圖書館の名譽館員の位置に就かぬかと言つて寄越してくれたことさへあつた。しかし最早私の量見が決つてゐた時てあつたから、そのために動かされなかつた。

其の頃また私はオルバック邸を訪ねた。私がジゥネエヴへ行つてゐた間に、フランキゥイユ夫人も、オルバック夫人も、前後して世を去つたと聞いて、それてまた男爵の邸

を見舞つたのてある。ヂドロオから男爵夫人の死去の通知が來たときに、その良人が喩へがたき悲愁に閉ぢられてゐるといふことも言つてあつた。其の心の裡を想ひやつて、私は胸を刺された。私自身にして見ても、この可憐な夫人を奪はれた憾みは決して淺くなかつた。オルバック氏にはすぐ弔慰狀を出した。この哀れな出來事はその良人に對する私のあらゆる怨を忘れさせた。私は丁度ジゥネエヴから歸つた處てあり、男爵はまたこの新愁を忘れようがために、グリムやなにかと一緒に佛蘭西を旅行して歸つて來たところてあつたから、早速訪ねて行つたのが始まりて、私が仙居へ引つ込むまては出入りを續けた。

エピネエ夫人が私のために住居を裝へる、然ういふ話が未だ夫人を知らぬ男爵を中心とした交友界に知れ渡ると同時に、皮肉な噂が霰の如くに私へ降りかかつて來た。那樣ところへ引つ込むには引つ込んても、すぐ又都會の媚や悅樂が戀しくなつて來て、とても半月と辛抱が續くものかと、然う言ふ想像が噂の源になつてゐた。私は現在の立場を考へて、他には何とても好きなやうに言せて置いて、自分は自分だけて思ふ通りにやつて行つた。オルバック氏も私の爲めに盡してくれた

事がないではない。即ちテレエズの父のル・ヴァスウルが、齢も八十以上の老耄になつて、荷厄介で爲樣がないから、何とかして邪魔にならぬやうにして欲しいといふことを、テレエズの母が、掛つて私へ依頼てあつたから、その可哀さうな父親に落ちつき場所を見つけてくれたのがこの男爵であつた(原注。男爵が私の利益を謀つたといふ事は、全く自分の記憶の惡戯であつた。この本文を書いて久しく經つてから、私は自分の妻と雜談の折に、偶と父親の話が出たので、よく聽いて見ると、父を世話して救濟院へ入れるやうにしたのはこのオルバック男爵ではなくて、實は當時オオテル・デゥ Hôtel-Dieu《巴里最古の救濟院で、ノオトル・ダムの境内》の理事をしてゐたシゥノンソォ氏《前篇一七四二年の條に出て居る》であつたといふことが始めて分つた。其の時の事情を悉皆忘れて、一圖にオルバック氏の力だとばかり信じ切つてゐた。て若しこの眞相が知れなかつたら、私はこの人の爲に謝恩の祈禱をも爲兼ねないところであつた)。父は救濟院へ入れられたけれど、齢の寄りざまに、暖い家庭から遠のけられて了つたといふことが、入院するとすぐこの老人を墓石の下へ送ることになつた。彼の妻も、多勢の子供も、誰あつて少しでも可傷しい容子

を見せる者がなかつた。が敬愛の情に滿たされたテレエズばかりは、いつまでもこの損失から自分を慰す術を知らなかつた。どちら道老さきのない身體を提げて、わざわざ死にに可愛い娘の傍を離れて行くのを、見殺しにして置かなくてもよかつたてはないかと、我と彼女はわが身を責めつけ責めつけして、止めどもなく口惜しがつた。

やはり同じ時分、意外な人が訪ねて來た。もつともそれは昔の相識てはあつた。或る朝だしぬけに、舊友のヴンチゥウルが這入つて來て吃驚させられたのてある。同伴が一人あつた。何と容子も變れば變るものだ！　昔は隨分綺麗な男てあつたのに、見るから破落戸然として、迂闊にうち解けて物も言へなかつた。然う見たのは私の見損ひてあつたのてあらうか、或は放縱の結果が彼の精神まて昧くして了つたのてあらうか、或は以前の彼の美しさは全く今は昔の盛春がさせた業てあつたのてあらうか。遇つて言葉は交して見たけれど、何等の暖味も感ずることが

出來なかつた。そしてその儘冷く別れて了つた。が彼が然うして立ち去つた後になつて、二人が當時の事を憶ひ出して見ると、聯想はそれからそれへと繋がつて行つて、花の如き青年期の思ひ出が鮮明に浮んで來る。其の頃の我が生涯は、全くかの天使のやうな女人(ワレンス夫人)に獻げて了つて、自分は處女の樣に優しいものであつた。その天使も今は老い衰へて、この男にも劣らぬほどに溢り果てた。幸運な私のその時分の逸話、二人の嬪容な少女と交つて、無邪氣に、笑ひさざめいて過したあの浪漫的なッウヌの一日、しかもたつた一度の手の接吻が、唯一の慶福であつたと言つては詰らぬが、それでゐてそれ位の事が、生き生きした胸に喰ひ入るやうな、永久の哀惜を與へたのである。若い心が、高い感興にうち顫ふ力をば、その時分にはしんみりと感覺することが出來た。けれども、思つて見ればもう其の季節は遠い遠い昔に過ぎ去つて了つてゐた。斯ういふ輭かな、いろいろの回想から滲み出る涙の點滴は、凋落し切つた盛春の上に、又その時を最後とした盛春の興會の上に、はらはらと落ち雫垂つた。噫！　その盛春、その興會は去つて復た歸らぬのに、その返報として多くの可慘しい禍は、徐徐に犇犇と私に壓迫して來た。それ

が初めからわかつてゐたら、いかに多量の涙をその上に灑ぐべきであつたらう！

巴里を去る前、隱遁に先だつ冬中に、私は一種の心の悅樂を感じて、その淨い味を十分に味うたことがある。ナンシイの大學教授バリッソオ Palissot といへば、幾らか劇詩で名の聞えてゐた人であつたが、丁度この時リゥネヴィルで其の一篇を演じて波蘭土王の御覽に入れた。この劇詩を演じた動機が、王と筆戰を交へるやうな無鐵砲な一人の人間を捉へて來て、それを諷刺して王の御機嫌を迎へようといふのであつたことは、歷歷と分つてゐた。スタニスラフ王は固より寛宏で、諷刺などは大嫌ひであられたから、眼前斯ういふ人身攻擊にわたる演技を見せつけられて、以つての外のお怒りであつた。トレッサン Tressan 伯爵は王の命を受けて、ダランベエルと私へ手紙を寄越された。その文面に據ると、陛下はバリッソオ教授に罷免を仰せつけられさうだといふことが書いてある。私は返事を書いて、どうぞバリッソオ教授の罪の赦されるやう、王へ執成を賴み上げるといふ意味のことを哀訴した。

この願は聽き屆けられた。そして其の達しが來たと同時に、教授の今度の所業を大學の記錄に載せて置くことにすると書き添へてあつた。それでは罪は赦されても、汚名は永續する理に當るから、それもつらいといふことを答へた。再三の哀願で、到頭私の言ふとほり、記錄の事も罷めになり、此の事件に關する一切の證據はすべて揉み消されて了ふことになつた。トレッサン伯は言ふまでもなく、陛下の方に於いても、その約束には推重尊敬の意味が伴つてゐたことは確かだから、私は無上の滿足を感じた。眞價ある人の尊敬が、心の中に優しい氣高い感情を起させることは、到底虛榮心に伴ふ感情の比でないといふことを思つた。私はトレッサン伯の手紙も、自分の方から行つた返事も、皆文集の中へ書き込んで置いた。その原文は書翰束Aの第九、一〇、及び一一號となつてゐる。

若し斯ういふ記事が何時か世に出るものとすれば、自身に揉み消して了ひたいと思つてゐることを、却つて自分の筆で永く傳へるやうなことをしたに當る。それはよく承知してゐる。がしかし、此の人の事ばかりでなく、未だ外にも自分では不本意と思ひながらも、思ひ切つて書き殘したことが隨分ある。此の著述に筆を

執るに至つた大趣意は、始終眼の上に懸つてゐるから、當然の義務として出來得るかぎり微細な點まで、餘さず洩らさず書き出さなければならぬ。少しばかりのことを氣にかけてゐては、此の著述の目的は何處へか行つて了ふ。そんな不都合なことは許されない。斯う私のやうな、一種異常な特別の境涯にゐる者に取つては、倚り頼むべきは唯眞理あるばかりだ。其の他は顧慮する遑がない。遺憾なく私を觀察するには、善惡と言はず、有らゆる材料に基いて調査せねばならぬ。私の懺悔は、他のいろいろの人達の懺悔と斷ち難い關係を持つてゐる。私と交渉のあつた以上、他人に關する事でも、自分の告白と同樣の誠實さで書き立てたく思ふ。自分の心では、他人に關する事實だけは、幾分の手心を加へたいと思はぬでもないが、しかし決して自分よりも以上に、他人を寬容せねばならぬ義務があるとは思はぬ。何にせよ、私自身には始終正しく且眞であることを望み、他人に就いては出來るだけ善美な點を擧げて、私自身に關係のあることで、言はずに置けないことでなければ、その人の醜惡な點は表さぬ、といふことを望んでゐる。斯うした境涯に私を置きながら、誰が私から是以上の事を要求する權利を有つてゐるものがあらう？

この懺悔錄は、私の生きてゐる中に、――いや私ばかりでない、此の本のために氣を惡くさせられさうな人達の生きてゐる中に、世間へ出さうと思つて書いてゐるのではない。若し私にわが運命を支配し、この書物を左右する力があるなら、私も死に、其の人達も死んで了つた遠い後の世になつてからでなくては、決して世間に出さうといふことを思はない（譯者云。「懺悔錄」十二卷の中、最初の六卷は英吉利のウットンで、一七六六――六七の間に書かれ、後の六卷は佛蘭西のドオフィネエ Dauphiné とトリイとで、一七六八――七〇の間に書かれた。書中人物の生存中であることを憚つて、一八〇〇年までは出版させたくないといふのがルッソオの本意であつたのに、原稿を保管してゐた人達が焦つて、著者歿後未だ三年をも隔てぬ一七八一――八二の間に、最初の六卷を出版して了つた。一七八八年の新版で、全部十二卷が完成した）。しかし、眞理が可怖しさに、强暴な私の敵人どもはさまざまと心を碎いて、正しい行實を湮滅させようと謀つてゐるから、私も已むをえずそれを保存するために、堂堂たる權利と、嚴肅な正義との許す限りの事はせずにゐられぬ。若し又私といふものが、死んでさへしまへば誰にも忘れられて了ふといふものなら、一人でも

餘計迷惑を掛けないで、誤つた侮辱でも何でも唯一時の事と我慢して、默つて受けてゐればそれでよいかも知れぬ。しかしどうせ私の名が後代に殘るものとして見れば、靜とはしてゐられぬ。其の名と俱に、生前の事歷をも傳へなければならぬ。此の可慘しい人間の眞相は斯う斯うであつた、決して彼の邪心を抱いた敵人どもが、一生懸命に揑造したやうな、那樣人間ではなかつたといふことを、明瞭に知らせなければならぬ。

第九卷

一七五六。

早く「仙居」の方へ移つて住みたい一念で、翌年の春の復つて來るのを待ち兼ねた。住居の準備が整つたと聞くとすぐ、其處を占領しに大急ぎで走つて行つた。オルバック組の連中は、皆一同にわあつと言つて囃し立てて、一人法師で三月もあんな處に居れば、もう懲り懲りして、すぐ皆のゐる巴里の方へ悄悄舞ひ戻つて來ることは

眼に見えてゐるなどと、預言めいたことを言ひ合つてゐた。十五年の間も好きな住居に這入る事の出來なかつた私が、たまたま斯うした工合のよい隱遁所を見つけたのだから、甚麼冷評を受けようとも、一切無貪著であつた。氣は進まぬながら、せう事なしに騷擾な世界へ立ちまじるやうになつてからは、可懷しいシャルメットと、其處での生活の情味を、片時も忘れることが出來なかつた。私は斯う考へた。大方自分は逃避的な、野趣的な人間なのであらう。だから其以外の土地へ行つて、幸福に生活するといふ事は不可能である。ヴェネチアでは奈何であつたか。公務鞅掌の間でも、接衝應對の間でも、一むら木立、せせらぎ、水野路のそぞろあるき、然うしたものの姿が何時と擇ばず、心の裡に浮び出ては、わが思想をひつ攪拌したり、暗い影を投げ入れたりするので、戀ひしい戀ひしいと思ひ悶へる一念の遣り場がなかつた。巴里に居てサロン生活の盤渦におし揉まれ、晩餐會の實感を放縱にし、劇場の輝かしさに目を眩し、虛榮の煙に噎せ入つてゐるその間でも、この心は尙且前に言つたやうな、山村水郭に憧れ歩いてゐたのではないか。不本意な、いろ〳〵の努力に齷齪するのも、――折にふれては氣まぐれに、彼だそれ

だと言つて野心を燃して見たりするのも、畢竟は何日か安易な田舍生活に入る方便にしたいばかりであつたのだ。その田舍生活が是から出來るといふ場合になつたのであるから、私の喜びは言ふ迄もない。この目的に副ふやうにするには、不自由なく暮らせるだけの資產がなくてはならぬ。しかし他とは異つた境涯だ。別に然ういふ、資產はなくとも、全く反對な或る手段で、同じ目的が達しられるもののやうに考へられた。私には定まつた收入といふものはない。けれども、名前は賣れてゐるし、技能は確かにある。自身には何の贅澤もなし、費用のかかる要求や、習慣から來る奢侈は、全く廢して了つてゐた。それに隨分と怠惰者ではあるが、それでもさあと言つた時は、他一倍勉强もする。怠惰と言つても天性無爲を欲する人のそれではなく、寧ろ獨行自營の力があつて、氣の向いた時だけ爲事をするといつた人のに近いものであつた。樂譜書きも決して立派な、儲けの多い商賣ではないが、手堅くて信用がある。然ういふ商賣を擇んだ私の勇氣は、明かに世間から認められた。この爲事があれば、大丈夫生活に困るやうなことはあるまい。しつかり勉强さへすればよいのだ。「村の卜者」や、その他の著作から得た金が、まだ二千フ

ラン(約計八百圓)ばかり殘つてゐるから、忽ち自由を失ふといふほどのことはないそれに今著手中のいろいろの著作物も、本屋から金を强奪するやうなことはしなくても、樂みながらゆるゆるとペンを運ばして行けばよい。決して散歩時間まで犧牲にして、身體を使ひ壞したりなどするには當らない見込みである。家族三人暮しの其のめいめいが孰れも相應な爲事をしてゐるのであるから、喰ひ仆しが三人居るのとは譯が違ふ。約めて言へば、私の財源は自分の要求や欲望を差引いても、私の性向と一致するやうな生活を、樂にやつて行くのにちつとも差閊へはなかつた。

若し操觚者として、面白い書物の出版といふことを考へる氣が、少しでも私にあつたら、隨分利益の多い位置に就くことが出來たかも知れぬ。既に得た名聲は容易に墜ちさうな氣づかひもないから、それを利用することを考へて、このペンを樂譜の謄寫などに使はずに、全きり外の物を書くことに使つたならば、金が十分獲れて、大富豪にもなれぬことはなかつた。しかし私の考はそれてなかつた。麪包のために書くといふことは、天才を殺して、技能を潰すやうなものてある。天才、技能

は必ずしも筆さきに宿るものてない。高い、尊貴な思考作用、それがあつて始めて其處から生れ出て、育て上げられたものてある。買收されたペンの尖端から、何て力のあるものが出よう、何て大なるものが出よう。必需若しくば貪婪は、私に良く書かせようとはしないて、速く書けばよいと迫るにちがひない。成功の一語に渴すると、量が寡くても優れた眞味のある物を書かうとはせずに、筆は曲げないまても俗受一方のものばかり書きたくなる。優れた作家になり得べき人間も、それがために駄作家の羣に入らねばならぬ。いやそれのみてない。著者の位置といふものは、商人根性を離れれば離れるだけ、其だけ優れた貴いものになり、又ならねばならぬといふことを、始終自分は感じてゐる。生活問題に追ひ窘められてゐる中は、尊貴な思考に耽らうとて耽られるものてない。大なる眞理を語る氣なら、——又語れるやうにならうと思へば、成功といふ一念を拋棄つて了はなければならぬ。私が種種の物を書いて世に出した時の心の裡には、人類に對して良い奉獻をしたといふ確信だけがあつて、其以上に何等の利害心も潛んてゐなかつた。もしその著者が顧みられなければ、それは其の書物から得べき利益を吸收する氣のない人

達が、自分でそれだけの損をしてゐるのだと思へばよい。此方の知らない事だ。故らに好評を取つて、生計の補足にする。那樣考はさらにないのだ。本は賣れなくても、一方に口を糊すだけの手爲事はある。又それがために、書物が需要されるのである。

市中ではもう住居はしない。然う腹をきめて愈、此處を去ることになつたのは、一七五六年の四月九日といふ日であつた。其の後巴里や、倫敦や、その外の都會で、極短い滯在はしたことはあるけれども、何時も後から逐つ蒐けられるやうな、そはそはした、不本意な假の寓居であつた。實際住居といふ名を與へることが出來なかつた。エピネエ夫人はわざわざ迎へに來て、私達三人を自分の馬車に乘せてくれた。百姓が一人荷搬人をやつて、それでもう其の日の中に落ちついた　隱遁所の模樣を見ると、質素は質素だが、なかなか行き屆いた、しかも相應に凝つた設備がしてある。あの手でこれだけの設備をしたかと思ふと、私は非常に高價なもののやうに感じずにゐられなかつた。特に私のためにと言つて、私の見立てに仍つて、普請までしてくれた家で、わが女友の賓客として住居することは、樂られるほど嬉

しいことだと思つた。

未だ可なり冷い時分で、雪さへ彼處此處に殘つてゐた。が、草地にはもう青いものが芽んで見えた。菫櫻草もちらほら顏を出しかけた。大木には嫩芽が持ち上げさうになつてゐる。着いたその晩から、丁度窓の下あたり、檐と摺れ摺れの森の中で、鶯のささ啼きに不意うちを喰つた。少し假睡んで、偶と目を寤した時に、移轉のことはすつかり忘れて、やはり自分はグルネル町の家に居るのだとばかり思つてゐると、突然この囀りが耳に這入つたので、おもはず身體が顫いて、驚喜の聲が口から衝つ走つた。

「やれまあ、是て俺の願ひも愜つた！」

自分の周圍を取り捲いてゐる自然の風物からの印象を、俺くほどに受け込むこと、これが私の手始にすべき爲事であつた。新家の取片附こそ眞最初に濟ましてしまはなければならぬのに、其はしないで、散歩に出かける準備に忙しかつた。家の近處の草徑、培養林、灌木林、幽處、一つとしてその翌日に駈けまはつて見て來ないところはなかつた。細く觀て行けば行くほど、ますますこの隱遁所の自分のために造

られたといふ感じを深くした。未開地といふよりも寂寥と形容すべきこの地區は、まさしく世界の垠であらうかといふやうな考を抱かせた。斯うした、ぞく〳〵するやうな數數の美は、とても何處の都會の近處にだつて見られる譯のものでない。今もし突然身體を斯ういふ土地に搬んで來られたら、誰にしてもこれが巴里から精精四リウ(約計四里)くらゐの處だとは、どうしても思へぬてあらう。

しばらくの間は何事もうち忘れた。唯もう跳び廻つて田舍の悅樂に耽つた。軈てぼつぼつ古反古を調べたり、爲事の準備に取りかかつたりし始めた。また何時もの樣に、午前中は樂譜を寫し、午後は手帖と鉛筆を提げて野歩きをすることに極めた。碧空の下てなくては、沈著いて書くことも考へることも出來ない私は、この方法を更へる氣は無かつた。そして、ぢき門の外に見えるあのモンモランシイの森が、今から自分の書齋になつたといふ考へて、無上に樂まされた。いろいろ書きかけた原稿に一一目を通して見た。創新な題目は豐かに蓄へてたが、都會の騷擾に邪魔されて、物にすることはなかなか容易てなかつた。幾らか然うした邪魔を遠ざけることが出來たら、もつと勉强しようと豫て考へてゐたので、その豫期は

十分に果された。病氣と根競べをしてゐながら、——又、ラ・シッヴレットだ、エピネエ Epinay だ、オオボンヌ Eaubonne だ、モンモランシイの別莊だと、彼方此方へと歩き廻つてゐながら、——又夫人の家で、のらくら者の通人どもに引つ懸つては、始終時間を奪られてゐながら、——それに一日の半分は樂譜の方へ持つて行かれてゐながら、仙居とモンモランシイで六年間に書き上げたものを分量に積つて見れば、この間に費した時間は、決して無意味でなかつたといふことが解る。

著手しかけた原稿の中でも、長いこと興味をもつて練つてゐたのは、かの「制度論」てあつた。これならわが名譽に封印を置くに足るものだから、生涯かかつて書き上げてもよいと思つた。十三四年前、ヴェネチアに居た時分、あれほど評判のあつた其の國の民政上に、種種な闕典があるのを見るともなしに氣附いて、それからはじめて斯ういふ腹案が組み立つやうになつたのである。それから後、道德を歴史的に研究して行くうちに、だんだんと私の視圏が擴がつて來た。私は斯う思つた。

何物も根柢に於いて政治と交渉を持たぬものはない。如何なる方法に據るかを問はず、一國民は、その國の政府が限定したより以外の者であることが出來ぬ。そこで最善なる政府の大問題を約言すると、次のやうになるのであらうと思つた。「最も有德な、最も光輝ある、最も聰明な國民、つまり、最大の意味でいふ最善な國民といふものを造るに適した政府の資格とは何であらうか。」此の問題を裏返して考へて見ると、幾らか異なる點はあるか知らぬが、「如何なる政府が、その本質上、常に法律と最も親善なのであらうか」といふのと同じ意味に當るのでないかと思つた。「法律とは何ぞ」といふこと、及びその外同じやうな重要な問題は、皆此處から產み出されるのである。この問題を闡明することは、大眞理に到達する所以で、人類社會に無上の慶福を齎すのみならず、殊に私の祖國に對する至大の貢獻となる所以であると思つた。自分の鄕國へ旅行をして行つた時にも、正しい法津とか、純粹な自由とかいふ、然ういふ觀念を全く見出すことが出來なかつた。この觀念を彼等に與へるために、斯ういふ間接な手段を取つたところで、彼等の自尊心を毀ふ憂もあるまい。隨つて彼等自身に思ひも寄らない眞理が、私によつて發明されたからと

言つて、感觸をわるくする道理もなからうと信じたのである。

此の著述を始めてから、彼是五六年にもなるが、些とも捗取らなかつた。斯ういふ類の物を書くには、靜かな場所で暇に飽かして、ゆつくり氣を沈めてかからなくてはならぬ。それに、この書物を書くにも、俗に謂ふ拔け駈けをするつもりで、一切誰にもこの計畫は話さなかつた。デドロオにすら話さなかつた。今のやうな時代に、また今私の居る此の國で、斯ういふ物を書くといふことは常識が無さ過ぎるといふ虞があつた。況して友人達が吃驚して、私に干涉を試みることも思つてみなければならぬ(原注。この疑惧を吹き込んだのでは、デゥクロオが聰慧立つて嚇したのが一番の原因であつた。デドロオとは私が議論を交へると、どういふものかきつと私は持前以上の皮肉屋にされて了ふ癖があつた。それがために今度のやうな激情や偏癖の痕は些とも見せずに、唯理性の力量のみで押し通さうとするやうな著作物について彼に相談を持ちかけることは、廢めにした。この著作がどういふ調子で行つたかといふことは、それから約めて來た「民約論 Contrat social」を讀んでみるとよく解る)。好い時分に是が脫稿するであらうか、自分の存生中に世に

出るやうになるてあらうか、然ういふことは未だ全く見込が立たなかつた。譏刺の意味もなく、爲にする所があるのでもなしするから、何處から觀ても攻擊の持つて來やうはあるまいと信じて、出來得る限りは大膽に、問題が要求するだけのことは何物でも犧牲にしやうといふ考を持つた。自分の戴く官府に對しては勿論尊敬を拂ひ、法律に對しても決して從順を失はずにゐて、そして自分の生れた時から賦與されてゐる思想の權能を飽くほどに、少しの狐疑もなしに、行使しよう、人民の權利は間違つても侵害せぬやうに注意を加へつつも、要らぬ心配のために自分の思想から得來るべき利益を放棄するやうなことはしたくない。然ういふことが私の望みであつた。

自分は他國人として佛蘭西に住んでゐる者であるから、思ひ切つた眞理を吐くには、大層都合がよいと思つた。私の望むとほり、一一佛蘭西で認可を取つて出版してさへゐれば、その外では、誰にも、自分の主義や出版の事を辯疏する必要はないといふことを知つてゐた。ジゥネエヴへ行つては、もつと自由が利かない。何爲と言つて彼處では、何處で出版したものでも、一一檢稿官が手に取つて煩く非難する。

エビネエ夫人の言ふなりになつて、ジゥネエヴへ落ちつかうといふ考を棄てて了つたのも、以上言ふとほりの原因が尠からず手傳つた。「エミイル」の中にも言つたやうに、眞に祖國の幸福のために著書を獻呈しようと思へば、何事か爲にする所がない以上は、決してそれを自國で出版してはならぬといふことを感じた。

未だその上に、自分の境涯を有り難く思つた事がある。佛蘭西政府が鋭い眼で私を觀てゐるやうなことは多分あるまい。保護とまでは行かなくとも、少くも私の靜穩を亂すやうなことはすまいと、斯う考へた。つくづく思ふに、大勢から觀て到底禁壓することの出來ぬやうな言論が顯れて來たときに、それを寛容して置くのが、一番骨が折れずにゐて、それで最も巧妙な爲政者の態度と謂はねばならぬ。現に私にして見ても、何處の政府でもすることだが、もし佛蘭西から退去を命ぜられたとしても、それがために私の著書は何等の痛痒も感じない。否、却つて一層過激の度を增したかも知れぬ。それとは反對に、何の危害も自分の上へは落ちて來ないと極まつてゐれば、著者たる人は、自己の著書に對する全責任を背負つて立つことになり、又民權の尊重すべき所以が、始めて明かになつた嬉しさに、歐羅巴全洲

が抱いてゐた根深い偏見は、綺麗に跡を隱すやうになつたてあらう。

斯う私の考へたことを、其の結果から判斷して、自ら欺く者であると言ふ人があるかも知れぬ。併しそれは然ういふ人達自身が謬つてゐるのでなからうか。其後私の身の上に、颱風が吹き落ちて來た時に、其の原因には私の著書がなつたのだと言はれてゐたが、その實、目指すところは私といふ個人に對してであつた。その時には、誰も著者といふものを念頭に置いてゐなかつた。唯ジアン・ジャックといふ一個人を陷れさへすれば、それでよかつたのだ。だから彼等が私の著書から、穿り出して、此處のところが不可いのだと言つた其の部分は、やがて私に名譽を與へるものであつた。いや斯う一跨ぎに先の事まで言つて了つてはいけない。今でも私には一個の謎になつてゐるこの祕密を、これから先わが讀者たちが明かに領解されるかどうかは疑問である。がしかし、私にはこれだけのことが言へる。若しも私の發表した說が、ああいふ酷い虐げを値するほどのものであつたのなら、も少し早く自分は其の說のために殉じなければならぬ所であつたのだ。それは、私の說を最も露骨に、……と言つてはよくないか知らぬが、隨分大膽に表白した著書〔不均

等論〕が、仙居へ隱遁前に出てゐるのに、それに對しては誰も非難の聲を放つ者がなかつたばかりか、その書物の頒布を佛蘭西で差し止めようとする人さへなく、和蘭で弘まつたほど此國でも賣れて、大した評判を取つたといふ事實があるのである。引續いて「ヌウヴェル・エロイズ」が出た時も、やはり同じやうに無事に濟んで、しかも前程の好評を得た。殊に不思議なのは、このエロイズが臨終の信仰告白は「サヴォアの司祭」のそれと全く同一轍であつたのである。「民約論」の中で大膽だと思はれるやうな思想は、すでに皆「不均等論」の中で言つて了つたものばかりである。「エミイル」の中で大膽だと思はれるやうな思想も、すでに「エロイズ」の中で言つて了つたものばかりである。前に出した二作に對しては、思想の大膽といふことは何の累ひにもならなかつた。だから後に出た著作が累ひを受けたのは、決してそれに含まれた思想からでなかつたことは明かである。

それとは同じやうなものだが、近頃になつて思ひついた計畫がもう一つあつて

其處へ注意が行つた。それはサン・ビエエル師の著書を拔萃することであつた。それを今までは外の話に牽かされて、言ひ出す折がなかつた。ジュネエヴから歸つて來た時に、マブリイ師の意響をヂュバン夫人が聞いて、それは一番私にさせたら面白からうといふので、夫人から私が手がかりを捉へたのである。夫人は巴里三美人の中の一人で、老サン・ビエエル師はこの夫人の掌中のものとなつてゐた。縱しこの人を明かに最負するといふことでなくとも、エエギイヨン Aiguillon 夫人との間に、幾らか競爭の氣味があつたことは否まれぬ。彼女はこの惜むべき師に對する記念として、絕えず敬愛の情を獻げた。それがとりも直さず雙方の名譽であつた。であるから、其の師の死產兒とも謂ふべき未定稿が、彼女の書記の私の手で蘇生することが出來たら、彼女の自負心は本望に感ずるのであらう(譯者云。サン・ビエエルの名は、前に一七四二年の條に一度出た。詳しくはAbbé Charles-Irénée de Saint-Pierre といふ。一六五八—一七四三)。

原稿を見ると道がにうまい事が言つてある。けれどもその言ひ現し方がおそろしく拙くて讀みづらい。それにこの著者は、讀者を學生と見做してゐるやうな

態度でゐながら、とんと大人を相手にしたやうな、無興味千萬な書きぶりがしてあるには驚かされた。然ういふ譯から、この爲事を私にして見ぬかといふ事になつた。もつとも其には、此の爲事その物に價値があるといふだけでなく、原稿書きはするが創作は面倒臭い、感想を頭の中で揑ね返すのは億劫だから、自分で新しい物は書きたくないけれど、他人の搾り出した思想に面白いのがあれば、それを潤飾するか敷衍するか位なら引き受けてもよい、といふやうな人間には、至極適當な爲事だといふ意味も這入つてゐた。而已ならず、ただ單に飜文するだけといふのでもないのだから、場合に仍つては自分の意見を加味しても差閊はない。それゆゑ何か自分の說が發表したければ、ずん〳〵書き込んで行つても、表向きはサン・ビエエル師の署名なのだから、自分の名で出すよりは、ずつと安全に通るといふものである。ところで此の爲事は全體然う手取り早く出來さうもない。原稿が皆で二十三卷ある。それを片端から讀んで行つて、考へ考へして、その中から書き拔きをせねばならぬ。原稿は驚くほど紛糾と冗漫で、檢束がなくて、處處に重複があつて、淺薄な、謬つた說も尠くない。さういふ間から摘むやうにして、優れた旨い處を取つ

て來て、それで、辛うじてつらい爲事の興味を繋いで行くやうにしなくてはならぬ。幾たびか私はこの爲事を拋棄つて了はうかとも思つた。けれども體好く逃げる手段がなかつた。併し私がサン・ランベエルSaint-Lambertの世話で、この原稿全部をサンビエエル師の甥の、サン・ビエエル伯から受け取つた時には、とにかく一度當つ見てた上で、不可なかつたら突つ返して了ふし、然もなかつたら、立派に物にしようと然う覺悟した。仙居へ來る時に、それを持ち込んだのも然ふいふ見込があつたからだ。此處で到頭閑日月を犧牲にして、始めてこの爲事に取りかからうとした。

三つ目に、もう一つ新計畫がある。これは私が自己解剖の結果思ひついたもので、是こそ眞に人生に福利を供へるものだと信ずることが出來た。若しこれが豫想どほりに行けたら、恐らく世界最有用の書物に數へられると思つただけ、それを書くのが心から愉快で堪らなかつた。人間が生を續けて行く間に、だんだんとその本色から遠かつて來て、終には全く異なつた別な人間に變り果てるといふ事實は誰も知つてゐる。今書かうと言ふのは其の普通の事實ではない。私の目的はもつと新しい、しかももつと重大なものであつた。即ち此の變種の生ずる原因を

究めようとするのである。其の原因はまさしく人間に在るものと假定して、奈何いふ工合に此の原因を導びいたならば、一層優良な人間が出來るか、又一層安全な道を歩むことが出來るか、それを私は究めて見たいと思つた。欲望がすでに一定の形を取つてから後に、それを殺さねばならぬと言つては、なかなか困難だ。此處で若しこの欲望の源頭に溯ることさへ出來たら其の源を下らぬ前に當つて、豫防するとも、取り替へようとも、善導しようとも、然う骨の折れることでない。一度誘惑されても靜と踏み堪へてゐるのは、其の人が強いからだ。けれども後になつて、弱くなつて了へば誘惑に勝てない。初めの時のやうに強くてさへゐれば、決して降伏することはないのだ。

斯う種種な性行の人間が出來るのは、奈何いふ譯かと思つて、自分をも觀察して見たり、他人の上に就いて研究もしてみた。どうも其の原因といふのは、大部分は外界の事物から受ける最初の印象 l'impression antérieure des objets extérieurs といふやうなものであるらしい。吾儕の感覺や覺官は、絶えずこれに手加減を加へて、そして、其の手加減した結果をば、しらずしらずの裡に、知識、感情、行爲の中までも持ち込

んでゐるやうである。私の蒐めた、澤山な顯著な觀察は、決して議論を容さぬやうなものであつた。この生理上の土臺から、一個の法則を歸納してみたらと思つた。それに仍つて人の心意は種種な境遇に應じて、道德を成ずるに最も都合のよい狀態に置かれもするし、維持されもすることであらう。動物界の理法のために、道德律の犯されることは太甚しいものである。今若し此の禍が福と轉じ得たならば、理性はどんなに煌きを見せて來ることであらう。また惡の苗の、芽む間も待たずに枯れ伏す態が眼に見えるやうだ。氣候、季節、音響、色彩、幽暗、光明、元素、營養、喧噪、沈默、運動、靜止、いづれもみな肉體に影響を與へぬものはない、隨つて心意に作用を及ぼさぬものはない。吾儕の言動を支配する感情、――其の感情の根本は、皆如上の要素に支配されたものに外ならぬ。これが私の根本の思想で、これだけはおぼえ書きにして置いた。此の輪廓に依つてずつと書いて行くのはいかにも面白さうであるし、讀んでも面白い本が出來さうであつたから、一番纏めて、天性率直で、道德を愛しながら、心の弱いために自棄してゐるやうな人達に、しつかり讀んで貰ふやうにしたいと思つた。書名も「感覺的道德、一名賢者の唯物主義 La Morale sensitive, ou

le Matérialisme du sage)」と附いてゐた。併し、眞箇に此の爲事を續けて行くことは出來なかつた。だんだん話すやうな種種な障礙が起つて來て、到頭それに邪魔されて了つたのである。其の覺え書きが終に奈何いふ成行になつたかといふことも、其の時になれば分らうと思ふ。實はその覺え書きの成行といふよりも、私自身の成行と言つた方が早く解る位のものだ。

以上話した外に、以前から多少敎育組織のことも考へてゐた。これはシヴノンソオ夫人が自分の良人の敎育に胸を痛めた例があるので、何卒息子のために適當な方法を調べて欲しいと、私への賴みがあつてからの事であつた。私の興味から言ふと、此の方は餘り好きな爲事でもなかつた。が、友誼といふ權威に壓へられてゐるために、外の孰れよりも一番氣になつた。今話して來た中で、とにかく計畫どほりに出來あがつたのは、此の書物だけであつた(譯者云。これは一七六二年に出た「エミイル」である)。此の書物を書いた時の私の懷抱が、ああいふ危禍を買ふことにならうとは奈何して思はれよう? 此處では未だ其の悲劇に筆を下すのは少し早い。先へ行けば、可厭てもその次第を話さずに置けぬやうな場合に迫られる。

斯うさまざまと研究問題が重なつて來てゐるので、散歩の時の頭腦はなかなか忙しかつた。前にも言つたと思ふが、私は歩きながらでなくては、物が考へられない。佇立つたと思つたら思考もぱつたり止まる。頭は、足の動いてゐる時だけ動いてゐるのである。けれども一つだけ、雨の日に、書齋ですることに極めて置いた爲事がある。それは「音樂辭典」だ。初めに出來たのは材料が不統一で、片輪で、益に立たないから、もう一度悉皆書き直さなければならぬ事になつてゐた。必要な參考書は幾らか手許にもあつた。其の上に、王室圖書館の藏書を大分借り出して來て、二月ばかりかかつて書き拔きをやつた。其の書物の中の幾部かは、特許を得て仙居まで提げて來た。であるから、どうかして外へ出られない時でも、樂譜の謄寫て氣がくさくさして來た時でも、爲事に不足はなかつた。仙居でも、モンモランシイでも、後にはモチエエでも、何時も爲事の配當は斯ういふ工合にした。それで自然と氣が換るやうになつて、骨が折れずに捗が行くといふうまい理窟になつた。

この「辭典」なども、モチエエで、外にいろいろの爲事をしてゐる最中に脱稿したのであつた。

斯うしてしばらくは、せつせと豫定の爲事に取りかかつて、面白く其の日を送つて行つた。ところが麗しい季節がやつて來て、エビネエだ、シヴレットだと、引切りなしにエビネエ夫人を連れ出すやうになつて來たので、其の方へ注意が行つて、外の目的は壞されがちになつて了つた。私としては稀しくもない事であるが、それを豫定の中へ組み込んで置かなかつたのが不覺であつたのだ。エビネエ夫人に可憐しい種種の氣質があるといふことは前にも話した。誰彼と言はずに友達には優しくする。熱心に世話をする。彼等のためには時間も勞力も厭つてゐない。そこで又其の返報には、友達の方からも、彼女に對する義務として、機嫌を損ねないやうにしなくてはならぬ。今までは別に義務だなどといふ考もなしに、自然と彼女の機嫌に適ふやうになつてゐたが、終には、自分の身に鎖が投げ懸けられてゐる、其の重量があまり感へないのは、唯友情の所爲に過ぎぬといふことが解つた。しかも可好しからぬ多くの交際社會といふものの爲に、尙一層その重量を增させる

やうになつた。其處を夫人が考へて、私に都合のよいやうな工夫をしてくれた。けれども實は私の爲よりは、夫人自身の都合を圖つたものとしか見えなかつた。それは何かと言ふと、一體何時頃が夫人の獨りでゐる時か、客の少い時か、それを私に知らせるといふことであつた。この爲にどの位自分が損をしなければならぬかといふ事は氣づかずに、早呑込みに結構だと言つて了つた。それからは、自分の都合のよい時間に訪問するといふことはまるで出來なくなつて、常も夫人の方に差閊のない時ばかり出掛けることになつて了つた。孰の一日だつて、本當に自分の物と思つて安心してゐることも出來ぬやうな境遇へ陷つて了つた。是迄夫人を訪問した時の樂しい心持は、この束縛のために何處へか去つて了つた。夫人が那程堅く約束した私の自由といふものも、有名無實な、何の値もないものであつたと氣附いた。たつた一度か二度、遮莫といふ氣で狡猾を構へてゐると、身體でも惡くしたかと言つて使が見える。手紙が來る。如何にも心配してゐるといふ風が見えたので、これは堪らぬと思つて、忽忽床を延べて其の中へ潛り込んで、それで纔とお勤を免れることが出來た。奈何してもこの軛には敵はない。私はそれに屈

服した。しかも、私は飽くまでもエビネエ夫人が可憐しかつたればこそ、あまりつらいと思ふやうなこともなくて、つとめて自分の驕奢を壓へ壓へしてゐられたのである。彼女も其て不斷の仲間と會合せぬ折の所在無さを醫すことが出來た。もとよりそれとても、彼女に取つてはほんの蟲押へぐらゐにしかならぬのであるか、全く獨りて投つて置かれては、到底堪へられぬことは知れてゐるから、それから思へば未だ優な所があつたに違ひない。けれども彼女が文學に心を入れて、小說なり、書簡なり、劇なり、物語なり、然ういふ種類のものを善惡構はず書かうとし始めてからは、もつと優な怠屈凌ぎがある譯てあつたのだ。が、彼女は然ういふ物を讀むことなら格別だが、書く方にはあまり樂みを感じなかつたらしい。僅か一度に二頁か三頁書くにしても、その時には二三人てもよいから、義俠的にそれを聽いてやらうといふ者がないと、其の勞作に酬いられたとは思へなかつたのである。其の二三の選ばれたる人の中へ這入らうと思へば、他人に引き立てても貰はないと、行けなかつた。私一人ては何時も大抵能無しと見られてゐた。能無しは雷にエビネエ夫人の連中の時ばかりてない、オルバックの連中の時ても、また何處ても、グ

リムが模範を見せるやうな處では、必と然うてあつた。能無しも便利てよいが、二人の會合の時だけは困つた。其の時には、柄にもない文藝の批評を試みるでもなければ、羞恥家が生意氣な通がかつた口を利くてもあるまい。本物の苦勞人に聞かしたら、さぞ「なに洟垂らしが！」と言つたやうなやつを浴せ掛けられることてあらうと可怕さも可怕く、奈何してゐたらよいのか、途方に暮れて了ふのてあつた。だから、夫人と會合の時に、斯ういふ考が起りもしなかつた事は固よりの話てある。恐らく、生涯夫人と一緒にゐても、然ういふ考は一度も起らなかつたらうと思はれる。それは彼女の容貌が、私の氣に入らぬといふやうな譯からてはない。却つて友として愛し過ぎたので、戀人としては愛することが出來なくなつたのてあらう。彼女の顏を見て彼女と話を交へるといふことは、私に歡喜を與へた。彼女の對話は多勢の時は面白いけれど、一人の時はさつぱり氣乘りがしない。私の話はまた一倍乾燥て、とても彼女の慰めになる道理がなかつた。長い間無言てゐるのがつらいから、精精氣を張つて座を賑かさうとすると、何時ても必と疲れたやうになることはきまつてゐたけれど、それが可厭になつたといふ事は一度もなかつた。彼

女に眞心を見せて兄弟としての接吻を迫るのが嬉しかつた。その接吻も、彼女の方では一層淡泊な意味に取つてゐたらしい。ただそれだけの事てあつた。彼女はおそろしく痩せぎすて、色も蒼く、胸の肉つきなぞも、私の掌のやうに扁平かつた。この缺點だけても、私の熱情を冷却すに十分てあつた。乳房の無いやうな女は、女とはどうしても解れなかつた。その外にまだ、話しても無益なやうな或る原因から、彼女が異性の人てあることを、私はいつても忘れてゐた（譯者云。其の原因といふのは、多分夫人がフランキュイユとの關係から來た一件てあらうといふことてある。前篇第七卷の末と參照）。

然ういつたやうな譯から、爲方なしにお勤をすることに決心して、少しも反抗の意味を見せずにゐた。と、それは少くも最初の一年間は、想つた程に面倒なものとも思へなかつた。エビネエ夫人は大抵夏中を田舍て暮すことにしてゐたのに、今度は奈何いふ譯か、暫くの間しか滯在しなかつた。巴里の方の用が棄てて置けなかつた爲か、グリムが居ないから、ラ・シヴレットの轉地も餘り面白く思はなかつたか、孰方かてあつたらう。彼女の居ない間が私の皺伸しをする時て、交友が澤山に夫

人の處へ集まつて來ると、私は溫柔しいテレエズや、その母親と一緒になつて、物靜かな幽居の味を縱にすることにした。過去幾年の間に、田舍行きをした事もたびたびであつたが、何時もきまつて田園を味ふことが出來なかつた。其のたんびには大抵仔細らしい人間が同行して、可惜興味を殺がれるので、田園に對する持前の嗜好をば、ますます鋭くさせずに已まなかつた。ことさら樂しさうな其の面影が、ちらりちらりと眼に映るだけ、それだけ、心の悶へに堪へられなかつた。サロンや、噴水や、遊園や、土間や、然うしたものを看せつけようとする煩い手合には、他きあきさせられた。際物の出版物、クラヴサン、合唱曲、謎とき、駄洒落、齒の浮くやうな狎戯、みじめな講談家、大晩餐會、それらにも勞憊れ切らされた。だから見窄しいやうな荆棘垣根、納屋、牧場などを瞥と眼尻で睨んだ時、或る田舍の村を通つて行つて、偶と、しやく入りの、うまいオムレットの匂に芬と鼻を撲たれた時、牧童がうたひ流す小唄の遠音に耳を弄られた時などには、何時も馴れてゐる臙脂や、女服や、香油やを、殘らず鬼にても與れてやりたいやうな心持になる程であつた。田舍の家婦の手料理、濁酒の方がどの位か可羨しく思はれて、不斷の庖廚長や、給仕長などの頰邊を撲り

曲げて了つてやりたくも思つた。何爲と言つて、然ういふお役人達は、夕飯頃になつてやつと晝食が出來たと言つて來たり、もう寢るといふ時分にてもならないと、夕飯を喰はせようともしなかつた。それよりも、もつと酷しいのを頰邊へ見舞つてやりたいと思つたのは、給仕の奴等だ。他がむしやむしや喫つてゐると、傍からじろりじろりと可羨しさうな眼附で覗き込んでゐたり、咽が渴いて堪らないと、主人の酒の味の變になつたやつを寄越して置いて、目玉の飛び出すほど强奪つたりなんかする。居酒屋へ行つたつて、未だまだ佳いのが、もつと廉くて飲めるものを。

到頭この住み心地のよい、閑寂な庵室を見るやうな所で、自分の本意とする不羈な、順調な、平和な生活の中に、わが殘年を思ひの儘に過すことの出來る安定な位地を得たのである。私に取つては新しき生活である。この新生活が私の心に奈何いふ影響を持つて來たかといふことを話す前に、便利のため、まづ私の心が何處まで此の境涯へ陷り込んでゐたか、それを一と掴みに話して見よう。然すれば讀者は後の新生面を繹ね溯るに都合がよからうと思ふ。

テレエズと私との結びつきが成り立つた日は、やがて私が道德的生活に入る日であつた、といふことは今までよく考へた事である。自分の愛著心を傾ける目的物が非常に欲しかつた。それは、私のためにその目的となるべき筈のものが、喩へやうもなく可慘しい最期を遂げたからである。幸福の憧憬といふものは、決して人間の胸臆から掻き消されて了ふものでない。可懷しい「母」は年の波に搖り流されて、今はあさましくも漂落れ果てた。とても此の世で彼女が幸福になられようといふことは、望みがたい事である。斯うなれば彼女の幸福を分け前する途も盡きた。私一人で私相應の幸福を搜して廻るより外に爲方がない。それからして私は種種の思量や、種種な計畫を、あれ是と搔き搜して見た。ヴェネチア行きの事に就いても、彼處で心にもなく長官と敬つてゐた那の人間に、幾らか常識てもあつたら、其から私も社會の人となれたかも知れなかつた。が、何分根氣の續かぬ人間ではあり、況して面倒な、何處まで行つても際のないやうな爲事は、眞平といふ方である。彼處で失敗を取つてから後は、もう外の事は何もかも皆可厭になつて了つた。

昔の癖で、遠い處に吊下つてゐるやうなものは、いづれも、牽きつけて置いて「刎ね飛ばす魂膽のあるものと、一圖に思ひ込んで、何も死に身になつて努力するが物はない、唯その日暮して澤山だ、といふ氣になつて了つた。

テレエズと近しくするやうになつたのは、丁度斯ういふ時であつた。この娘のふうわりとした氣質が、いかにも自分のと緊乎適つてゐるやうな氣持がした。それ以來、時の力でも、禍の手でも破れないやうな、又引き裂かうとするだけ一層堅く結び附くやうな、然ういふ愛著心を彼女に寄せたのである。この愛著心の力の强味は、だんだん話して行く中にも解つて來る。例へば、私の慘狀が極度まで行つた時分に、私の心の上へ尋常ならぬ大創傷を彼女から附けられたけれど、それすら斯うして此の話を書いてゐる瞬間までも、一言も怨みがましいことを他人に洩らしたことがないくらゐである。

彼女と離れまいためには、さまざまな勞苦を經て來た。運命や人間に妨げられながらも、二十五年を彼女と共に暮して來た。しかし其の間に正式の結婚に就いては、別に彼女が强つて待ち望んでゐたといふてもなく、私の方でも、式を擧げると

いふ約束をしたこともなかつた。ところが、其の揚句の老後に及んで、始めて彼女を正當の妻といふものに引き直したのであるから、然う知れば、世間では多分斯う推察するであらう。最初から熱烈な戀に陷つてゐたのが、到頭何時しか然ういふ最後の手段を取らせるやうなことになつたのであらうと。して又永久に然ういふ手段を私に取らせなかつた筈の、或る特殊な強い理由のあることが分つたならば、世間では、一層自分等の推察の誤つてゐなかつたことを確めるであらう。そこで私は眞實の打明け話をして、實際彼女に過つた最初から今日まで、彼女に對して戀愛の一閃をも感じたことはなかつた。ワレンス夫人にはまゐつて了ふとも、此の女にばかりは、惚れる氣づかひは決してなかつた。彼女から得た欲情の滿足も、つまり單に私の「男性」といふものが感じただけで、私の「個性」が決してそれで滿足したわけではなかつた。と、斯う聞けば、諸君は何と思はれるであらう。すると、私の身體は他と異つてゐるから、戀を感ずるといふことが出來ないのである、私が最も可憐しいと思ふ女達に牽かされる感情と、この戀とは別物であるから、と然ういふ風に考へられるかも知れぬ。まあもう少しの間、辛抱して居て貰はう。其の中に

此處だと言ふやうな場合が來て、何もかも獨手に解けるやうになる。

同じ事を繰り返すやうだとは思ふが、しかしそれが必要なら爲方もあるまい。私の欲求の第一のもの、最も大なるもの、最も強いもの、最も壓しがたいものといふのは、全く心の裡に在つた。何かといふと親み——最高の度合ての親みといふものに外ならぬ。斯ういふ譯から、特に私には男よりも女が必要であつた。男の友よりも女の友が必要であつた。何が異つてゐると言つて、此の欲求ぐらゐ異つてゐるものはあるまい。身體と身體との抱擁などは、どのくらゐ緊密であつたところで、とてもとても私の思つてゐる欲求の半分も滿足させどころでない。同一體の中へ同時に二個の靈を併せ宿す、然ういふのでなければいつまでも空虛を感じさせられる。その空虛、孤獨の感が、もう自分から離れてもよい頃であらうと思つてゐた。限りなく美しい性質の、しかも未だ其の頃は容姿までが、唯可愛さ一方で、技巧、矯飾といつたやうなものの淡影さへ雜らぬこの年若な少女の全心身を、若し私が望んでゐたやうに、自分の全心身と抱合させることが出來さへしたら、自分の全心身を彼女のそれと抱合させる事は譯もないことであつた。男の方には心配

せねばならぬ人間は一人もなかつた。私は彼女に愛された唯一の男であると信じてゐる。彼女の穏かな欲情は、私の方て自分の貞操を破つた時ですら、他に愛する男を求めるといふ必要を感じさせなかつた。私には家族がなかつた。彼女にはそれがあつた。そして其の家族も、いろいろ氣質の違つた、まるて懸絶れて、どうしても自分の家のものに出來ないやうな人人から成り立つてゐた。それがそもそも不幸のはじまりてあつた。私も其の母親の子になれることならば、甚麽事をしても何が可厭しからう！　然うならうためばかりに、甚麽に骨を折つたか知れぬが、どうしても效驗が見えなかつた。無益と知りつつも、利害を共同にしようと思つたが、それもまた不可能の事であつた。彼女は私のと異つた、むしろ私のと利害相反するやうな收入をもつてゐた。自分の娘のとも利害を異するところから、到頭それを捲き上げて了つた。母親も、外の子供等も、孫等までが、みんな蛭みたやうな者ばかりて、テレエズの物を盗むぐらゐは、まだまだ餘程罪の輕いところてあつた。慣れつこになつて、姪どもに迄自由にさせてゐるこの哀むべき少女は、自分の物を竊まれようと、所好な樣にされようと、默つて見流してゐた。傍にゐる私は、

自分の財布を拂いても、いくら警戒の言葉を盡して見ても、とてもテレエズの利益になるやうなことはないと思つて、いたいたしい心てそれを見てゐた。寧そ彼女を母親と斷れさせようともして見た。其のたんびに彼女は左右を振つた。私はその量見を見あげたものだと思つて、ますます彼女を尊む心を加へた。しかし、その左右のために、テレエズも私も損害を受けることは依然前と少しも變らなかつた。母親やら、外の家族の者等に、すつかり身をうち任せてゐて、私の事も、自分の事も拋棄つて置いて、專ら然ういふ人達の爲に立ち働いてゐた。彼等から來る入れ智慧が、彼女に有毒てあつたと同じやうに、彼等の貪慾も、また彼女を窮地へ陷れることに於いて讓るものてなかつた。とにかく、彼女の天賦の順性なり、又私に對する愛の力て、全然彼等の奴隷となるやうなことはなかつたにしても、私の頻りと注ぎ込んだ教訓の效果が、大半殺がれて了つたことは疑ひない。出來得るかぎりの手段を取つて、二人が同一體にならうとして藻掻いても、それがために、何時までも引き別れてゐなければならなかつたのてあることも疑ひない。

私の優しい心を傾け盡して、誠實な愛を注ぎ、向うからもそれに應ずるだけの情

を寄せて來てゐるにも拘らず、私の心の空虛は、依然として空虛のまゝで棄てられてゐた原因は、全く茲に在るのであつた。子供でも出來たら、この空虛が充たされるであらうと思つた。その子供も出來るには出來たが、それがますます面白くなかつた。斯うしためちやめちやな家庭で育てられたならば、甚麼ひどい人間に仕立てられて了ふことかと思つて慄へた。それから見ると、育兒院で教育された方がどの位危險が少くて濟むか知れぬ。フランキヤイユ夫人に出した手紙にも、子供を入院させた理由を細細と書いて行つたが、實際最も有力であつたこの一つの理由だけは、態と書かずに置いた。私の心では、餘りな恥を辯明しようために、自分の愛する女の家族を惡者にして了ふのが、いかにも忍びないやうに思つたからである。が、現にその家族の中から、何と言譯をしても救ひ得られぬあいふ碌でなしの兄弟が一人出てゐるのであるから、それでも尙且、その兄弟なぞと同じ樣な教育を受けさせるために、生んだ子供は家へ置いておいた方がよかつたらうと、眞逆誰も言ふ人はあるまい。

強い欲求は感じてゐながら、この親みの味を心一ぱいに味ふことは、到底わが力

に能はぬことだと思つた。其處から爲方なしに種種な補充を盡つて見た。が、やはり空虛はその儘であつた。唯幾らかそれを忘れるやうなことにだけはなつた。全く私と一つ心の友といふものがない以上、已むを得ず、私の惰性を刺擊してくれるやうな友を擇ばねばならぬことになつた。斯ういふ譯から、ヂドロオや、コンヂヤックとの交情を拓き且溫めるといふ方針を取つた。グリムとも新たに交誼を結んで、是はまた格別懇親な間になつた。そして其の末には、前に話した論文の所爲で、今まで自分が然ういふ方面とは永久絕緣になつてゐたと思つた文壇の眞中へ、知らぬ間にまたしても引つ張り出されるやうな、憂い目を見なければならぬことになつてゐた。

私の初めての發足は、一つの新しい道を展げて、他の一つの知識界へと私を導いた。その世界の組織の純一、崇高なのに、出會した私は、心に一種の熱を起さずにゐられなかつた。嘗てその組織を研究して行く間に、私の眼へ這入つて來るものは、ただ傳習思想の誤謬と愚昧、社會狀態の壓抑と悲慘、然ういふものばかりであつた。愚かな迷ひの心から、自分こそすべて是等の幻影に類するものを滅盡せしむべき

任を負つた者だと、可矜しくも思ひ込んだ。然うするには身を以つて率ゐると言つた氣で、まづ自分の主義と實行とを一致させねばならぬと信じて、異常な行動を取つた。がそれは永續させるに由なかつた。その實際を見た似而非親友達は、默つて許して置けなかつた。最初の間は、私は大痴漢に見えた。それを私に凝と我慢してゐられるだけの耐忍力があつたならば、終には光ある人間ともなり得るのであつたかも知れぬが……。

それ迄の私は人の善い人であつた。此の時から後は、著しく道德の色を帶びて來た。私の頭腦がまづ其の道德に醉はされて、それからだんだん胸の方へと及んで行つた。その胸の邊りに榮えた「虛誇」の草は、ことごとく根扱ぎにされて了つて、その枯株の間から、ぽつりぽつり新芽を萌き出して來たのが即ち尊むべき眞の矜誇」であつた。私は何物をも矯飾しなかつた。唯有るが儘の己を見せた。斯ういふ大動亂が破壞力を逞しくしたのは凡そ四年間に亙つた。その間、天と自分との間に在る人の心に起り得る程の、大且善なる思想で、一つとして私にも起らないといふものはかなつた。私が突如として雄辯になつたのは是からであつた。又私

を燒きつくしたこの眞の靈火が、私の最初の作物中に燃え擴がつたのも是が爲であつた。その靈火が四十年の間微かな煌きすら見せなかつたは、全く導火を點ける折がなかつたからだ。

眞に私の心は、化へて新たにされた。併し私の親友も相識も、それを認め得なかつた。私は最早臆病な、そして謙遜を通り越した羞恥家ではなくなつた。顏も得出さぬ、口利くことも得せぬといふやうな者でなくなつた。一言のなまめいた言葉で心をゆらめかすやうな人間でなくなつた。女の視線に顏色を染めるやうな人間でなくなつた。大膽な、傲慢な、勇猛な私の心には、純一なだけ、それだけ堅固な信念が始終停つてゐた。決してそれは外部的のものでなかつた。當代の道德や、敎訓や、偏見などを深く省察して行くと、悉く憫笑の種ならぬものはない。然ういふ憫笑されべき者どもが、自分を冷笑しても、這箇は一向無感覺である。宛も指頭で蟲螻を捩り潰すが如くに、彼等の小生意氣な調戲を、私は文章でもつて捩り潰して了つた。大變な變り樣ではないか。二年前までは、そしてまに十年の後には、言ふべき事用ふべき言葉をすら知らなかつたこの同じ人間の辛いするどい嘲罵を、

巴里中が口から口へ傳へた。一ばん私の天性と反對な境涯、それが私の安住の地であつた。一個の別な人間のやうに、我を忘れて了つたといふことは、私の生涯の中にもちよいちよいはあつたが、それは眞の瞬間に止まつた。が、今度のなぞも先それを似た樣なものと想へば、大凡は中つてゐる。しかし今度のは、六日、六週間ぐらゐの間の事でない。奈何して六年近くも續いた上に、まだまだ續くかと思つてゐた位であつた。ところが或る特別な事情が起つて、其處で行き止りになり、到頭自分の本然性から超越したいと思つた事も慨はないで、また舊の持前に復るやうになつた。

這の「變化」は、私が巴里を去るとすぐに始まつた。此の大都に充滿する病弊を、眼にしてゐればこそ、自づと癇癪の種にもなるので、見ずにさへゐれば何ともない。其處の人達にも出遇はなくなつて了つてからは、彼等を憫笑することも罷まつた。邪曲の刃を磨ぐ者も居なくなつて了つてからは、彼等を憎惡することも罷まつた。固より私の感情に憎惡の傾向などは微塵もないのであるから、斯うなれば唯もう彼等が可哀さうに思はれて、彼等の藏してゐる惡意をさへ容してゐる心になつて

了つたのである。壯烈と言はむよりも、和順と言つた樣なこの境涯は、久しく私を抱き込んでゐた那の熱狂を冷させて了つた。そして他も氣づかず、自分も知らぬ間に、何時といふこともなく、引つこみ思案な、お上手者の、臆病な、一言でいへば那の以前のジャン・ジャックといふ人間に出戻つて來たのであつた。

これが若し、以前のジャン・ジャックに復つた、といふだけで事が濟んだのであつたら、世話はなかつたのであるが、生憎それが、其處迄で止らないで、非常な速度で今度は反對の方角へ無暗と私は引つ張られて行つた。ゆらめき出した精神は、直押に唯「安息」の道へと志すばかりになり、しかも一旦擺動癖の附いた心は、絶えず新たな元氣を恢復し恢復しして、行く處まで行き著いて了はないうちは、奈何しても已まないといふやうな態になつて來た。此の第二回目の自己革命について、もつと詳しく話して見たい。人間に類例のあるまい」と思はれる、恐怖すべき運命の一期が、茲に劃られてゐるのである。

隱遁所ての家族と言つたら、たつた三人きりしかない。安靜な、閑寂な暮しの間に、自然と互ひの親みが加はらねばならぬ筈てある。テレエズと私との間だけては、全く豫想したとほりに行つた。二人が顏と顏を寄せて來て、樹蔭の樂しい對話に魅せられた時間も少くなかつた。滅多には感じられない溫味てあつた。彼女はそれに就いて、今まて私の氣づかなかつた程の興味を持つて來た。私の前へ彼女の心の全面を展げて見せた。長い間私には默つてゐるやうにしてゐた、母親や、家族についての種種な入譯をも、もう包まず言ひ出すやうになつた。ヂゥバン夫人が私へと言つて、夥しい贈饋を持たしてくれたのを、私が氣にても觸へると思つて、那の惡婆が、自分とそして外の子供等て、悉皆分割にして了つた事、テレエズには其の斷片も與らなかつた事、私に告げ口をせぬやうに、聒く口止して置いたのを、この哀れな娘が素直に其のとほり守つてゐたといふやうなことまて、皆知れて來た。

まだ其位の話てなく、聽いて駭とした事がある。ヂドロオとグリムが、幾度か母親なぞと相談して、私とは家族の緣を切らせて了はうとしたのを、テレエズが肯かなかつたために、其なりになつてゐたところ、それから後、またをりをり此の二人が

母親と祕密の談合をしてゐるが、話の魂膽は全くテレエズには解らぬ、といふ事てあつた。其の中に贈饋を使つたり、何だかがたすた往復をしてゐる氣勢だけはテレエズも勘附いたけれど、何にしろ祕密に、祕密にと言つてしてゐることてあるから、甚麼動機のある事か、それは彼女に全く知れなかつた。私達が巴里を發つた頃には、既う大分前から、母親が一月に二三度つつは缺かさずグリムを訪ねて行つて、密密話て時間を取つてゐたが、其の話は奈何いふものか、他に聞えることを氣遣つて、附添の給仕まて何時も遠ざけて了ふやうにしてゐた。

その動機を斯う私は考へた。大方またエビネエ夫人の力て、食鹽の小賣店か、煙草屋ても出させてやらうからと言つて、テレエズを其の中へ捲き込まうとしたやうな話なのてあらう。利益問題てみんなを釣らうとしてゐるのだと考へた。家族を養ひかねる場合ては、家族があつては、私まて奈何することも出來まいといふやうな事を聽かされたのだ。それなら別に惡氣てしてゐることてもないから、私も强ち腹は立たぬ。が唯一つ腑に落ちない、癪に觸る事は、母親の方の祕密てある。のみならず母親は、日に增し私へ機嫌とりどりに、厭に佞媚がましい事を言ひかけ

て來るやうになつた。そして蔭てはテレエズに、餘り亭主を大切にし過ぎるの、何でも口走つて了ふの、間抜けな女だの、終には飛んだ目に遭はされることも知らないでゐるの、といふやうなことを言つて、呶鳴りつけてばかりゐた。

この女の十八番は、一擧に十倍の利益を搔攫つて行くことであつた(譯者云。慣用語に tirer d'un sac deux moutures といふのがある、一擧兩得の意。原文には其の deux (二)が dix (十)になつてゐる)。甲から貰つた者は乙に匿して置くことが巧かつた。奈何いふ人から贈つて來た物でも、私には些とも知れなかつた。慾張りは幾ら慾張りでも、我慢の出來ぬことはないが、その陰險と來ては、義理にも見逃がして置けなかつた。彼等母子の幸福を自分の幸福と見てゐる私ではないか。其の私に匿さなければならぬといふやうな事が何があるのか。私がテレエズにしてやることは、皆自分のためだと思つてしてゐた。しかし、母親にしてやることは、母親の方で有り難いと思はなければならぬ筈であつた。少くも娘にだけは禮でも言つて、その娘が大切にしてゐる亭主なら、娘の爲と思つてでも、私に善くせねばならぬ筈であつた。私は母親を零落のどん底から救ひ上げてやつた。彼女は私に縋つて

口を糊してゐた。益になるやうな種種の傳手をこしらへてやつたのも、決して誰のお庇でもなかつた。長いことテレエズは、自分の勞働で母を養つて來たが、今では私の麪包で養つてゐる。何一つ爲てやつたことのない娘に、何もかも爲て貰つてゐる身分である。外の子供等は、母親の身代を潰してまで、それぞれ婚資をして貰つてゐながら、その親の生計の足し前でも貰ぐことか、反つて彼女と私の財産をまで喰ひ耗した。然ういふ境涯に喘いでゐる母親は、私をば唯一の友、唯一の保護者として見なければならず、又私の身の上の事件に匿し立てをして、一つ家の中で裏切するやうな申し合せなぞする大不心得は勿論の事で、是は當り前なら、何事に依らず、私の利害に關つたやうな事があれば、聽き込み次第、正直に知らせて來なければならぬことと思つた。であるから、彼女の道ならぬ祕密を、私は孰の目で看破ることが出來よう？　殊に彼女が娘に注し込まうとして骨を折つてゐる其の感情を、私は何と考へてよいのであらう？　義理知らずにも驚くではないか。まして私を娘にまで傳へようとして藻搔いてゐるのだ。

斯ういふ考が昂じて終に彼女に對する感情が破れた。蔑視ることなしに彼女

を見ることが出來なくなつた。ても自分の伴侶の母と思へばそれだけに尊敬をも拂ひ、何事につけても、實の息子のやうな態度をあらはすことを忘れなかつた。が、何時までも此の母と一緒には居たくない。此の束縛を辛抱する根氣に竭きた。

手が達きさうになつて、また取り逃した幸福の例を、茲でも見ることが出來る。しかもこれについては、私に何の過失もなかつた。母親が性の善い人間でさへあつたら、私達三人は、幸福な生涯を終へて、最後に生き殘つた一人だけが、悲しい思ひをするぐらゐで濟んだのであつた。ところが、實際は然うでない道に出たといふことが聽て知れる。其の時になれば、此の運命が、私の力で自由になるべきものであつたか、なかつたかといふことも判斷されよう。

テレエズの心はもう悉皆私の方へ傾き切つて、母親自身は彼女に對して無能力者になつて了つた。然う解ると必死にその權利を回復さうと焦つた。テレエズの斡旋で、再び私と親み合ふことのかはりに、私をしてテレエズを疎ましめるやうなことをした。其の一つの手段として、彼女は自分の味方に、家族の者等を呼び集めた。最初私はこの仙居へは、外の者は誰も連れて來てはならぬといふことをテ、

レエズに命じて置いた。テレエズもその時には、諾と言つて承知した。偶と私の留守の間に、テレエズに相談もしないで、多勢の者を母親が呼び入れて了つた。引き續きテレエズに迫つて、この事を私に知らせずに置くことを約束させた。既う第一歩が動いた後は、あとはもういと易い話だ。愛人に對して一度祕密を包むと、その後は何事を祕密にしても、毫しも後目痛いといふやうな氣がしなくなつて了ふ。私がシヴレットに出掛けるとすぐ、仙居の方へは珍客達が込み合ふほど寄つて來て、みんな手に面白い事の有りたけをして遊び拔いた。すべて氣前の穩かな娘の子に取つては、母親の威光といふものは、驚くほど利くものである。それだのに、此の娘ばかりは、母親が甚麼にして引き摺り込まうとしても、その聯盟の中へ加はることを拒んだ。母親は何處までも決心を飜さない。一方で娘や私を見ても、唯喰つて行かれるといふだけの身分で、それ以上に何の見込もないが、此方にはヂドロオ、グリム、オルバック、エピネエ夫人といふやうな人達が揃つてゐて、物は呉れるし、莫大な約束までしてくれた事といひ、收稅請負人の夫人や、男爵ともあらう人たちが、斯うと言つて呑み込んだ事に、嘘があらうとは奈何しても彼女に思へなか